

# 市民の参加と協働を進める コーディネーション研究集会

〇〇〇 〇〇〇〇  
違いをチカラに、多様性を地域の当たり前  
～あつまれ！つながれ！課題に向き合うコーディネーター～

2024 2.23 金・祝 ▶ 2.24 土

## 報告書

越境×対話×共創

認定特定非営利活動法人



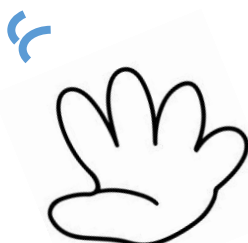
# 日本ボランティアコーディネーター協会

Japan Volunteer COORDINATORS Association

## 市民が主役の、豊かで創造的な社会をつくる

2001年1月に設立（同年8月に法人化）したネットワーク型のNPOです。

市民が主体的に問題解決に取り組む社会を実現するために、一人ひとりの社会参加意識を高め、積極的に行動することを応援する専門スタッフとして「コーディネーター」の存在が重要と考えています。多様な分野で活動するボランティアコーディネーターの専門性の向上と社会的認知を進めるとともに、地域や組織のなかに“ボランティアコーディネーション”のチカラを身につけた人々を増やしていくためにさまざまな活動をしています。



### <私たちのミッション～事業・活動の5つの柱>

- ① ボランティアの魅力と可能性を伝える
- ② ボランティアコーディネーションの機能を普及させる
- ③ ボランティアコーディネーターのネットワークを確立する
- ④ ボランティアコーディネーターの専門性を向上させる
- ⑤ ボランティアコーディネーターの社会的認知を促進する

### <もっと知りたい！ 学びたい！ あなたのために>

#### ボランティアコーディネーション力<sup>ちから</sup>検定 ～あなたもチャレンジしてみませんか？

3級は、ボランティア活動経験があればどなたでも受験できます。

ボランティアコーディネーションの実務経験者なら、

ぜひ2級、1級と段階的に挑戦してください。

—各種の研修や講座、年に1回の全国研究集会も開催しています。



#### コーディネーション力を高めるための書籍を販売

『検定公式テキスト』や『ボランティアコーディネーター基本指針』『グッドプラクティス事例集』など、コーディネーション力を向上させるために役立つオリジナル書籍を販売しています。

詳しくは公式ホームページをご覧ください▼

■事務局 認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-13 末よしビル別館 30D

TEL 03-5225-1545 FAX 03-5225-1563

E-mail : [jvca@jvca2001.org](mailto:jvca@jvca2001.org) <https://www.jvca2001.org/>



はじめに

1994年にスタートし、1996年から毎年開催してきた「全国ボランティアコーディネーター研究集会(JVCC)」。2021年から2回、オンラインでの「市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会」の開催を経て、前回から「市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会(JVCC)」となりました。なお、英語表記は「Japan Voluntary action Conference on Coordination: Mobilizing people for action」です。

今回のテーマは、「違いをチカラに、多様性を地域のあたり前に～あつまれ！つなぐれ！課題に向き合うコーディネーター～」。前は、ハイブリッド形式での実施ではありましたが、分科会はオンライン実施の割合が多くなっていました。今回は、オンラインのみの分科会もありましたが、対面の分科会の割合を増やし、リアルに会うことを重視しました。

また、コーディネーション研究集会になってから大切にしてきた「越境×対話×共創」の理念をベースに、様々な分野で活躍する参加者が、それぞれの知識や経験を持ちよることにより、「参加と協働」をさらに進める機会としたいと考えました。

なお、実行委員会のメンバーは、関東在住の方を中心に、これまで実行委員を務めていた東北、関西、九州の方にも加わっていただき、会議は対面も数回交えながら、オンラインで実施してきました。

集会当日は、多様な場面で、参加を進めるコーディネーターの皆さんに集まっていただくことができました。リアルに会って話し合うよさ、オンラインで参加できるよさ、両方を実感できる、充実した集会になったと考えています。あらためて感謝申し上げます。

この報告書が、地域での「参加と協働」を進める一助となれば幸いです。

2024年 3月

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会実行委員会  
委員長 鹿住 貴之  
実行委員一同

**市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会**  
**違いをチカラに、多様性を地域の当たり前**  
**～あつまれ！つながれ！課題に向き合うコーディネーター～**  
**JVCC2024**

## 目次

- P.
- 03 はじめに
  - 04 目次
  - 05 開催概要
  - 06 オープニングセッション：「共生社会」をめざすうえで自覚しておきたいこと

---

### 分科会

- 22 A1 いま、福祉施設・病院でどんなコーディネーションをめざす？
- 24 A2 地域の交流拠点とまちの幸せな人たちとは
- 26 A3 地域は、文化の違う多様な人々とどのように共生していくのか？
- 28 A4 他分野との協働による地域づくりを考える
- 30 A5 その表現ってどうなの？
- 32 A6 違いや多様性は“混ざる”からこそ意味がある
- 34 A7 高齢化・人口減少コミュニティにおけるコーディネーション
- 36 A8 ボランティアは「オワコン」か？
- 38 B1 ボランティア、管理しすぎていませんか？
- 40 B2 地域づくりのパートナーに生協を選んでみませんか？
- 42 B3 「ホンモノの地域共生社会」を実現するために大学に求められるコーディネーションとは
- 44 B4 改めて「コーディネーター」に向き合う哲学対話
- 46 B5 どうするボラセン！
- 48 B6 地域の多文化共生をのぞいてみよう
- 50 B7 子どもの事例からセーフゲーディングについて学ぶ
- 52 B8 ボランタリーな取り組みを誘発する「学び合いの場」のプロデュース

- 
- 54 クロージングセッション：明日からのコーディネーションのための振り返りと分かち合い
  - 59 参加者交流会 / つながり広場
  - 60 データでふりかえる JVCC2024
  - 63 実行委員名簿・実行委員会開催実績

## 開催概要

2024年2月23日(金・祝) 10:30~19:00  
2月24日(土) 9:30~15:30

参加費 一般 7,700円 JVCA正会員・準会員 6,600円 参加者交流会費(任意) 3,000円

方法 リアル会場(東京ボランティア・市民活動センター)&オンライン

参加者192名 + 登壇者・協力者55名 + 実行委員40名 計287名

### 主催者

認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会  
市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 実行委員会

### 協力

日本生活協同組合連合会  
一般社団法人多文化社会専門職機構(TaSSK)  
認定特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク  
(JVOAD)  
社会福祉法人東京都社会福祉協議会東京ボランティア・市民活動センター  
社会福祉法人大阪ボランティア協会

### 後援

社会福祉法人全国社会福祉協議会  
社会福祉法人中央共同募金会  
認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会  
認定特定非営利活動法人日本NPOセンター  
公益財団法人日本YMCA同盟  
特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会  
一般社団法人日本協同組合連携機構(JCA)  
一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR)  
特定非営利活動法人国際協力NGOセンター  
一般社団法人環境パートナーシップ会議  
ESD活動支援センター  
一般財団法人児童健全育成推進財団

OP

## オープニングセッション

# 「共生社会」をめざすうえで自覚しておきたいこと

## マジョリティの側が陥りやすい「多様性」の落とし穴

市民の参加と協働を進めることを通して、社会課題の解決に取り組むことが、コーディネーターの大切な役割です。そもそも、コーディネーションには「対等、同格にする」という意味があり、私たちは人や組織を「対等につなぐ」ことを大切にしてきました。

しかし、日々のコーディネーション実践において、社会にある構造的な差別や偏見、人々のなかにある固定観念や社会規範にふれ、葛藤することはないでしょうか。その一つが、「マジョリティ(多数派)」側が持つ特権です。誰しも、その所属する社会集団によって、マジョリティ性を持っていたり、マイノリティ性を持っていたりしますが、マジョリティ側は労なくして得る優位性、つまり、特権を有することができています。しかしながら往々にして、その特権を持っていることには気づかず、無自覚でいるもの。マイノリティ側は差別や偏見の対象になりやすいのですが、マジョリティ側はそうはならず済むからです。

そこで、オープニングセッションでは、今回のテーマでもある「違いをチカラに、多様性を地域の当たり前にするために、まずは私たちがコーディネーションするうえでしっかりと自覚し、意識しなければならない「マジョリティの特権」について学び、コーディネーション現場で起きているさまざまな出来事や課題とクロスしながら深めていきます。

### ●登壇者



#### 出口 真紀子さん (上智大学外国語学部 教授)

アメリカ・ボストンカレッジ人文科学大学院心理学科博士課程修了。専門は文化心理学。上智大学では「差別の心理学」「立場の心理学:マジョリティの特権を考える」などの科目を担当。監訳書に『真のダイバーシティをめざして—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』(上智大学出版)、著書に『多様性を再考する—マジョリティに向けた多文化教育』(分担執筆「第4章 特権の概念」、「第6章 日本人の特権を可視化するための尺度の開発」、上智大学出版)などがある。



#### 新居 みどりさん (NPO 法人国際活動市民中心(CINGA) コーディネーター)

京都府出身。早稲田大学大学院文学研究科修了。青年海外協力隊帰国後、国際協力ではなく国内の在住外国人にかかわる仕事に従事したいと思い、仕事をしながら大学・大学院で多文化共生領域のコーディネーター論を学ぶ。東京外国語大学多言語多文化教育研究センター、国際移住機関(IOM)コンサルタントを経て、現職。社会課題に即した事業を、CINGAの専門性とメンバーの強みを生かした立ち上げることが主な業務。2016年より三鷹市民生協力員、2019年より民生・児童委員を務めて、地域における多文化共生についても日々実践模索中。



#### 長谷部 治さん (神戸市社会福祉協議会 地域支援部担当課長)

岐阜県関市出身。大学時代に阪神・淡路大震災を契機にボランティアとして神戸へ来たことをきっかけに社会福祉協議会に入職。以降27年、福祉教育・ボランティア学習やボランティアセンターの担当。現在は神戸市社協に勤務しCSW、生活支援Co、こどもの居場所(子ども食堂、学習支援)、災害ボランティアセンターの4領域を主に担当。休日は家族でひたすら釣りに勤しむ日々で日本全国釣った県塗りつぶしに挑戦中。

### ●コーディネーター



#### 妻鹿 ふみ子さん (JVCA 代表理事 / 東海大学健康学部 教授)

JVCA 代表理事。大学では地域福祉を教えつつ、神奈川県社協の「ロコ発掘調査隊」隊員として、コミュニティのしくみやシステムを変えることに果敢にチャレンジしていくことのできる地域とできない地域の差はどこにあるのかを考える日々。都市の郊外は「ヤバい」。

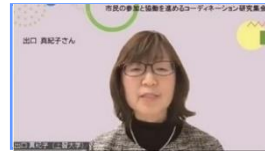
# 「共生社会」をめざすうえで自覚しておきたいこと ～マジョリティの側が陥りやすい「多様性」の落とし穴～



妻鹿: 今回の研究集会のテーマは『違いをチカラに、多様性を地域当たり前に』と設定しています。「違いをコーディネーションの力にしていますか?」「多様性を尊重していますか?」あらためてこう問われると、コーディネーターは「そんなことはやってる」「当たり前のこと」と答える方が多いかもしれません。私たちコーディネーターは違いに橋をかけたり、多様性をウェルカムしてきたり、と、社会全体のなかでは比較的頑張ってるこのテーマの実践をしてきていると思います。でも本当にそうでしょうか? 今日は少し違った切り口から私たちの実践を問い直す機会としたいと思います。

それでは最初に、キーノートスピーチとして、出口真紀子さんからお話をいただきたいと思います。

出口さんの書かれたものを読んで、ボランティアや市民活動の側は、基本的には善意の人だけれども、その善意から発する特権をもつ側特有の言動などが、もしかしたら支援を求めている人を傷つけていることがあるのではないかと。善意から生まれている「たちの悪さ」みたいなものがありそうで、ちょっとドキッとしました。自分自身、あるいは皆さんが活動者の側の特権について考えるきっかけを「マジョリティ特権」という言葉の意味から紐解き、問題提起をいただけそうで、楽しみにしています。それではよろしくお願い致します。



キーノートスピーチ  
出口真紀子さん

出口: 皆さんこんにちは。上智大学外国語学部英語学科の教授をしております出口真紀子と申します。専門は文化心理学で、大学では「差別の心理学」や「立場の心理学: マジョリティの特権を考える」といった授業をしています。

## ■自身の特権・マジョリティ性の自覚から

早速ですが、本日のテーマは「マジョリティ側の特権について考える」ということです。なぜマジョリティ側の特権について考えなければいけないのか?

皆さんのようにボランティアや支援する立場にいらっしゃる方は、本当に善意のある方たちが圧倒的に多いです。しかし、自分自身も持っているマジョリティ性、つまり特権に無自覚だと本当の意味で他者に寄り添った支援がなかなかできない、というのが私の考えです。本日の話しを通して、自分自身のマジョリティ性による特権を可視化し・自覚することで、より良い支援者になれるヒントとなれば大変幸いです。

## ■特権の定義とマジョリティ・マイノリティの捉え方

「特権」とは何か。それは英語ではプリビレッジ (privilege) という言葉になるのですが「あるマジョリティ側の社会集団に属していることで、労なくして得ることのできる優位性。そこには権力も含まれる」という定義です。ポイントとしては、この「労なくして得る」、つまり努力をしたから得られる優位性ではなくて、たまたまマジョリティ側の社会集団に生まれてきた、あるいは属していることで自動的に受ける恩恵という風に、視点を変えて捉えるという概念なのですね。

「日本で性的マジョリティ側の社会集団に属している方というのは、どのような自動的に受けられる恩恵があるでしょうか?」というふうに視点を変えてみます。例えば「異性愛者として生まれてきた方は日本では法律婚ができる特権がある」あるいは「シスジェンダー

(cisgender)、生まれた時の性別と性自認が一致している方は、例えばトイレを公共の場で使いたいと思った時に、迷わずに自分が使えるトイレがあるという安心感をもっていただける特権」といったような意味で使えます。

私たちは多くの場合、このマジョリティ性とマイノリティ性の両方を抱えて生きている生き物です。

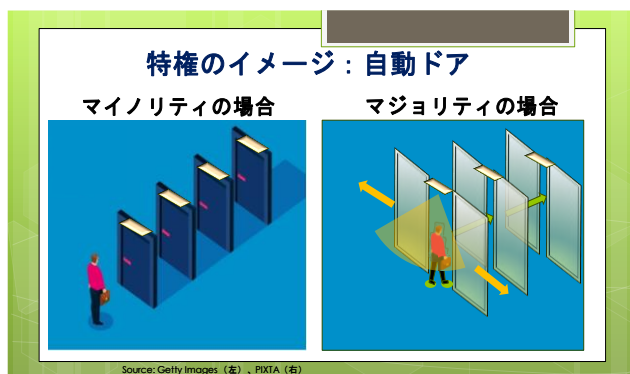
ここに七つの属性(①人種・民族、②ジェンダー、③性的指向、④性自認、⑤学歴、⑥社会階級、⑦身体・精神)をあげましたが、皆さんはマジョリティ側にいらっしゃいますか？ それともマイノリティ側でしょうか？ 自分はすべてマジョリティ側の人間だという場合は、それはそれで意味があることだということを踏まえていただければと思います。すべてがマジョリティ側の方というのは、日本社会において権力にアクセスしやすい立場にいるということになるのかと思います。

また、このマジョリティ・マイノリティのすごく大事なポイントは、数の問題ではないということです。「マジョリティ」というと過半数というふうに定義する人が多いのですが、ここでは数のことは問題にしていません。どちらにより権力・パワーがあるのかということがマジョリティの定義になります。なので、アメリカの場合は人種だと白人がマジョリティでより権力をもっています。

もうひとつここで大事なポイントは、このマジョリティ・マイノリティというのは、文脈や状況によって変わることです。私は日本では日本人でマジョリティですが、30年ほどアメリカ住んでいて、非白人なので、アメリカではマイノリティ、というふうに、本当に違った体験をします。

### ■「自動ドア」から特権をイメージする

特権の話に戻りますが、特権というのはとてもイメージしにくいので、私なりに考えたのがこの「自動ドア」



の例えです。

特権を有している人が、目的地に向けて前に進もうとした時に、いろいろな自動ドアがサッと開くので、その人を阻むものがなく、どんどん前の方に進んでいきます。それがマジョリティの特権なのです。そして、毎回、毎回ドアが開いてくれるので、この人はドアが存在していることや、ドアが毎回開いてくれていることにすら気づかなくなります。つまり、ドアが開く状態が、普通・当たり前前の風景になっていきます。

ところが、マイノリティの場合は、同じように目的地に向かって進もうとしても前に進めないといったようなことが起きます。つまり、ドアが開かないのです。それで「すみません開きません」と苦情を言ってやっと開けてもらえたり、あるいは自分自身でぐっと無理やりこじ開けてなんとか通れる。あるいはどれだけ頑張っても声をあげても開けてもらえないということもあります。

そういう場合、先の方に行ったマジョリティ側の人が振り返って後ろの方にいる人を見た時に、マイノリティの側の人が後ろにいる理由として、その人は「やる気がないのではないか・努力が足りないのではないか・そもそも能力がないのではないか」と思ってしまい、前に進めない原因である「自動ドアが開かない」という構造的な障壁が見えず、個人の資質の問題としてしまうことが多くあります。

### ■差別をつくりだすセンサー

ではこの自動ドアを開け閉めしているのは一体何でしょうか？ 正解はセンサーです。自動ドアにはセンサーが付いています。このセンサーこそが、マジョリティの人は通してマイノリティの人は通さない、といった差別を行っていることがわかります。私たちはこのセンサーこそを、より公正なものにしていかなければいけないのです。では社会のセンサーにはどのようなものが含まれているのでしょうか？

差別には3つの形態があるといわれています。また、『差別はたいてい悪意のない人がする』という本が数年前に出ましたけれども、その通りですね。日本の教育だと、差別というのは、非常に悪意のある人がするものだとか教えている場合が多いと思うのですが、実は差別というのはもっと複雑で、今から3つの形態につい



てお話ししたいと思います。

まず、「直接的差別」。これは個人レベルの差別で、AさんからBさんへ侮辱的な発言をするといった差別行為です。こちらは「ああいう悪い人になっちゃいけませんよ」といった場合に使われるような、みんながわりと納得する差別の形態だと思うのです。

なかなか語られないのが「制度的差別」です。法律、教育、政治、メディア、企業といった、制度のなかで行われるシステムチックな差別行為になります。こういうルールを決めている人たちは、それぞれがかなりマジョリティ性の特権や権力をもっていることが多いので、マジョリティ側により優位な制度やルールができていく状態なので厄介です。

最後に「文化的差別」で、これはいってみれば空気のようなもので、私たちが内面化している価値観ともいえるかと思います。このなかには、アンコンシャス・バイアス(unconscious bias)といった、無意識の差別意識もあるかと思います。あとはステレオタイプですね。「女の幸せは家庭のなかにある」といったようなジェンダー規範を信じている場合は、非常に女性に抑圧的になります。日本社会を見てみると、差別を語ることはタブー視されているとか、マイノリティが声をあげることがなかなか難しいといったような文化的背景も、かなり強力な差別だと思います。

先ほどの「センサーとは何か？」という話ですが、このセンサーにはこうしたさまざまな差別の形態が含まれており、これによってなかなかマイノリティが前に進めない、一方でマジョリティは前に進めるといったようなことが起きています。

### ■特権と差別は表裏一体

では、マジョリティ性を多くもっている人の集団とマイノリティ性を多くもっている人の集団がどういう体験をしているか比較してみます。マイノリティの集団は差別を経験します。疎外感を感じることが多い。ステレオタイプ的な見方をされる。個人として見られる前に集団の一員として見られてしまう。例えば私もよくアメリカでは「マキコ、日本人としての意見を聞きたい」と聞かれることがありますけれども、なかなか日本人(として)ではない(個人としての)「マキコの意見」を聞かれたことがないといったようなことがあります。あとは

制度的・文化的差別の対象となり、偏見の目で見られ、不当なことで声をあげても「文句ばかり言っている」と責められる。

しかし、マジョリティ性を多くもっている集団の体験についてはなかなか語られないのです。今日のこの話はまさに「マジョリティ側がどのような経験をしているのか？」ということをも可視化するための講義なのですが、マジョリティ側はマイノリティ側と比べると、差別を経験せずに生きていられる特権がある。周りに同じような属性の人がいると疎外感も感じずに生きていられる。ステレオタイプで見られず「出口さん」というふうに、個人として認められ尊重されて扱われる。制度的・文化的差別の対象とならず、偏見の目で見られず、不当なことで声をあげても周りがひとまずは聞く耳をもってくれる。こういったような体験をしていることを、私たちマジョリティ側はきちんと可視化すべきかと思います。

つまり「特権と差別は表裏一体です」というメッセージをお伝えしたいのです。一方に普通の人がいる、もう一方でかわいそうなマイノリティがいるのではなく、一方では構造的差別に苦しむマイノリティと、もう一方で、同じ構造的なかでそうした差別を受けなくてすんでいる側がいる、というのが現実の正しい見方ではないでしょうか。

### ■支援者と被支援者の力関係の非対称性への認識

この特権という概念を、私はペギー・マッキントッシュさんという白人女性から教わったのですが、彼女はこのように話しています。「白人である私は人種差別というものは、他人を不利な立場にすること、と教えられてきたが、その裏返しである自分を有利な立場にすることについて教わらなかった」と。これはまさに日本人としてもいえますし、さまざまなマジョリティ性をもっている人について同じようにいえるのではないのでしょうか。

何が言いたいかというと、「いい人」であることと「抑圧的」であることは両立するということです。いい人であっても自分自身のもっている特権に無自覚であると、マイノリティの人に対して抑圧的に振る舞うことは十分可能であるということです。

そもそも「特権」という概念ですが、特にアメリカで、

カウンセリング心理学の分野で「特権の無自覚性」が問題にされたということがあります。なぜカウンセリング心理学かというと、心理学でカウンセリングをしたいという方は多くの場合、いろいろな人を助けたい・手助けしたい・役に立ちたいと思い、善意をもってこの分野に来るわけです。

ところが、特権に無自覚な段階にいる白人セラピストが、差別を日常的に経験しているマイノリティのクライアントにあたった際、マイノリティが辛い状況を訴えた時に、セラピストが「人のせいにはばかりしていないで、もっとご自身が努力してはどうでしょうか」とか「周りのことを結構ネガティブに言うけれども、もっとご自身をポジティブなメンタリティに変えていきましょう」といったようなことを、善意で言うのです。

けれども、結局こうした言葉に傷つけられて、マイノリティのクライアントが2度とセラピーに戻ってこない、とか、カウンセリングに行かない、といったようなことが起きたのです。それを問題視したカウンセリング業界は、白人セラピストには、ちゃんと自分自身のもっている白人特権やその他の特権をきちんと可視化した上でカウンセリングの仕事をやってもらうために、多文化カウンセリングという授業を必修にしているプログラムが多くみられます。

ですから、支援する側と支援される側の力関係の非対称性をみつめることが大事かなと思います。支援者の方が権力をもっていること、支援される側に関する決定権をもっていることを自覚することはすごく重要です。また、「自分は支援されている側に置かれていない立場だから助言できている」ということを自覚することもすごく重要かと思えます。

## ■特権の自覚

そこで、構造的な差別を可視化するためのアクティビティがあります。“皆さんはそれぞれある国の国民で、全員がお金持ちになり、社会階層を上げる可能性を秘めているとします。その方法は配った紙をボール状に丸め、ゴミ箱に投げ入れることです。さあ、座ったところから投げましょう”というアクティビティです。

教室の前の方にゴミ箱を3つほど置くのですが、当然、前の列の人しか(紙のボールは)入らないです。後ろの席の学生はみんな「これでは不公平だ」と不満を叫

ぶのですが、一番前に座っている学生が「このゲームは不公平です」と言ったことは一度もありません。これは非常にアンフェアで、スタートラインが違うことで有利になる側と不利になる側がいるということなのですが、これこそが社会の縮図ともいえるのではないのでしょうか。

すなわち、一番前に座っている人は前しか見えていないので、あまり後ろの人のことを考えていない。後ろの方の人は全体が見えているので、社会の仕組みを一望できているという違いがあるのです。逆にいうとマジョリティ性が多ければ多いほど、自分には見えていないものがあるということを自覚する必要があるのではないかと思います。

このゲームの開発者は「あなたたちは教育を受けられる立場にいるという自分の特権に気づきましょう。そして教育という名の特権を活かして、自分より後ろの席にいる人の支援にあたりましょう」と学生に呼びかけます。なかなか前に座っている人は自分の特権に気づきません。「特権はもっている側には見えにくい」ということにです。

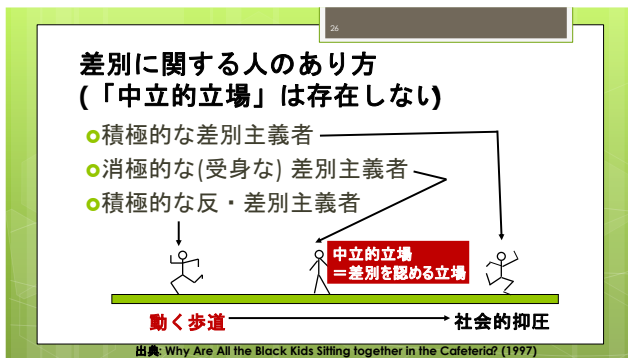
では、最も特権に気づきにくい人たちというのはどういう人かということ、世界的には「白人(特にアメリカ人)・男性・異性愛者・シスジェンダー・高学歴・上流階級・健常者」という人たちで、本当に自分の特権に気づきにくい。日本だと、“白人”のところを日本人に変えてみてください。やはり特権が多ければ多いほど、なかなか自分の特権に気づきにくいのではないのでしょうか。

石川准さん、障害のある社会学の先生ですが、彼はすごく重要なことを言っています。

「配慮を必要としない多くの人々と特別な配慮を必要とする少数の人々がいる、という強固な固定観念がある。しかし、そうではない。実はすでに配慮されている人々と、未だに配慮されていない人々がいるというのが正しい見方である」と。つまり、多数者への配慮は当然のこととされ、配慮とはいわれない。対照的に少数者への配慮は特別なこととして可視化されるということです。こここそがポイントで、私たちが多数者への配慮のことをどんどん可視化していかないと、マイノリティにちょっとでも配慮したら「それはマイノリティを特別扱いして逆差別ではないか」といったような反応がいつまでたっても起こるのではないかと思います。

## ■自分自身を可視化する

これは『差別に関する人のあり方～中立的立場は存在しない』というスライドですが、やはり今の社会は、放っておくと社会的抑圧の方に向かっていきます。



社会的抑圧の方に一緒に走っている人を「積極的な差別主義者」と呼ばせてもらい、反対方向に一生懸命走る人・動く歩道の抑圧のスピードを緩めようと頑張っている人は「積極的な反差別主義者」と呼ばせていただいています。

多くの方は立ったままで「私はいい人で何も悪いことはしていない・差別なんかしていない」と言っているのですが、大変申し訳ないですけれども、この何もしていないという時点で、これはやはり差別に加担しているとみなして、「消極的あるいは受け身な差別主義者」と呼ばせてもらっています。ですからここにいるみなさんも、いきなり後ろに向かって走れとはいいませんが、せめて後ろを振り向いて小さなステップを歩んでもらえたらと思います。

特権に向き合いにくい理由として、特にボランティアとか支援者をやっている方の多くは、「自分はすでに社会的に良いことをやっているのだからこれ以上自分が変わる必要はない」と思ってしまいがちです。けれども、やはり自分のもっている特権を可視化しないと抑圧的な言動をしかねないので、ここはぜひ見つめていただきたいと思います。

また、支援をする側でも自分のマイノリティ性により傷ついた経験が回復していない方もなかにはいるので、自分の傷ついたところが回復しないままで支援にあたると、弱い立場の人に厳しくあたる場合が少なくありません。つまり「私だって大変だったのに、なんであなたは」というようなことを要求することがあるので、自分の傷つきが未処理な状態のままで支援することはなるべく控えるようにするのがいいかと思います。

ある臨床心理士はこのようなメッセージを発しています。「支援する相手に“私だって傷ついたから、私たちは同じなのよ”と思うかもしれませんが、そうはいつでも、安全な場所から危険を冒さずに支援をしていることを忘れないでください。相談しに来ている人たちは、多くの場合、帰ったら地獄が待っている・戦場が待っているけれど、そのリスクを背負うことはないというのが特権です。でもその特権はすごく大事なもので、その特権があるがゆえに安心がある。それゆえに、いろいろな選択肢が見えるわけです。“この人たちは危険な場所で戦っている人たちだから、自分と同じように物事は見られない”ということをきちんと理解した上で、自分が見えている選択肢を提示していくことはとても大事です。相談に来る人に対して、特権のある人は父権的になりがちです。長期的な視野に立って“大丈夫だよ”とデンと構えつつも、必ず相手を尊重することを忘れないでください。」

皆さんもぜひ、これからは自分自身のマジョリティ性とマイノリティ性の両方について考えるように心がけてください。「自分には見えていないこと・考えたことがなかったことがある。それは、ひょっとして自分の属性においてマジョリティ側にいるからかも」という可能性を考えてください。そして、自分のマジョリティ性の部分で自動ドアが開く側にいるのであれば、すべての人にセンサーが平等に開くように、この構造的な差別を変える力に皆さん自身がぜひなっていただければと思います。ご静聴ありがとうございました。

妻鹿: 出口さん、ありがとうございました。刺さる言葉がたくさんあって、皆さんにも思い当たることがいろいろあったのではないのでしょうか？ いくつかポイントを整理しておきましょう。

属性のチェックがありましたけれども、私も、女性であること以外は全部マジョリティに属していて強い立場にあることにあらためて思い至りました。自動ドアの例えは、私たちの腑に落ちる話だったと思います。センサーがあるけれど、スーッと通っていく人はセンサーの存在に全然気がつかない。マイノリティの人にとっては、それが実は先に進みにくくされる差別構造で、マイノリティの人はそうやって自動ドアが開かない体験をいつもしているのだと。皆さん方は、おそらく、マイノリティ

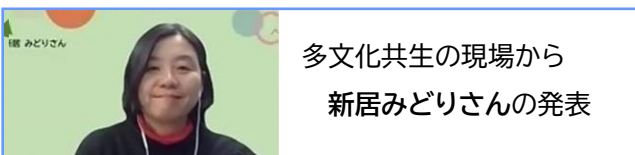
の方に寄り添う仕事や活動をされていると思いますが、マジョリティ側である自分がどのぐらいマイノリティの方たちのことをわかっていただろうかという気づきを得たのではないかなと思います。

特権は、もっている側には当たり前すぎてなかなか見えない、というご指摘。マイノリティの方は毎日ぶつかっているのに、私たちにはそれが見えていないという気づきはとても大事だと思います。

そして、いい人であることと抑圧的になることが両立するという。中立というものはないということもとても重要なポイントです。差別解消に興味を示せない人・意欲のない人にどうアプローチするかということも問われていますし、無関心は最も避けるべき、というメッセージも受け取らなければいけないと思いました。

**妻鹿:**ここからは出口さんのお話を受けて、新居みどりさんと長谷部治さんに、現場ではどうなっているんだろうかということ、共生社会という切り口からお話をさせていただけたらと思います。

まず新居さんからですが、おそらくマイノリティ性をもった外国ルーツの皆さんと向き合うなかで、今のお話から感じるどころがあったのではないかと思います。



**新居:**皆さんこんにちは。「NPO法人国際活動市民中心」、通称シンガ(CINGA)のコーディネーターをしている新居みどりです。私自身が日本国内に住む在住外国人の方々の活動に参加するようになって20年ぐらいになるかと思います。青年海外協力隊に行って帰ってきた後に再度協力隊をめざしたのですが、それ以上にもしかしたら国内にいらっしゃる外国人の方々の活動に意義があるかもしれないと思って、この世界に入りました。

今回のタイトルが『共生社会をめざすうえで自覚しておきたいこと。マジョリティの側が陥りやすい多様性の落とし穴』ということで、私は多文化共生、日本に暮らす在住外国人の皆さんとの活動のなかから、出口さんのお話を受けて感じたことなどを、パワーポイントを使

いながらお話ししたいと思っています。

## ■専門性のある人が多く支援に関わる NPO

私が働いている NPO 法人 CINGA(シンガ)は、2004 年にできてから、外国人の支援をしているのですが、もともとはシチズンズ・ネットワーク・フォー・グローバル・アクティビティズ(Citizen's Network for Global Activities)と名づけられたそうです。「市民のネットワークはグローバルな活動のために」という英語名称ですが、その当時、会員 40 名ぐらいでワイワイ話をして、「日本で活動している組織なのだから日本名をつけなきゃダメだね」ということで「国際活動市民中心」とつけたということでした。

実はこれは中国語で読むと中心というのがセンターという意味で、国際活動市民センターと中国語圏の方は読めるそうですし、もちろん英語が読める方々にもわかりやすい名前だといっていたのですが、日本国内においては「国際活動市民中心」ではよくわからない、と、あまり定着が進まず、結局 CINGA(シンガ)といわれています。

私たちの NPO には2つの特徴があって、1つは47名いる会員が、全員1990年代、2000年代から長きにわたって在住外国人支援にかかわる専門職あること。この方々、在留資格がないなど、目の前に同じ住民として暮らしている人たちが困っているという時に、「弁護士です」「行政書士です」「医師です」という方々が、自分の専門性をもって、ボランティアな活動として一緒に外国人相談をしてきた。そんな仲間が作った組織と聞いています。2つめが、ネットワーク型の中間支援組織であること。長く活動していくなかで、全国の外国人の支援をされている皆さんとネットワークでつながって、そして国際交流協会や行政も含めて直接現場で活動されている皆さんを後方支援する。CINGA はそういう中間支援組織の役割も強くもっています。

もうすぐ20年が経つのですが、現時点で職員が73名いて、日本国内における外国人支援または多文化共生領域の支援組織としてはかなり大きな組織になっています。多くの職員が働いているのは、外国人相談センターです。ご存知のとおり、外国人技能実習生という方たちがいっぱいいますけれども、その方々たちが困ったことがあったときに24時間相談できる相談セン

ターを外国人技能実習機構がやっている母国語相談です。外国人技能実習機構は、国が作った組織ですけれども、その相談センターを CINGA が受託して相談対応しています。そのほか、外国人総合相談支援センターとか外国人ワンストップ相談センターといったいくつかの相談センターを運営しています。

### ■CINGA におけるマジョリティ・マイノリティ

そういう組織ですが、今回、自分たちを見つめることが大事なポイントと思ったので、在住外国人の方のお話をする前に、自分の組織を内側から見つめた時に、一体どうなっているだろう、というところから考えなきゃいけないと思いました。

私のような NPO 職員はあまり多くないこともあって、結構マイノリティな存在だなあと感じる人が多いです。ちなみに、私たちの組織の職員構成は 1 対 3 の割合で外国人または外国にルーツをもつ人たちが働いてくれています。これもかなり珍しいと思います。先ほどの出口さんのお話では、数の問題ではないとおっしゃっていましたが、CINGA は圧倒的に女性が多い。社会において私は女性でマイノリティではあるけれども、CINGA においては女性の方が圧倒的にマジョリティ・特権側だなと思うこともあります。

私は CINGA で 12、3 年働いていますけれども、女性で連れ合いがいたりすると「女の人だから、家族を養わなくていいから、こういう仕事ができるのよね」といわれることが結構あったりします。一方、NPO で働いている男性に話を聞くと、世間の風当たりは強い、といった話を聞いたりします。労働契約の状況を見ても、社会保険の加入、つまりフルタイムで働けるかどうかを見ても、週 1 とか週 2 の勤務のメンバーが多いし、そんなに潤沢なお金を回しているわけではないので、なかなか厳しいなあと感じます。そういう組織で働いている私たちが外国人の方々、日本においてはだいたい今、人口比率 2.6% ですから、マジョリティ・マイノリティでいうと、マイノリティの方々になるんですが、その方々の支援をするという構造もまた、とても特徴的かと思います。

### ■組織内の特権性

また、多くの職員が複数言語を話せる人たちです。

日本語と例えばネパール語、日本語と中国語というふうに、複数言語を話せる人が多いのですが、働いているメンバーの国籍だけ見ても 20 近いので、共通言語である日本語をみんなで話しています。でも、そうなったときに課題だと思うのは、やっぱり日本語が母語の人、または外国人のなかでも日本語が上手な人の方がその場において力をもってしまうということ。みんなで議論しよう・みんなで話そうといったところで、その言葉の力・語学力が結構大きな影響を与えていることを自覚しています。

そして私たちの組織は「長」がつく人がいないのですね。課長とか事務局長という人がいなくて、全員がコーディネーターか、またはスタッフ。どちらかという水平方向の組織をめざしてはいるのですが、とはいってもやはりコーディネーターという人たちが結構大きな力をもっています。

私たちの組織は、その特権なり、マジョリティ・マイノリティというものは表裏一体だと思うんですが、そういう状態を交互に転換しながら動いているかな？ということ自問したりしています。

### ■在住外国人にとっての壁

そしてもうひとつ、日本国内における外国人の方々視点から見ると、やはり 3 つの壁といわれる「困ったこと」に遭遇しやすいということがあります。ひとつ目が在留資格というものをもって皆さん暮らしていることもあって、在留資格により制限がある“法律の壁”というのがあります。そして、日本語という“言葉の壁”というものも存在します。そしてもうひとつ大きなのは“心の壁”といわれていて、なかなか友達ができない、差別を受けるといったことが起きています。

ただ、今日の出口さんの話を聞きながらももう一歩さらに深めて考えた時に、その外国人の方々との、支援を含めて多文化共生をめざすというふうにいっているけれども、私はその多文化共生というものがふわふわしていたり、力強さをもっていないと感じるんです。それに対してこの王(ワン)さんという方が、2016 年に書いた文章が非常に心を打ったので、ご紹介したいです。(次頁のスライド参照)

いまだに日本社会で、外国にルーツをもつ人たちが見えない存在であり続けるということが大きな課題だ

## 在住外国人の視点で社会を見つめてみると

いまだ日本社会で「外国にルーツをもつ人」が見えない存在であり続けること

「高度人材」「留学生」歓迎の声が大きくなる昨今、  
「定住外国人」のイメージは相変わらず「要支援」とみなされがち

「もっと日本語を学びなさい」「高校や専門学校や大学を目指しなさい」  
子どもの時から、慣れぬ新しい環境の下、通じることのなかった「ことば」。  
将来のため、新しい学校や社会に適応するため、こうした励ましや叱咤、激励。  
やさしく時に厳しく、父や母、先生やボランティアの人々からどんなにたくさん聞かされてきたか。  
言い尽くせない苦しさ、辛さはたくさんあったし、永く語られなかった時が刻まれました

でも、子どもたちや若者たちは（中略）  
与えられた仕事ではなく、一歩ずつ自分で答えを紡ぎ出しながら、前へ前へと。  
そして新しい働き方と生き方を創りだし、語り始めています。

王慧桂（多文化共生センター東京 理事顧問）「みんぐる」50号（多文化共生センター東京 2016）より

と感じています。そして高度人材とか留学生の方々は結構「ようこそ」という感じが強いんですが、定住外国人となると要支援と見られがちだということも起きてくる気がします。

何より私が、王さんの文章を読んでハッとしたのは子どもたちのことですね。若者たちが、ボランティアや私たち支援者から「もっと頑張れ」といい続けられてきている。でも、その言葉を受け続ける彼らは、どのようにそれを感じているのか。言い尽くせない苦しさや辛さがたくさんあるだろうし、それを語ることもできない。そんな時が刻まれてきているのではないかと思います。

でも、若者たちは、そして子どもたちも含めて、私たちの組織も若い人も多いですけども、そういう外国ルーツや外国人の人たちを含めて、与えられた仕事ではなくて、一つずつ自分で答えを紡ぎ出しながら、前へ前へと進んでいく生き方や、働き方を作り出していつている。そんな力強さもあると思います。それは私も含めてNPOで働いている職員もその自負をもって動いて働いているなあと感じています。

私は、言葉をあげる、声をあげるということが、キーワードではないかと思います。見えない存在であり続けるのではなく、勇気があるけれどその言葉を発すること。そんなところに大事なポイントがあるのではないかなと思っています。

妻鹿:新居さん、ありがとうございます。

最後のところがとても刺さりましたね。支援者の側は特に善意で頑張れって言ってしまいがちだけれども、それをずっと言われ続けてきた外国の人たちはどうなんだろうか？言葉によって見えない存在を見える化していくというところが、結構大きなポイントなのではないか、というヒントをもらいました。

外から見ているとCINGAは違いを力にしている組織、多文化共生ができていく素晴らしい組織と評価をされていると思いますが、もう一歩深めてみるといういろいろなことを見てきて、今日の出口さんのお話と重ね合わせてみると、いろいろ特権をもっている人たちの構造があったり、多数派・少数派というものもある。一般的な社会とは違う構造かもしれないけれども、組織のなかにマジョリティ・マイノリティの問題があって、あらためてそれを考え直していく、そんなお話をさせていただいたのかと思います。

妻鹿:それでは、次に地域共生の現場である社協の立場から神戸市社会福祉協議会の長谷部さんにお話しいただきます。地域福祉の現場実践を通して見えてきた"あるある"の落とし穴のお話をさせていただきそうです。長谷部さんお願いします。



長谷部:長谷部です。どうぞよろしくお願いします。

私は普段どのような人なのか、ということについて「職業」「家庭」「社会」の3つに分けて紹介しています。私の職業はご紹介いただいた通り、神戸市社会福祉協議会で地域支援部の担当課長をしています。地域福祉全般を扱っていて、生活支援コーディネーターとかボランティアコーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー、こういった職種のメンバーの取りまとめをしている部署で働いて、給料もらって、ごはんを食べています。

家庭の方では、妻と高校生と中学生の男の子がいます。休みの日はほとんど男3人釣りに行ってばかりで、家にあんまりいない。家では料理は3食、私の役目になっていて、その分、分業で掃除と洗濯を妻にお任せしています。

社会活動としては、日本ボランティアコーディネーター協会やFMわいわいなどのNPOの理事をやったり、災害関係ですと、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議とか、神戸市教育委員会の学校防災アドバイザーなど、給料をもらっていない活動もさせていただいて、社会と関わっています。

社協の職員としては、この3つの領域で居場所と役割をもっているような人をたくさん増やすことが大切だと思っています。「社会」の部分、職場や家庭以外にもう一カ所、居場所をもって役割をもっていることが、自分自身に何かあった時、たとえば、仕事がうまくいかないとか、家庭でうまくいかないことがあった時に自分を強く保てたり、自分を安定して保てたりすることにつながっていると思うので、この3つの領域で活動する人というのを増やしたいという思いで今の仕事をしています。

## ■社協の4つの性格

さて、皆さん、社協ってどのようなところか、ご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、さっき新居さんが言葉の話をされましたので、ちょっと僕なりの言葉で社協を4つに表わしてみました。

### 社会福祉協議会（社協）とは

- 3つの居場所へ 促していく組織
- 生命 生活 生きがい を支えていく組織
- ウォンツではなくニーズ に対応する組織
- 社会の変化にいち早く対応する組織

別にどこにも書いて無く、僕がこう説明しています。

1番目は、先ほどの自己紹介で、3つ居場所と役割を、というお話をしましたが、3つの居場所を持てるように促していく組織ということ。すべての人に3つの居場所があるような暮らしができたらいいなというふうに思っています。

2番目に「生きる」という字のつく3つの領域で社協の仕事をしていますと説明することが多いです。まず1つめは生命に関わる仕事、2つめは生活に関わる仕事、そして3つめが生きがいに関わる仕事。この3つを支えていく組織が社会福祉協議会である、と言っています。

元日に起きた能登半島地震においては、まさに生命に関わる仕事をしています。これは、社会福祉協議会だけじゃなく、いろいろな人が生命に関わる仕事をしています。生活に関わることも始まってきています。ただ、少し心に留めて考えたいのは、生きがいを支えるという活動は、時に災害時には後回しにされることになるので、これも本当はとっても大事にしてほしいなとい

う思いをもっています。

そして3番目は、「ウォンツ」ではなく「ニーズ」に対応する組織が社会福祉協議会です。よく、ウォンツとニーズの区別がついていないといった現象が社協のなかでは課題になることがあります。これもしっかり理解していきたいということです。その人が何を言っているのか・何を求めているのか・要望しているのか、ということだけで物事を決めるのではなくて、きちっとプロとして見立てをして、その人に必要なものは何なのかを考えてニーズを導き出して、それに対応することが大切です。

ちょっと前に有名になった生活福祉資金の特例貸付で、社会福祉協議会の窓口にお金を貸してほしいという方がたくさんいらっしゃいましたけど、それが本当に必要なお金なのかどうか。（貸付ということは）返さなアカン借金を新たにさせていただく、ということになります。言われていることがすべて我々のすべきことなのかどうか、ということに関しては、よくよく考えて判断をしなければいけないという部分が、私たちの仕事にはあります。

世の中のいろいろな仕事のなかでは、注文に答えるのが正しい仕事もあると思うのですが、そうではない領域のことがあります。「社協の人は言ったことやってくれへん」みたいな話をネットに書かれることはしょっちゅうあるのですが、このウォンツとニーズというのをきちっと切り分けて考えていくのが私たちの仕事です。

4番目は、社会の変化にいち早く対応する組織という性格があります。よく行政機関と我々を混同する、似た組織とか同じ組織のように感じる方がいらっしゃるのですが、基本的に私たちは法律や条例ができて何か仕事をしていく組織ではなくて、社会のなかで何かしらの課題があったり変化があって、それに対応しなければいけないという時に、公平性の原則の外側で目の前の困っている人を助けることができる、というのが本来の私たちの仕事です。行政が公平性の原則に基づく組織であるならば、私たちは極端なことをいうと、不公平であっても必要ならば支援活動を展開すべき組織だと思っています。

## ■大多数への支援と個別支援

今日のお題、マイノリティに関わる「多様性の時代を

めざして「マジョリティの特権」というキーワードが私たちに与えられているので、ここで何を話すかいろいろ考えていたのですが、能登半島地震があって、私もいろいろ思うところや思い出すことが多くて、そのなかで、あるおばあちゃんに対する僕の失敗の話をさせてもらえたらと思っています。

阪神・淡路大震災(以下、阪神淡路)が29年前にありました。あの時、鹿児島県で大学生をしていた僕は、神戸にきて2か月間テントで暮らしながらボランティア活動していました。その当時の話です。

これを見たことがありますか？ これは阪神淡路当時のものではなくて、最近のものですが、自衛隊が設置するお風呂です。



避難所のお風呂というのは、通常、災害時に自衛隊が設置してお湯を張って被災者の方に入ってもらって、掃除も自衛隊がして、というものです。でも、阪神淡路の時は被害規模が大きかったこと、範囲が広がったことなどいろいろあって、そういったことをしてくれたお風呂と、いわゆるテントや湯船といった設備や機材を設置だけしてくれるものがありました。

この自衛隊のお風呂が結構深いので、どのような人でも入れるかということ、ちょっと難しいところがあって、介助が必要な人たち、障害のある方とか、そういった方たちのお手伝いをする介助浴が必要だねってことで、僕らボランティアでお湯を張ってお風呂入っていただく上で、男性の日・女性の日、介護が必要な男性の日・女性の日、という形に分けて、いろいろな人が入れるような形で運営を始めました。

すると、あるおばあちゃんが僕のところやってきて、すごい早口でかなりきつめの関西弁で「お風呂入りたい」ということを訴えてくれました。その時に「おばあちゃん一人で入るのは大変だったら、女性の介助スタッフがいる時に来たらいいやん。それ何日の何時だよ」って説明して「その日に、もう一回来てね」って言ったん

ですが「それじゃダメだ」っておっしゃるんですね。で、何をいいたいのかよくわからないので「ちょっとこっち一回座ろうや」って言って、2人で座ってゆっくり話を聞いたら、実はおばあさんには、知的障害のある息子さんがいて、息子さんは生まれてからこの方、お母さんとかお風呂に入ったことがないというわけ。息子さんっていっても、当時もう50になられていたので、今、私ちょうど50ですから、今の私ぐらいの人がお母さんと一緒に入れるようなお風呂はあの時の被災地ではなかったんですね。

男女別に介助があるお風呂をつくったことでもう結構ちゃんと活動できているんじゃないか、いい仕組み作ったんじゃないかと僕は思っていたけれど、それでは足りなかったって、頭を打たれたわけですね。それでみんなで相談して、その親子が入れる特別な時間をとりあえず設定することで、なんとかお風呂に入っていたくようにしたわけです。

きっと今、能登半島でもそんな事態が発生し始めたりしていると思うのですが、多くの人を救う活動や大多数の困っている人を救う活動とともに、そこに当てはまらない個別の事情を抱えた人に対応するような支援活動をちゃんとしてほしいし、僕らもしていかなきゃいけないなってことをあらためて思っています。

妻鹿:長谷部さん。ありがとうございました。

見事に出口さんのお話の「マジョリティとマイノリティ」のモデルとなるような事例をお話しいただけたのかと思います。私も仕事柄、社協のことをよく知っているのですが、長谷部さんの解説、目の前の困っている人を助けるから、それは必ずしも平等ではない。だからもしかすると、マジョリティと思われる人を助けていることもあるし、マイノリティに見える人でも助けられないこともあるかもしれない。一見不公平に見える支援もするのが、ニーズに寄り添う社協の活動だというお話もとても興味深かったです。良かれと思ってお風呂の支援をしても、その息子さんとおばあちゃんにとっては使えないサービスで、多くの人を救う vs 個別の人に寄り添うということの難しさというのがあるかと思いました。

被災地においても、今日の話をお忘れなくという指摘をいただけたのかなというふうに思います。



## トークセッション ～共感から自分事へ～変化のプロセスを可視化しながら



**妻鹿:**ここからは3人プラス私でクロストークをしたいと思います。まずは出口さんに新居さん、長谷部さんのお話からどのような点に気づかれたか、ぜひ伺いたいと思います。

**出口:**ありがとうございます。おふたりの話、マジョリティ・マイノリティについて本当に深く考えてくださっていて、とても感銘を受けました。具体的な例を長谷部さんが出してくださって、まさにそういうことかと。マジョリティ側にいることで、どうしても構造的に見えないものがあるなか、支援する側も、見たいと思って一生懸命考えているのだけでも、いろいろな多様性のある方を前に、どうしても漏れ落ちてしまうことがあります。

そこにどのように気づくかという、やはり「自分はすべてを知らない・自分はすべてをわかってはいない」という謙虚な気持ちをもつことも大事。そしてマイノリティ性をもつ方々の側の声をきちんと聞くといった行動が大事だろうと思いながら聞いておりました。

**長谷部:**あの時、関西弁のおばちゃんが「風呂入れろ」ってガーッとまくし立てて、それが超怖くてですね。でもなんか逃げなくてよかったなと思ったりしているのですけれど。

**妻鹿:**具体的には、長谷部さんどうやって踏ん張ったのですか？

**長谷部:**ベンチで横に座って正面に立たないようにしました。めちゃくちゃ怒っていたので。

当時は、あれをまともに聞く力がなかったですね。なんとか言っていることの意味がわかり、仲間も同調してくれた。自衛隊が設置したいわば公的なお風呂じゃなくて、僕らボランティアで好きに運営しているお風呂だったからできたというものもあったかな。

たくさんの困っている人をいっぺんにぐるっと

囲んで支援することと、そこから漏れている人がいるかもしれない、その人たちの特別な対応をちゃんとしていくんだっていう姿勢をもちたいなというのを、今日このセッションを迎える前に、あらためて思いながら来たんです。

今でも能登できっと同じようなことがいっぱい起きていだろうなかで、やっぱり両方をめざすってことは諦めちゃいけないんじゃないかなと思っているんです。今日のこのセッションを通してみんなが勉強することで、僕があの時逃げずになんとか踏ん張った時の勇気のようなものを、皆さんに感じてもらえたらいいなと思っているし、分析もしていただけると、ありがたいです。

### ■多様性は必ずしも安全安心ではない

**新居:**まさしく今のが多様性というところだと思うんですよ。多様性というのはすごく大事。姿が見えている人だけでなく、その向こうにも多様性をもつたくさんの人たちがいらっしゃるから、多様な人たちが関わるということというのは絶対に大事なことです。でもその関わりのプロセスのなかで、特権的なマジョリティ性が出てきた時に、それを指摘される。私は声をあげることが大事・声を言葉にして出すことが大事と言ったけれども、勇気を出して声をあげたけれども、跳ね返されたり傷つくことも多かったです。多様性という点からいって、多様性だから安全安心ということではなく、多様だからこそ傷つけ合うことは結構起きるんじゃないかと。

長谷部さんの話でいうと、その方も自分の不安感をもとにわあーって言葉をぶつけられたと思う。でも、それは長谷部さんを傷つけているわけじゃないですか。結構、私も今、組織や、そして活動していくなかで、自分の言っていることや自分が言われたことに傷ついたり、傷つけたりしていることが、多様性ということのなかでは起きるなど感じることも多いんですね。多様性だから安全安心ということではなく、多様だからこそ傷つけ合うことは結構起きるんじゃないかと。

妻鹿:例えばどんな傷ついた出来事がありましたか？

新居:これは私ではなく、外国人の人たちの話ですが、うちの組織にも外国人の人がたくさんいて、例えば大きな会合とかで、自分たちはこんなことに困っていますとか、自分たちの想いを伝える機会があったとしますよね。そして、一生懸命準備をして声を出します。だけど、それに対してネットや直接的に、またアンケートを含めて「そういうことを言うのなら、国に帰ればいい」とか「そういうことを求めるんだったら、私たちの方がもっと大変な人はいるんだ」というような反応があったりする。

ヘイトという言葉がありますけれども、やはり外国人の方々はそれにすごくあいやすいですね。いろいろな人たちがいるけれども、やっぱり日本においてはこのヘイトスピーチというか、ヘイトなことってすごく起きやすいし、それを先ほどもあったように傍観してしまう人もたくさんいる。ヘイトを受けると、慣れている方でもものすごく傷つき、それを聞いている私たちもとても傷つく。障害者や女性でもいろいろな問題が起きていると思いますが、外国人の方に対するそのストレートなものの言いようというのは一段強い。傷つけ度合いが違う気がするんです。

## ■マジョリティ側、一人ひとりの変化を

出口:そうですね。役所などの窓口でも、外国人だと急にため口になる、とよくマイノリティの方がおっしゃいますね。そういう扱われ方は、言っている側はひょっとしたら無意識かもしれないです。そうさせてしまうさまざまなステレオタイプを内面にもっているのでしょうか。そのことになかなか気づかない、あるいは、外国人だから当然でしょうというぐらいなのか。そういう人がいると本当に大変だと思います。

マイノリティ側がそれをいろいろな人からされているという意味では、やはりマジョリティ側の一人ひとりが変わっていかないと、どこに行ってもそういう人たちにぶつかるという経験をさせられてしまう人が減らないということになると思うんですよね。

あと、長谷部さんが言ったことで、すごく私が注目したいと思ったのは、「あの時は聞く力がなかった」とおっしゃいました。その気づきってものすごく大事ですね。今は踏ん張れても、あの時は絶対聞けていなかったみたいなの。何が大事かというところ、ご自身の変化しているプロセスを可視化していらっしゃるということなのです。聞く力というのは、実はすごく習得するのが難しいですね。

例えばジェンダーの面からは、女性がいろいろ言っても男性は聞いていない。「また女がなんか面倒くさいこといっている」みたいな。女性だからこそ見えていること、マイノリティだからこそ見えていることは実はたくさんあるのだけれども、それがなんとなくノイズみたいな感じになって、聞き流すことが習慣化されていってしまうということにまず気づくことが大事です。

しかもマイノリティは、ずっと聞いてもらえないから、どんどん語調が強くなってくるわけです。優しく言ったら全くスルーされたから、今度はもっと強く言わないと、とどんどん攻撃的になっていく。その理由は、一つはやはり傷つきの裏返しであると私は思っています。傷つけられることがあって、どれだけ叫んでも聞いてもらえない。でも叫ぶということはまだ諦めていないということでもあるのです。諦めたらもう何も言わないですから。自分が傷つくだけなら、そこで沈黙してしまうと思うんです。

だから、怒りを聞いた時に、「あっ」「おっ」と思ってほしい。「あ、言ってくれている・私たちを教育してくれている」という、ちょっとマインドセットを切り替えて、感謝の気持ちみたいなものをもつ。そういう姿勢になるには、こちら側もたしかに勇気もいるし、踏ん張らなきゃいけないし、ズタズタになりながらやっているところもあるのかもしれない。でも、最終的には、自分は傷ついても結局は今までの普通の特権のある生活に戻れるけれども、彼らは何かが変わらないと、ずっと同じ状況を強いられてしまうところへのコンパッション(compassion)が最終的には大事になります。

## ■代弁することをめぐるジレンマ

**妻鹿:**支援者の側はなかなかみんな長谷部さんのようには強くなれないかもしれません。その時は長谷部さんもすごく怖いと思いながらも、踏ん張れたんですよ。

**長谷部:**偶然もいろいろあったと思います。ちょうど先輩も連れていたし、あんまり弱い自分を見せられない環境にあったという事実もあるとは思いますが、ただ、本当にあの時逃げなくてよかったし、先生が今おっしゃられた「教育してくださっている」ということもそうですけど、あの時、あの方の声に気づかなかっただら、この20数年間、社協の仕事をしていくなかで、いろいろ間違ってしまっただろうな、と。もちろん今もいろいろな間違いはおかしていますが、もっとたくさん間違いをさせていただくと思うので、あの時、彼女が話をしてくれて、なんとかお風呂に入ってもらおうぜって、ちょっと時間遅くなるから灯り集めてこいよ、みたいな、ガサガサした話のなかでみんなと動いたことが、やっぱり僕の原点ではあるなと思っています。

**妻鹿:**新居さんには同じような経験はありますか？

**新居:**今お聞きしながら皆さんの意見を聞きたいことを思い出しました。例えば、自分が攻撃的なことをされる、または攻撃的なことを受けることに対しては、まあ、なんとか頑張れるかもしれない。仕事としてやっているから。だけど、さっきのヘイトの話もそうなんですけど、一緒に活動している外国人の人、または目の前の外国の人が攻撃を受けることがあったときに、ついつい私が代弁してしまうというか、言葉を奪ってしまうことが結構あるのではないかなと、聞きながら思い出していました。

つまり傷つけないからこそ代わりに言ってしまうみたいなところがあったりして、働いている自分のなかで起きているジレンマで、後からいっぱい自分がしゃべりすぎたことに後悔してしまう。自分のなかでは奪おうと思って言葉を奪っているわけじゃなくて、傷つけないから、あ、それはね、とか口出してしまう。そういう経験は皆さんにもあるのか・どう考えていらっしゃるのか、と

いうことをお聞きしたいです。

**妻鹿:**長谷部さんどうですか？

**長谷部:**少し前まで6年間コミュニティソーシャルワーカーをしていたのだけれど、ちょっと難しい立場で、担当者と課長がいるなかで課長の側。担当者がいろいろな方との関係性を築くことはすごくいいことだと思うけれども、一方で暴力的な人だったり、危ない場面とかもこの世界にはあるわけです。その時に本人が「私 頑張ります」って言うのに「何か起こっちゃいかん」って僕が盾になってしまったり、前に出ていってしまったりする。そうすると、担当者もう1回関係性の作り直しをしないといけない時があたりして、担当者が築いてきた関係性を奪ってしまっているのではないかなと思う時があります。

困っている人を助けるという場面で、ついつい代弁してしまう。その代弁が、結果として後から悔やむことになるとか、良くなかったことになるという経験もいっぱいあって、信じなさいいけない時と守らなさいいけないところのバランスは難しいですね。

**妻鹿:**それって支援者がもっている宿命というか。多分、支援する立場を長くやっている、特にコーディネーター的な役割をしていると、代弁してでも対等につながらなければならないような場面があると思いますね。受けてきた教育がそうさせてしまうところがあって、支援者のジレンマみたいなものですよ。

## ■耳をかしてもらえないことも特権

**出口:**代弁した方がいい時も絶対にあるわけです。そのタイミングとか状況を見極めるのも、きっと経験値がものをいうのかと思います。すぐにできるスキルではないと思うので、まずは、ally(味方・仲間)になるというか、支援者になるというか。段階があるのでしょうか。

最初の頃はまだまだ自分がいい人であると認められたい、というような動機があって、代弁することで「どう私っていい人でしょう？」といった

段階をまずクリアしていく。次は自分が見られている方に重心を置いていたことに気づいて、代弁する時も、本当に代弁してほしいかどうかで確認をするステップを踏む、あるいはなんらかの信頼関係を作っていくなかで、だんだん立ち位置がわかってくるということはありませんよね。だから長期的な関わりがあってこそ育っていくものなのかと思います。

あとは、マジョリティ性をもっているからこそ、他のマジョリティに伝えるときに「聞いてもらえる特権」というのがありますね。「中立的イコール客観的イコール好意的に見られる特権」というのですが、マイノリティが言うところ「うるさいなあ」でスルーされるのに、マジョリティが「いや、これっておかしいですよね？」って言ったなら「確かに」みたいな。だからどうしても言えない時、あるいは聞いてもらえていない時に、マジョリティ側が言うていくことも大事かと思っています。

よく私が思うのは「当事者じゃないと言えない」と思っているマジョリティがいかに多いかということ。「マジョリティだから口出しはしない」と一切口をつぐむみたいなことはやめてください。マジョリティ側はマジョリティ側のいったことを聞く傾向があるので、そこは自覚してほしいと思います。

**新居:**外国人支援の領域だと、日本語力というところで、その人の評価とか物事というのが判断されることが多いです。日本語力を上げるには、もともとの語学力もあれば、経験など、いろいろなものが関連している。言葉ってその人を表していて、その人が持っている本来的なものを(日本語では)出せない、でも母語だったら全然いけるのにという二重のジレンマをもつことが多いのではないかと想像します。だから通訳の存在であるとか、その人の持っている力というものを「見える化」する環境を整えてあげないと、その辺がうまくいかない。

ただ、それをしすぎてしまった結果、ガーンと気づかされた言葉があって。一緒に活動している日本語ができる外国人の仲間から「私はいつも通訳なんですね。通訳しかしっちゃいけないんですか？」と言われたことがあったんです。いろいろな状況

で外国人の方々と接する時の代弁者を通訳として担っていただくこともあるわけですが、それをしている人だって本当は自分のことでしゃべりたいことがいっぱいある。

長谷部さんがいったことと似ているのですけれど、大きな枠で括ってしまうと漏れていく人があって、その漏れていく人はいろいろなところに存在していて、そういう人からボールを投げられると、コーディネーターとしてあらためて「きつとそうだよな」って傷ついたりすることがあります。

## ■ステレオタイプなマイノリティ像からの脱却

**妻鹿:**日本語が上手な外国の人は一見、マジョリティの一員になってくれているような気がして、私たちの仲間だと思って「一緒だよな」っていろいろなことをしてもらうけれども、その人から決してマイノリティ性がなくなっているわけじゃなくて、そのことに無自覚であってはいけないということなんです。やってしまいがちですよ。

一方で、マイノリティ側もすごくしたたかに生きている部分があって、決して弱いだけの、一方的に支援されなければいけない存在じゃない、ある種の強さがあると思うんですよ。

私たちがいろいろお付き合いするマイノリティのなかには、自動ドアが開かないから当然ですけども、ものすごく上手に生きていて、マジョリティとマイノリティが、もしかすると私たち市民活動の現場では入れ替わるようなこともあるのかな？

**出口:**おそらく支援する側に「マイノリティ像」というのがあると思うのですよ。「弱々しくてかわいそう」みたいなイメージ通りに動いていないと、「なんだ、したたかに生きているじゃん」みたいなね。

でも私はやっぱりマジョリティ・マイノリティの権力構造はそんなに変わらないと思っているので、したたかに生きているというところに敬意を示しながらも、やっぱりどう考えても、この場合では弱い立場にいるよね、と認識すると同時に、自分自身の「かわいそうなマイノリティを助けてあげなきゃ」というマイノリティ像をまず捨てる。マイノリテ

ィがすべて「本当にありがとうございました」って感謝を言ってくれるわけじゃないわけで、それを求めている自分に気づく。「やってあげているんだから感謝しろよ」みたいな気持ちでいる自分自身に常に気づいていくことがやっぱり大事ななと思います。

**妻鹿:**確かにそれはあるかもしれないですね。

私自身は、市民活動の支援をしていたり、直接マイノリティの支援をしていたりする人が一番気をつけないといけないことって、出口さんがおっしゃっていた無関心というところだと。残念ながら今回の地震の被災地に対してもそうですし、いわゆるマイノリティの人たちに対しても、自分のマジョリティ性について、社会のなかの大多数の人が無関心でいる、そのことに対して、私たちコーディネーションに携わっている人は、自分も持っているマジョリティ性にどう気づいていくか。中立はありえないというお話がありましたが、無関心から反差別の方に運動していかなければ、という最後の絵はすごく印象的でした。

さて、これから私たちはどうしていけばいいのか、最後に出口さんからヒントをいただければと思います。

**出口:**マイノリティの状況を、「これは大変だろうな」と共感する力というのはすごく大事なのですが、そこで終わらないでほしい。その共感を自分自身の特権と置き換えていくという習慣をもつことをお薦めしたいと思うんですね。「あ、自分は家に帰ったらこういう状況が待っていないという特権がある」、というように、自分ごとにしていくという習慣をつけると、自分自身がそのマイノリティと接する時に、もう少し寛容な気持ちで見られたり接したりすることができると思うのですね。

あとは、支援される側から信頼される支援者になるためには、まず特権に自覚的じゃないと、どうしても信頼されないと考えています。「他者とともに」というところは、特権・自分のマジョリティ性を自覚しないことには、簡単には信じてもらえないと私は思っているので、本当の意味で手をつないで、ともに動いていくというのは、マジョリティ

側こそが変わる側にならなきゃいけない。マジョリティ側は「自分はまだすでにいいことをしているので、変わる必要がない」と思っている人が多い、あるいは「これ以上、どうしろというんだ?」とちょっと苛立ちすら覚えるかもしれない。でも、このマジョリティ特権については自覚的になった方が絶対に支援はうまくいくと私は考えています。

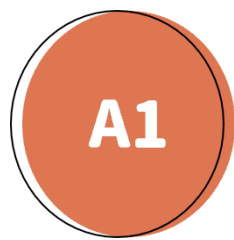
最後に付け加えるとすれば、自動ドアの例えを使いましたけども、いろいろな支援の仕方があると思うんです。「自動ドア開かないの? じゃあ一緒に開けましょう」という支援の仕方ひとつあるし、一方で「このセンサー自体を変えましょう」というように、その制度・法律構造的なものを変える支援の仕方もあると思うので、この両方を両輪でやっていくといいし、センサーを変えようとすることは、マイノリティにとって多くの場合励みになっていると思うので、そこを一緒に頑張っていけたらと思います。

**妻鹿:**ありがとうございました。ぜひ今日話を聞いていただいた皆さんが日常の実践を通じて、自らのマジョリティ性に気づくとともに、皆さんのお隣にいる、マジョリティ性をもっていることを自覚していない人々にその構造を伝え、その気づきを与えようという働きかけをしていただけたらと思いました。

十分に語り尽くせなかったところはありますけれども、3人の皆さまにあらためてお礼を申し上げてこのセッションを閉じたいと思います。

どうもありがとうございました。

(2024年1月13日収録:オンデマンドで動画配信)



## いま、福祉施設・病院で どんなコーディネーションをめざす？

語ろう、元気なコーディネーターになるコツ

コロナ5類移行後、徐々に再開している福祉施設・病院でのボランティア活動。しかし、その足並みは揃っていません。各施設独自の感染管理、職員の認識低下、ボランティアとの関係性の変化など再開を妨げる要因は多岐にわたり、どう動いたらいいのか、どこから手をつけたらいいのかわからないまま、施設コーディネーター（担当者）は日々奮闘しています。そこで、ベテランさんもコロナ前を知らない新人さんも「みんなを元気にする」ために、外部の視点や助言も参考に、福祉施設・病院ボランティアの意義と目的、コーディネーターの在り方を共に考えました。

### 登壇者

事例発表者	加賀 孝幸さん	(児童養護施設一宮学園)	
	岡澤 裕子さん	(児童養護施設一宮学園)	
	谷澤 舞羽さん	(埼玉県済生会川口総合病院)	ボランティアコーディネーター
	野澤 澄江さん	(埼玉県済生会川口総合病院)	ボランティアコーディネーター
講師	小原 宗一さん	(北区社会福祉協議会(東京都))	

### タイムスケジュール

### 参加者数

13:30	オリエンテーション	はじめに
13:45	事例報告①	
14:05	グループワーク①	
14:35	発表・共有	
14:55	まとめ	
15:05	グループワーク②	
15:20	事例報告②	
15:40	グループワーク③	
16:10	発表	
16:20	総括	
16:25	おわりに	

9名

内訳：会場4名、オンライン5名

### 分科会の内容

ハイブリッド形式で、登壇者と講師は全員会場に揃い、参加者は会場が4名オンライン参加が5名となりました。立場や役職が近い方々でグループを作り、会場参加者チームと会場登壇者チーム、オンラインチームに分かれました。

#### ● 事例報告①

児童養護施設一宮学園からはボランティア導入までの経緯と導入時に起きた問題（職員間の認識の違い・体制づくり）、埼玉県済生会川口総合病院からはコロナ禍の再開時にあった様々な問題を報告していただき、これらを「逆風」として、参加者には「逆風への立ち向かい方」がキーワードとなることを伝えました。

#### ● グループワーク①

自己紹介の後、それぞれが抱える問題“逆風”を共有しました。いずれのグループも、様々な立場（受け入れ側・ボランティア側）で経験した、「活動縮小によるもどかしさ」「根拠のない制限の存在」「受け入れを待つ側のモチベーションの低下や体力的な問題」「職員の認識の低下」「それぞれの関係性や気持ちの温度差」などの現場の生の声が聴かれました。

#### ● まとめ

各グループから挙げた福祉施設や病院が直面している問題を、講師の小原さんに論理的に整理していただきました。『①何かあったらどうする（責任）問題 ②優先順位の問題 ③空白期間の継続問題 ④人材の流動問題 ⑤モチベーション低下問題』。これらを整理して見えたのは、「今こそボランティアコーディネーターが必要であること」「問題解決には組織全体によるリカバリーが重要で、コーディネーターに頼るだけでなく、組織体制を整備すること」でした。

#### ● グループワーク②

「数ある逆風に立ち向かうには、どんなスタンスで臨むべきか」。グループワーク②では、それぞれの立場から、コーディネーションのあるべき姿・スタンスを聞きました。オンラインチームからは「ボランティアが来ることで、患者さんだけでなくご家族やスタッフも笑顔になり、療養環境が向上することはよくわかっている。ただ、そのための調整がスムーズにいかず苦勞することが多い。コーディネーターも楽しみながら、ボランティアも含めたすべてが win-win になるようなコーディネーションが望ましい」との意見がありました。また、他のグループからは「組織全体の理解・協働を得るには、施設内外にボランティアの価値を発信すること」「価値を十分に認識したコーディネーターが率先してアピールの場を模索すること」も必要とのご意見も頂きました。

#### ● 事例報告②

2施設の“逆風への立ち向かい方”を、具体的なエピソード（オンラインイベント、院長参加の座談会）を交えて話していただきました。一宮学園の「できることから始める。失敗を恐れない」スタンスが、結果、オリジナリティー溢れる活動につながったこと。済生会川口総合病院も乗り越えるためにあらゆる策を講じ、ファイティングポーズをとり続けた先に「職員・組織の理解」を得られたこと。双方の力強い報告は、参加者の背中を押すエールになりました。

#### ● グループワーク③

「誰のためのなんのためのコーディネーション?」。参加者それぞれのコーディネーションの在り方を伺いました。「できることから後方支援する」「ボランティアが話し合える場を作る」「ニーズを把握して活動を広げる」「以前の形にこだわらないで変化すべき」「コーディネーターだけでなく横のつながりを広げる」「ボランティアの質の向上もコーディネーターの仕事」「時には大きな勝負を仕掛けることも大事」「地域の中の人脈を広げる」「第三者からも含め情報発信が必要」「SNS 強化」など、明日につながる個々の決意が集まりました。

#### ● 総括

事例報告者からは「仲間と話すことで得る共感や学びから、『何がしたいか』を明確にできた」「施設と病院、畑違いと思っていたが、悩みや課題に共通点が多く勉強になった」との感想が寄せられました。講師からは「コーディネーターもボランティアも、組織の中ではマイノリティの存在。施設・病院に入れるかどうかなどジレンマも存在するが、そこに興味を持ち、戦略や準備を持って勝負に出ることができるコーディネーターがいるかどうかで、状況はだいぶ変わるはず。ボランティア関係の問題はコロナに限らず多くあるが、それらの未来を明るく導くのがコーディネーターの存在意義かもしれないと思った」とまとめていただきました。



### 参加者の声

- ・他施設の方と初めて話しとても共感でき活動のヒントも頂いた。どのようなコーディネーターになるかは、コーディネーター次第かもしれない。戦略をもってコーディネーションできればと思った。
- ・事例発表が良かった。一宮学園の「とりあえず任せてください」という言葉は壁があるからと諦めず、やってみようという気持ちにさせてくれた。川口総合病院さんが座談会を開催してみんなの願いが同じ方向にあったことを確認して進まれていることも素晴らしいと思った。
- ・グループワークも進行役と実行委員の方にだいぶ助けていただいた。質問やトークテーマがわからなくなった時があったので、タイムテーブルもGドライブにあれば流れを理解して臨めたかなと思った。ボランティアが活動していくためには、受け入れ側/ボラ側 双方の思いや考えを上手く咀嚼し繋いでいく且つ病院や施設の中に居るコーディネーターの存在が必要であり重要だということを再認識できた。

### 分科会担当者のコメント

分科会終了時の、参加者や登壇者の「元気になった!」の声にこの会の目的が果たせたことを嬉しく思った。これからも縦横のつながりを広げて仲間の存在を意識しながら、自分なりのコーディネーションを目指し進んでいきましょう。

### 分科会担当者

加藤悦興（神奈川県立こども医療センター） / 富澤真麻（埼玉県立小児医療センター）  
藤居昌行（小平市社会福祉協議会） / 藤掛素子（中央大学ボランティアセンター）



## 地域の交流拠点とまちの幸せな私たちとは

住民主体の交流の場と地域の関係性を捉え直す

空き家や空き店舗などまちの空き空間を活用した交流拠点が市民の手によって生まれています。子どもや高齢者の居場所、多世代交流の場…拠点は利用者のためだけの場所だと思われがちですが、地域を支える機能をもつものも存在します。そして拠点の発展と継続には地域の理解と応援が欠かせません。地域と拠点がお互いを支え合っている関係性が「幸せな私たち」であり、まちに必要なものでしょうか。本分科会では「幸せな私たち」を事例から学び、その可能性を議論し、コーディネーターにどういった視点・動きが必要なのかを考えました。

### 登壇者

事例発表者 廣瀬 貴樹さん（一般社団法人かけはし 代表理事）  
秋山 成子さん（まちナカ・コミュニティ 西荻みなみ 代表理事）  
コメンテーター 後藤 智香子さん（東京都市大学環境学部環境創生学科 准教授）  
進行 山田 翔太さん（一般財団法人世田谷トラストまちづくり）

### タイムスケジュール

### 参加者数

13:30 趣旨と事例概要  
13:40 事例紹介①：廣瀬貴樹さん  
14:10 事例紹介②：秋山成子さん  
14:40 休憩  
14:50 コメンテーター自己紹介：後藤智香子さん  
15:05 登壇者ディスカッションと質疑応答  
15:35 参加者グループディスカッション  
16:00 全体共有  
16:20 まとめ

30名

内訳：会場22名、オンライン8名

### 分科会の内容

#### ● 事例紹介①：廣瀬貴樹さん／かけカフェ（神奈川県横浜市和泉区）

空き家を活用してコミュニティカフェ「かけカフェ」を運営しています。学校に行きづらい子どもが学校の外で安心できる居場所をつくりたいと決意し、3年前に夫婦同時に小学校の教員を退職しました。公共施設を借りて居場所づくりを始め、初めはひとりだった子どもが、今では登録70名。多い日は30名ほどやってきます。コロナ禍では公共施設の利用制限が厳しく、空き家なら自由に使えると思い物件を探しました。「不登校の居場所をつくりたい」と知人に相談したところ、空き家の所有者を紹介してくれました。家主さんは「子どもたちが集まってすごく賑やかな家だった。昔みたいに活気が出てくるかも」と快諾してくれ、契約しました。夫婦であいさつ周りをすると「がんばってね」と地域の方々からは好意的だったのですが、地域の中で心配の声が出たそうです。不登校に対する認識がばらばらで、様々な先入観や誤解もあるように感じました。もっと誠実に、丁寧にお話すべきだったと反省しています。路頭に迷っていたところ、不登校の親の会の方から相談を受けました。働くことに不安を感じている若者がたくさんおり、緩やかに働ける場がほしいと。そこで、若者が安心して働くことのできるカフェならば、地域の方々が集える場所になるのではと考えました。コロナ禍でつながりが失われていた時期でした。まずは地域に信頼される場にしたいと思い、コミュニティカフェにすることにしました。

「かけカフェ」のコンセプトは子どもから大人まで安心して気軽に集まれる場であり、不登校を経験したり働くことに不安をもつ若者がアルバイトをし、ゆるやかに社会とつながれる場です。生きづらさを抱えた若者が人の役に立つ経験をし、自信をつけていくことがとても大事です。子どもたちや地域の方々、たくさんの方の協力を得て庭木の剪定、空き家の改修をしました。オープンの前には地域の方々や不安を抱えていた方も呼び出し、試食会・説明会を開催しました。丁寧に説明することで理解を得、2022年4月にオープンしました。

カフェは駅から遠い住宅街にあり、高齢化が進み、買い物難民が増えています。横浜市の地域ケアプラザの協力で移動販売を始めました。カフェの駐車場に魚屋・パン屋・コンビニが来てくれています。移動販売で周知が進み、カフェを頼ってくれる高齢者の方が増えました。困った時に駆け込んでくれた人もいます。

2年運営し、何より若者の成長が成果です。地域のつながりが生まれ、拠点としての可能性も広がっています。



す。課題は持続可能な経営です。集客が難しく赤字がかなり膨れ上がったため、4月からは若者の働く場ではなく、若者がいつでも来られる居場所にしたいと考えています。なんとか場を維持していきたいと思っています。

● **事例紹介②：秋山成子さん／まちナカ・コミュニティ 西荻みなみ（東京都杉並区西荻南）**

「西荻みなみ」は駅から徒歩3,4分の、商店街に面した空き店舗を活用したコミュニティスペースです。社会福祉協議会の「きずなサロン」を公共施設で長年開催していたのですが、定期的な場所の確保が難しくなりました。そんな時、商店がオーナーの高齢化で閉まると聞きました。地域の人が集まれる場所をつくりたいと前代表が掛け合うと賛同してくれ、破格の値段で借りることができました。西荻みなみは「あったらいいな、できたらいいね」と地域の人々の気持ちを形にできる場所でありたいというのが希望です。「地域の福祉」と「学び」を目的に掲げていますが、答えはひとつではないと考えています。理事が5人いますが想いは少しずつ違い、揃える必要はないかなと。それが活動の自由度につながっていると感じます。

「関わりたい人が関われる時に関われる場所」を大切にしています。ちょっと寄ってみようかなと思えるような場所、機会をつくりたいなど。例えば夫の転勤で越してきた30代の女性や、子ども家族に呼び寄せられて越してきた高齢者など、知らない土地でどうしたらいいのかわかっている人がおられます。西荻みなみに来たら共通の趣味を持つ人と出会えたとか、そういったきっかけづくりになれば嬉しいです。たくさんの方に支えられていますが、ボランティアも継続的でなくて良くて、できるときにできることをして、楽しかったと思ってもらいたい。楽しいという気持ちは性別や年代を問わず共有でき、とても大事だと思っています。

レンタル利用のないときは、どなたでもどうぞと開放しています。リンクワーカーというお当番が毎日2,3名おり、のぞいている人に声をかけたり、悩み事を聞いたり、人と人をつないだり、情報提供したりしています。何気ないおしゃべりをしていることが多いですが、誰か入ってこないか必ず入り口を見るようにしています。

西荻みなみをいいなと思う気持ちでご寄付や募金をいただくことも多いですが、関わりたいけど今は関われないからお金を託すような積極的な応援の気持ちを喚起したい。もっとたくさんの方が関われる形を考えていきたいと思っています。

● **まとめ：後藤智香子さん／東京都市大学**

様々な地域の交流の場に行く機会がありますが、同じ場所はひとつもありません。行政がつくる公共施設は法律や制度に基づくので一定の基準があります。それぞれ違うことが民間の良さであり、地域に点在していくことで、地域の安心や暮らしの豊かさにつながるのだと思います。地域と拠点の関係性がテーマですが、「地域」とは誰なのか、解像度を高く捉える必要があると感じました。周囲にどのような方が住んでいるのか、具体的に知るのがコーディネートする上で大事な視点かと思いました。



**参加者の声**

- ・ 介入するのを控える雰囲気がありますが、介入することで生まれる良さがあると感じました。
- ・ コーディネートはお互いの偏見をなくすことから始まるのだと思います。知らない、わからないから小さな不安が生まれていく。話し合いでお互いを知って、お互いの理解をつくっていくことが重要です。
- ・ よそ者が地域に入ってくる不安が地域の方々にはあるのでしょうか。コーディネーターはどちらの視点も持ち合わせ、対話を通じて解決に導いていくことが大事だと感じました。

**分科会担当者のコメント**

- ・ 想いをもつ人がいなければ新たな動きは生まれません。想いをもつ人を支え、人と人、空間・資金・情報とをつなげていくのがコーディネーターの役割だと再認識しました。交流拠点だけを見るのではなく、地域の中で見ていく。点ではなく面として捉える視点が重要だと感じます。
- ・ 居場所から交流拠点へと進化させるコーディネーターの役割を理解しました。

**分科会担当者**

齋藤尚久（日本社会教育士会） / 永松誠（千代田区社会福祉協議会）  
牧野大樹（横浜市港北区社会福祉協議会） / 宮崎雅也（日野市社会福祉協議会）  
山田翔太（世田谷トラストまちづくり）



## 地域は、文化の違う多様な人々と どのように共生していくのか？

外国にルーツのある人にかかわる事例を検討する

日本における外国人住民数は、2022年末に初めて300万人を超えました。これからは、外国籍・外国にルーツのある人々との共生がかかせませんが、その生活に目を向けると、特にコロナ禍以降、生活上の困難や課題が顕在化しています。そこで、地域の中で明らかになってきた課題を、国際交流協会と社会福祉協議会に持ち込まれた事例をもとに、ケース検討の手法を用いて検討しました。ケース検討を体験し学ぶとともに、解決策、さらにはほかの組織や社会資源を含めた、今後の連携や情報共有の道筋を図り、多様な人を受け入れる地域づくりをめざしました。

### 登壇者

事例発表者 永田 さつきさん（公益財団法人佐賀県国際交流協会 相談員）  
伊藤 真理子さん（国立市社会福祉協議会国立市ボランティアセンター コーディネーター）  
進行 唐木 理恵子さん（紬ワークス 代表）

### タイムスケジュール

13:30 趣旨説明、オリエンテーション、自己紹介  
14:00 ケース検討について説明  
14:10 ケース検討①（伊藤さんの事例）  
15:05 休憩  
15:15 ケース検討②（永田さんの事例）  
16:00 検討結果の発表  
16:15 検討結果へのコメント、事例提供者のコメント  
16:30 終了

### 参加者数

9 名

### 分科会の内容

この分科会では、ケース検討の効果や手順を説明したのちケース検討を行い、まとめて発表し共有の時間を持った。分科会担当者の感想をコメントし、最後に事例報告者のコメントをもらい終了した。なお、実際の事例を扱うことから、事例については会場で配布し、終了後回収した。そのため、報告書でも事例内容には触れない形で報告したい。

#### ● ケース検討について説明

ケース検討の手順は、自己紹介（職場、役割、経験）⇒事例の説明（提出理由、ケースの概要）⇒質疑応答⇒意見交換⇒コンサルテーション⇒発表者のまとめ

ケース検討における質問は、一つずつ（まとめて言わない）。自分の意見等は意見交換の時に言う、事例提供者の課題意識を意識するなど。その人の生活史・医療・介護・障害・子育て・孤立等の課題。仕事、経済状況の課題。現在の状況、課題、希望、生きる強さ。支援者側の役割、課題、支援者のエピソードなどにも着目。

ケース検討の進め方は、目的、意義を明確にする。事例提供者が事例を提供して「役に立った」と思える進め方。提供事例の「課題」よりも事例に潜む「強さ」「プラス面」を引き出し、気づく。守秘義務を守り、特定化できる情報はモニターする、など。

ケース検討をすることによって、個別の相談内容の理解が深まる。地域の状況把握ができる。

ケース検討の実施段階は、相談初期（組織としての支援方針を決める）、相談中期（支援方針の見直し、課題が生まれた場合など）、相談終了期（かかわり方、支援の確認、点検で、今後経験を生かす）があり、今回は伊藤さんの事例が相談中期、永田さんの事例が相談終了期にあたる。

#### ● ケース検討

事例発表者から1事例ずつ説明後、事例発表者や分科会担当者も加わり、2グループに分かれて検討した。

#### ● ケース検討結果の発表

##### 【伊藤さんの事例】

- ・親が子供の将来をどう考えているか、親と話せる機会を持つ。
- ・本人と母親の距離が離れている。どう改善するか。
- ・本人に寄り添う人がいない。
- ・本人が自信をもてるような機会を作るのが良い（社協が依頼しては？）。
- ・親は母国の文化があるので、変えるのは難しい。

- ・本人が安らげる場所ができるとうい。
- ・本人が成長して自身で生活できるようになった時、親への反発があるかもしれない。将来も踏まえて、安心できるかわりが必要。
- ・社協と国際交流協会のかかわりをどう深めていくか。本人に寄り添う人や団体が必要。

#### 【永田さんの事例】

- ・新しい難しい課題（言語と障害）。
- ・特別支援学校に通うには、伴走してくれる通訳者が必要だが、希少言語なので難しい。
- ・相談できる雰囲気。相談を持ってきてくれた住民のような存在が必要で、増やしていく。
- ・海外の障害認定は、日本でも有効か？
- ・医療関係での通訳制度は全国的に整っていないが、整えていく必要がある。
- ・アプローチ方法としては、適切だった。
- ・本人だけでなく、両親や兄弟への支援体制も検討の必要あり。

#### ● 分科会担当者のコメント

- ・国際交流協会の強みは、多言語、多文化への配慮ができること。社協の事例は、地域のきめ細かい資源とつながっているのがわかった。外国にルーツがある子どもであっても、その子の特性を理解し、支援者みんなが広く学んで居場所などにつないでいくことも必要。外国ルーツの特性なども皆で学べる機会を持てるとよい。
- ・社協と国際交流協会に入っている事例を検討できてよかった。伊藤さんの事例に国際交流協会が、永田さんの事例に社協がかかわっていないことも分かった。永田さんの事例で、近隣の人が気づいてくれたのは、居場所などのかかわりがあるおかげ。外国にルーツのある方自身の話を聞く機会も作っていく必要がある。
- ・社協の参加者が少なく残念。社協は、地域の協力者を増やすことが得意。第三者の地域でのかわり、大事な意味を持つ。ぜひ社協に頼ってほしい。

#### ● 事例発表者のコメント

- ・国際交流協会は、外国の方の問題は全部というような役割があるが、少しずつ分散させたい。これまで外国にルーツのある方の代弁者としてアドボカシーするような役割をしてきたが、改めて思ったのは、向き合っただialogすることが少し欠けていた。今回の件は外国にルーツのある子ではあるが、その前に地域住民の一人なので、どこが何をすべきかを整理できた。
- ・外国にルーツのある子ということに少し気負いすぎた。本人が当たり前の自分を出せる場所があればよいのだと分かった。本人が来た時にまわりが大げさに声をかけることが少し負担だったのかもしれないということにも気づいた。本人が生きやすい環境を作っていくことを改めて考えたい。



### 参加者の声

- ・外国にルーツのある方への支援方法に対してさまざまな立場の方とお話しが出来たことは大変勉強になった。一つの視点だけでなく、複数の視点から対象者を見ることや、本人だけでなく家族や社会資源にも目を向ける事の大切さを再認識できた。
- ・少人数グループで密度の濃いグループワークができ、とても良かった。ケースの分析の仕方、ケースに関わる様々な立場の人と一緒に考える意味を体験することができた。
- ・コーディネーションはもっと広い可能性があると感じた。良い意味で疲れる程頭を使えた。

### 分科会担当者のコメント

今回の2事例は、どちらがどちらに入ってもおかしくない相談だった。現在は両方の相談窓口の使われ方が似てきている。またケース検討を行うことで、お互いの組織が深く理解できた。分野を超えてのケース検討は十分可能であると再認識した。

### 分科会担当者

唐木理恵子（袖ワークス） / 熊谷紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

藤井美香（横浜市国際交流協会） / 武藤祐子（千代田区社会福祉協議会） / 矢富明德（佐賀県国際交流協会）



## 他分野との協働による地域づくりを考える ～「今日どう？」の関係を作りあげる秘訣☆～

私たちが暮らす地域には、企業、協同組合、社協をはじめとする団体が、様々な分野で活動しています。課題に向き合う中で、「もっと活動を広げたい」「新たな取り組みをしたい」こうした考えや思いを持つ方は少なくないのではないでしょうか。ニーズが多様化する中、地域の社会資源を集めつなぐことで、自らの発想や能力を超えるアイデアとパフォーマンスを生みだすことが期待されています。他分野との協働のための仕掛けづくりとテクニック、日頃の問題意識の持ち方を実践事例から探求しました。

### 登壇者

- 事例発表者① 川本 文人さん  
(公益社団法人日本フィランソロピー協会 シニアマネージャー  
一般社団法人Nポノ 代表理事)
- 事例発表者② 永井 美佳さん  
(大阪府協同組合・非営利協同セクター連絡協議会(OCoNoMi おおさか)  
大阪ボランティア協会 常務理事・事務局長)
- コーディネーター 園崎 秀治さん (office 園崎 代表)

### タイムスケジュール

- 13:30 開会  
オリエンテーション・分科会趣旨説明・講師紹介
- 13:35 基調説明
- 13:55 実践事例紹介
- 14:35 グループディスカッション
- 15:55 まとめ
- 16:30 閉会

### 参加者数

40名

内訳：会場20名、オンライン20名

### 分科会の内容

各組織や団体で、それぞれの使命や役割において事業や取組を行うにあたって、自分の分野領域だけでは、どうしても解決困難なことがある場合があります。そのような中、地域に目を向けると様々な資源があり、協働することによって解決の糸口が見えたり、取組にも様々な可能性が見つけ出されることもあります。

そのような、様々な分野の方との協働に向けたコーディネーションについて取組事例も参考にしながら、多様な分野領域から参加している方々と対話を通じ一緒に考える分科会です。

そのため、会場参加とオンライン併用のハイブリッド形式で実施し、各グループについても、様々な分野領域の方々と出会い、知り合い、情報や意見交換ができるような環境で行いました。

#### ● 基調説明

コーディネーターの園崎氏から、「協働についての理解」というテーマで基調説明をしていただいた。

「連携」と「協働」についての違い、なぜ「協働」が必要なのか、協働に躊躇する理由、成立しない理由、そして全国社会福祉協議会が発行した「市区町村社会福祉協議会 ボランティア・市民活動センター強化方策2015」から、「協働相手へのアプローチ」「相互理解の促進」「協働による取組」の内容を基に協働に必要な視点などを概観し、さらには平時と非常時における協働について確認した。

#### ● 実践事例紹介

実践事例を基に、それぞれのセクターの使命・意識・その業界の常識・悩みなどを知ることを通じ、コーディネーションの仕掛けやテクニックについて考えた。

川本氏から「企業社員を地域を支える力に！！～企業と社会を繋ぐコーディネーターの役割と地域共創活動～」というテーマにて、企業が地域共創活動、ボランティア活動に取り組む目的、目標、理由、企業が行うコ

ーディネーションについての視点を、実践事例を交えながら説明。

また、企業との共創活動検討段階での意識や理解のギャップについてもお話しされた。

事例2つ目は永井氏から「協同組合によるコーディネーションの視点」をテーマに実践事例を紹介。

まず、大阪ボランティア協会が目指しているコーディネーション機関のモデル、「ボランティアコーディネーション力第2版」からボランティアコーディネーターの8つの役割を全員と確認した。このうえで、0CoNoMi おおさかのあゆみと取組を基に、協働の形と協働の考え方のヒント、課題分析・課題解決アプローチについて説明いただいた。

#### ● グループセッション

実践事例紹介を基とし、グループに分かれ情報交換を行った。

1回目のセッションは、参加者同士、協働についてなぜ関心があるのか、どのようなセクターと繋がりたいのか、協働に対しどのような課題を持っているのか、お互いを知る事を目的に実施した。2回目のセッションは協働によってどのようなことができるのか、その可能性について考えた。

#### ● まとめ

参加された方の所属が多岐に渡っていたため、「社会福祉協議会」「協同組合」「福祉施設」「NPO」「訪問看護」「行政」「国際」「大学」などの方々からコメントをいただき、さらには、協力者であるNECマネジメントパートナー株式会社の松本氏から企業の視点における協働についてコメントをいただき、各分野における協働の視点について理解を深めた。



### 参加者の声

- ・ 協働をするには、まず相手を知ることが大切。まずはここからはじめてみる
- ・ 待っているだけでなく、積極的に自分からアプローチすることが必要
- ・ 協働について他機関の方から色々なお話を聞くことができたので、今後の活動に活かしていきたい など

### 分科会担当者のコメント

地域生活課題が複雑・複合化し、多様なニーズが求められている現在、様々な分野のセクター同士がつながり、柔軟な発想のもと、その時々取り組みが求められるようになってきたと同時にコーディネーションについてもそれに対応できる技術が求められる。このことから今回「協働」をテーマに掲げ研究をおこなった。

協働するには、まずは協働したい相手をしっかり知り、理解し合うことで協働することに繋がってくると同時に、相手を知り、理解をしなければ適切なコーディネーションに繋がらない。今回、参加していただいた方の所属が多岐に渡っていたこともあり、各セクターの理解も深まったものとする。

各所属において、今回の分科会が今後の事業や取組を行う上で大きく活かされ、協働による実践が深まり、さらに取組が発展できる機会となると同時に、知り合った参加者同士が今後も繋がりを続けていただき、「協働」から「今日どう?」と深い関係性が築け、各所属での実践を発展していただけたらと思う。

### 分科会担当者

平林秀敏・手嶋俊平（川崎市社会福祉協議会） / 青木覚（日本協同組合連携機構）  
宮崎雅也（日野市社会福祉協議会）



## その表現ってどうなの？

～言葉から考えるボランティアの価値 Season 2

多種多様な分野で活動するボランティア。この「ボランティア」を言葉から考える分科会、第2弾です。

あなたは、ボランティア活動に関して「奉仕」「慰問」（ボランティアの）「派遣」「活用」などの表現に、モヤモヤと違和感をもったことはありませんか？

この分科会の前半は、日ごろ、ボランティア・市民活動のコーディネーションに携わる方々から集めた違和感を覚える言葉について、ボランティアの価値を軸に対話を通して違和感の正体を探っていきます。後半は、その違和感を解消するためにできる私たちのアクションを考えていきます。

### 登壇者

経過報告者 早瀬 昇さん（大阪ボランティア協会 理事長）

進行・ファシリテーター 日本ボランティアコーディネーター協会ボランティア報道アクションメンバー

### タイムスケジュール

### 参加者数

13:30 オリエンテーション、これまでの経緯の解説

13:45 参加者とスタッフの自己紹介

14:05 JVCA 会員、1・2級合格者向け「アンケート結果」の報告  
・各項目について集約担当者が報告

14:45 全体で質疑応答・意見交換

15:00 休憩

15:10 奉仕、慰問、ボランティアの活用、ボランティア派遣、ボランティアポイント制度+有償ボランティアの5つについて違和感のない表現方法や対策など、具体的なアクションを語り合う

15:40 グループワークの内容を共有

16:00 全体で意見交換（会場+オンライン）

16:30 終了

24 名  
内訳：会場13名、オンライン11名

### 分科会の内容

冒頭、JVCA ボランティア報道アクションチームメンバー（以下、メンバー）、そして経過報告者である早瀬さんの進行により、分科会をスタート。分科会を企画した経過やこれまでの取組について紹介した。続いて、参加者から一人1分で「所属・名前・分科会を選んだ理由」を伝える自己紹介を行った。

#### ● 「モヤモヤ言葉アンケート結果」報告

メンバーから、JVCA 会員、ボランティアコーディネーション力検定1級・2級合格者を対象に実施した（2024年1月、回答68人）「表現から<ボランティアの価値>を考えるアンケート」について、以下の7つの表現に対する受け止め方（とてもモヤモヤする～全く気にならない）の結果及び各言葉の違和感の正体を報告した。

①「奉仕」とてもモヤモヤ：23、少しモヤモヤ24、どちらかといえば気にならない13、全然、気にならない6、よく分からない2

正体：対等な関係で主体的に取り組んでいるボランティア活動を「奉仕」活動と呼ばれること。

②「慰問」とてもモヤモヤ：23、少しモヤモヤ15、どちらかといえば気にならない14、全然、気にならない5、よく分からない11

正体：対等な関係でボランティアな訪問活動を「慰問」活動と呼ばれること。

③「ボランティアの活用」とてもモヤモヤ39、少しモヤモヤ20、どちらかといえば気にならない4、全然、気にならない3、よく分からない2

正体：1) ボランティア本質（自発性、連帯性）との矛盾 2) ボランティアの単なるマンパワー扱い

④「ボランティア派遣」とてもモヤモヤ40、少しモヤモヤ21、どちらかといえば気にならない5、全然、気にならない2、よく分からない3

正体：ボランティアと組織の間に従属的な関係が生じることで、強制力を含む労働の性質を感じる。

⑤「ボランティア“さん”」とてもモヤモヤ14、少しモヤモヤ20、どちらかといえば気にならない26、全然、気にならない8、よく分からない0

正体：個人に対し、氏名で呼ぶべきところを「ボランティアさん」と呼ぶこと。

⑥「ボランティアポイント制度」とてもモヤモヤ：25、少しモヤモヤ：24、どちらかといえば気にならない11、全然、気にならない2、よく分からない6

正体：1) ボランティアの本質（無償性、自発性）との矛盾、2) 社会制度を背景にしたモヤモヤ

⑦「有償ボランティア」とてもモヤモヤ：38、少しモヤモヤ：14、どちらかといえば気にならない10、全然、気にならない3、よく分からない3

正体：ボランティアの本質である無償性との矛盾がある。言葉を使う側への不信感がある。

⑧その他、「ボランティア残業」「ボランティア労働」等タダ働き／低レベルの活動の捉え方や、「ボランティア実習」「ボランティアを宿題」という社会的評価指向や教育による利用への反発等、多数の違和感ワードを紹介した。

#### <意見交換>

- ・大学ではボランティア活動で単位を出す授業があったり、就職のために1回だけやりたいという学生がいたりしてモヤモヤする。
- ・今回、JVCA会員等が回答者だと違和感のある同じ傾向の方が多かったと思うので、もっと一般の人にこのアンケートを行ってみるといろいろな意見をもっと集められるのではないかと。
- グループワーク「具体的なアクション検討」  
奉仕、慰問、ボランティアの活用、ボランティア派遣、ボランティアポイント制度＋有償ボランティアの5つの中から選び、違和感の少ない表現方法や対策など、具体的なアクションをグループで語り合った（会場2グループ、オンライン3グループ）。
- グループワーク内容共有（一部紹介）
  - ・【テーマ：有償ボランティア】ボランティアをやりたい側の発想で、例えば有償の場合の「学習ボランティア」は、「学習支援サービス」ならよい。代わる言葉をつくる。
  - ・【テーマ：ボランティアの活用】ボランティアの活用、とやってきた人に対し、「それは違う」と言い方・伝え方が難しい。「一緒にやりましょう」「一緒にやるんですね」と切り替えた言い方をしていく。
- 全体で意見交換（一部紹介）
  - ・ボランティアを「自治」の視点で捉え直しをする必要があるのではないかと。
  - ・日常的にボランティア活動をする人が良い人、という呪縛のような感じで使われている。



#### 参加者の声

- ・それこそボランティアも多様であっていいし、我々が大切にしたいボランティアのあり方っていうのも同時にあり、大切にしたいことの発信っていうのは重要なんだろうなとお話を聞いて感じていた。
- ・無償の労働力にすごく反発してきたのですが、私たちは本当に無償の行動力がある、でよいのではないかと。
- ・実はあまりモヤモヤがないまま、この分科会に入ってしまった、みなさんのこんなところにモヤモヤしてるんだっていうのがすごく新鮮でした。

#### 分科会担当者のコメント

- ・曖昧さが役立つこともあるが、その弊害として大切な何かが失われることへの懸念を伝えていきたい（石黒）
- ・自分たちが大切にしたいことが明確になると、そこに用いる表現・言葉が具体的になるように感じた（齋藤）
- ・自分が言語化しきれなかった想いを、みなさんが明確にしてくださり、違和感を深めることができた（清水）
- ・モヤモヤを持ち続けること。それを語り合うこと。の大切さを改めて感じました。（竹脇）
- ・ことばがツール化し、真意が失われていくことを感じています。率直な議論ができる環境を望みます（高橋）
- ・みなさんに会って「やっぱりモヤモヤし続ける」ことは大事なんだと思いました。仲間募集中です（橋詰）
- ・私たちは言葉で考えますから、言葉・表現の違いは思考の違いに通じます。やはりこだわりたい（早瀬）
- ・違和感に敏感になりつつも、ボランティアのあり方を多様な方に伝わるアクションも必要だと感じた（疋田）

#### 分科会担当者

JVCA 報道アクションチーム:

石黒建一(社会福祉士事務所うらら) / 齋藤元気(立教大学ボランティアセンター) / 清水由子(岐阜市教育文化振興事業団) / 高橋義博(府中市市民活動センタープラッツ) / 竹脇恵美(ふるさと体験木曾おもちゃ美術館) / 橋詰勝代(高島市社会福祉協議会) / 早瀬 昇(大阪ボランティア協会) / 疋田恵子(杉並区社会福祉協議会)



## 違いや多様性は“混ざる”からこそ意味がある

「つなぐ人」がいることで何がどのように変化するのか

「みんなちがって、みんないい」そんなことはもう当たり前？ でも、現実にはまだまだ総論賛成、各論反対も。違ってもいいけれど、同じ場所にはいてほしくない、一緒に何かをやるのは望まないということも。それではせっかく違いがあることの強みが発揮されません。多様性は交わるからこそ丁寧なコミュニケーションが必要になり、豊かな関係が生まれていく。ただそのつながりは自然発生的に生まれるとは限らないのです。そこで、出会いを促し、関わりを支えるコーディネーターの存在意義に着目して、周囲に変化をもたらすコーディネーションについて考えました。

### 登壇者

事例発表者 遠山 昌子さん（生き方のデザイン研究所 代表理事・コーディネーター）  
新居 みどりさん（NPO 法人国際活動市民中心（CINGA） コーディネーター）  
栗屋 浩さん（岩国市社会福祉協議会地域福祉課 課長補佐）  
コーディネーター 筒井 のり子さん（龍谷大学社会学部 教授）

### タイムスケジュール

### 参加者数

13:30 コーディネーターからテーマ説明  
13:40 事例報告①「福祉と教育と〇〇」  
遠山 昌子さん  
14:00 事例報告②「違いや多様性は“混ざる”からこそ意味がある「つなぐ人」がいることで何がどのように変化するのか-CINGA の実践を通して考える」  
新居 みどりさん  
14:30 事例報告③「13 世帯で挑む里山再生ストーリー -子どもたちが帰りたいと思う里山をつくる-」  
栗屋 浩さん  
14:50 質疑応答  
15:00 休憩  
15:20 グループワーク  
15:50 全体共有  
16:05 登壇者からのコメント（対談）  
16:15 コーディネーター（筒井 のり子さん）のまとめ  
16:30 終了

22 名

### 分科会の内容

この分科会は『違いや多様性は“混ざる”からこそ意味がある』をテーマに3人の実践者の「まぜる」体験から、コーディネーターの役割について考えました。

- 第1報告者の遠山さんは、障がい=かわいそうという認識の先生は特別扱いするという無意識の差別を無自覚に行うことがあるといい、しかし、これは障がいの有無にかかわらず同じ現象だと言います。そのため、遠山さんの「障がい学習」の現場では「びっくり」することから始まるといい、体験を通じて「知る→知っている→できる→無意識にできる」という段階を踏みながら相互理解を進めていくと話されました。そして、「ごちゃごちゃ」が生み出す出会いは時間をかけた対話から始まり、そこで変化を起こさせる力がコーディネーターには大切だと話されました。
- 第2報告者の新居さんは、月に100人と新たな出会いがあるといます。そして、多文化共生というけれど、今や外国人の課題は地域の抱える課題と何ら変わらないとし、医学部の学生が患者の外国人には、国籍に関わらず英語で話しかけるという事例から、「やさしい日本語」を医療領域に広げる「いのちを守ることばプロジェクト」について説明いただきました。この取り組みから、新居さんは「小さな出会いの先に何かが見つかる」とし、コーディネーターはつなぐ以前に自らがつなぐりを広げることが重要だと話されました。



- 第3報告者の栗屋さんは、「自分の不得意は誰かの得意」、「解決のヒントは日常にある」「キーマンを逃がさない」とたった1人の相談から様々な取り組みが生まれ、村おこしにつながった里山再生の取り組みを通して対話の仕方、関係の広げ方についてお話をいただきました。また、話の中では主語・述語を大切にすることやボタンの掛け違いが生じないように当事者同士に任せず、つなぎ役（コーディネーター）は、時間や体験を当事者と共有することや、相手に合わせて（相手が理解できるように）話すこと、当事者相互の利害も考慮してつなぐことが大切だとコーディネーターの役割についてお話しいただきました。
- 筒井さんによる3人の対談では、対話はキャッチボールではなく「手をつなぐ」イメージであること（新居さん）、変化することを恐れない、明るいオーラを出し続けること（遠山さん）、手をつなぐときは自らもつながるイメージである等、「つながる」「つながり方」をテーマに話しを進めていただきました。
- 最後にコーディネーターの筒井さんは、まとめとして3人のお話には①「気づき直しのリフレーミング」の要素が含まれていた。時にはリフレーミングすることも大切だ②登壇者の発想は「ひらめき」のようだが、実は日ごろから感度よく意識して物事をとらえていたり、情報や学習の裏打ちがある。③つなぎ方、つながり方においては接触相手も重要で、つながる相手選びも意識すること④関係作りはコーディネーターが化学変化を起こすような触媒となるつなぎ方を考えること⑤多少の立ち位置が違って目指す社会は一緒と考え、協力関係を築くことその際に三方よし（自分よし・相手よし・世間よし）に未来よしも四方よしを目指すとうまくいく⑥コーディネーターは縦糸と横糸を紡ぐことでつながりを広げていくこと等のポイントをあげられ、この分科会を締めくくりました。



## 参加者の声

- ・コーディネーターの「つなぐ」役割が、単に紹介するというだけでなく、どこどこをつなぐのかを発想する力、つないだうえでその間のよい関係をファシリテートする力など含まれることがよく分かった。
- ・発表者がなぜこのような感性やひらめきが出てくるようになったのか、もう少し時間をかけてお聞きしたかった。
- ・分野は違えど、コーディネーターとして大切にしている姿勢、関係をつくる、紡ぐを丁寧に、ということは共通していたように思います。
- ・つなぐ、というのは手を繋ぐことだ、という言葉がグッと刺さりました。果たして、私は地域の方と手をつなげているだろうか。コーディネーターとしての姿勢を見つめ直す機会となりました。
- ・コーディネートすることは、最初は小さな変化でも、人、地域、制度や国を動かしていくのだな、今さらですが、政治なんだなと思いました。
- ・「利害で組む」「お願いではなく、提案」というのがとても刺さりました。損得だけではないと思いますが思いやりや善意だけでは持続していけないので、win-winになるように動くことが大事だと思いました。

## 分科会担当者のコメント

- ・地域の中にコーディネーターのセンスを持った人たちがもっと増えてくるといいなと思うとともに、混ぜることを意識し、計画的・戦略的にすすめるコーディネーターという人材がいることで地域の景色や人々の関係性が変わっていくことを再認識できました。大変なことは山ほどあれど、それをも楽しみに変えている姿が伝わってきて、ヒントとエネルギーをいっぱいもらった3時間半でした。
- ・今回3人の報告を聞き、混ぜるな危険というけれど、混ぜるからこそ生まれる化学反応は人を変え、それまでの関係を変え、社会を変えるということを学んだように思います。ボランティアコーディネーターは単なるつなぎ役ではなく、自らも当事者と手をつなぐことで、有益な化学反応を起こす触媒になることを目指したいと思いました。

## 分科会担当者

後藤麻理子（日本ボランティアコーディネーター協会）

文珠正也（ワーカーズコープ・センター事業団関西事業本部）



## 高齢化・人口減少コミュニティにおけるコーディネーション

ウチとソトをつなぐチエとワザ

農山漁村をはじめとする、高齢化や人口減少が進む地域では、コミュニティ内外のヒト・モノ・コト・カネ等の各種資源を、課題解決に結びつけるコーディネーションへの期待が高まっています。一方で、コーディネーションの際には、コミュニティの主体性や活動の継続性をいかに担保するかも問われます。

この分科会では、農村部の住民自治組織による「地域のなんでもや」の実践や、外国人技能実習生と地域課題を結ぶ取り組み等、先進的な事例にも学びつつ、高齢化・人口減少コミュニティにおけるコーディネーションのあり方について考えました。

### 登壇者

事例発表者 吉澤 武志さん（宮城県丸森町 一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 事務局長）  
石丸 利太さん（佐賀県伊万里市 黒川コミュニティセンター 地域づくりサポーター）  
進行 菅野 道生さん（淑徳大学 准教授）

### タイムスケジュール

### 参加者数

13:30 開会、オリエンテーション、趣旨説明  
13:40 参加者自己紹介  
13:55 実践報告  
14:45 休憩  
14:55 グループディスカッション  
15:15 全体ディスカッション①（質疑応答含む）  
15:45 個人ワーク（実践に向けたプランニング）  
15:55 全体ディスカッション②（プランの交流と質疑）  
16:25 まとめ  
16:30 終了

11名

### 分科会の内容

#### ● 事例報告1「住民主体で取り組む地域づくり」

吉澤武志さんから、筆甫（ひっぽ）地区での住民自治組織の活動事例をお聞きました。筆甫地区の基本情報、人口減少や高齢化といった地域課題の具体的な状況、及び地域の特産品開発、イノシシ対策、高齢者支援等、地域運営組織が地域住民とともに取り組んでいる活動について詳しく話してくださいました。特に大きなポイントとして「地域住民の最も強い願いに対してアクションを起こすことが大切」ということが強調されていました。アンケートを通じて最も住民の関心が高い課題（イノシシ対策や仕事づくり、高齢者の生活支援、若い世代の担い手育成等）に最優先で取り組むことで、「地域運営組織とは何なのか、地域運営組織が『誰のニーズ』で動くのかを示すこと」が、主体的な地域づくりにとって重要であるとの考え方が紹介されました。

#### ● 事例報告2「多文化共生による地域づくりの取り組み」

石丸利太さんから、伊万里市黒川地区における、技能実習生との交流を通じた休耕田を利用した野菜作りや、地元産品の活用による地域農業の振興と地域づくりの取り組みについて報告していただきました。黒川町では畜産・米作が盛んですが、農地の多くが中山間地域に所在しており、高齢化により休耕田が急速に拡大しています。一方で人口の12パーセントを外国人技能実習生が占めており、特に20歳代ではその比率は約7割に及んでいるという特徴もある地域です。日本の農業を学びたいという実習生のニーズと、休耕田の活用、多文化交流による地域活性化という地域のニーズをつなぐ、コーディネーションの取り組みは非常に興味深いものでした。

#### ● 質疑

質疑では、「コロナ禍における課題への対応（集まらない中での地域活動の工夫、実習生の減少への対応等）」、「地域のソトの人たちが住民の方の『やりたい』をつなぐための動きはどのようであったか」「活動における社協との関わりは?」「若者支援の具体的な内容」「実習生との関わりで印象的だったことは?」等の質問が出され、活発な意見交換が行われました。

事例報告者のお二人からは、「ソト」からきた人も含めて、活動で生まれる交流を通じて、コミュニティの「内なる力」のパワーアップをしていくことを意識することが重要であるといった回答がありました。また、

人口減少・高齢化コミュニティでは、地域の課題はどんどん増えているなかで、いろんな人を巻き込んでいく中で、課題にアプローチしていく人が増やしていく必要がある。ポイントは「主役になれる人」をどれだけ生み出すことができるかであったといった話もありました。

### ● 全体ディスカッション

全体ディスカッションでは、「自分の地域も高齢化と人口減少が進んでおり、住民への働きかけに悩んでいる。まずは住民と一緒に小さな渦を作り出すところから始めたい」、「社協は地域に働きかける際に、孤立死や災害、防災などをとりあげ、危機感をあおるようなアプローチをとりがち。自分たち自身が楽しみながらコーディネートしていかないといけない」「『住民主体』が抜け落ちないようにまずは楽しいこと、住民がやりたいと思うことを切り口に始めていく必要がある」「自分の地域では災害を経験したことによる危機感が、地域活動のひとつの原動力となっている。まずは住民の声を聴くところから始める必要がある」といった意見が出されました。ディスカッションを通じて「小さな渦を作り出し、それを広げていく」「住民の声を拾い、その人が主役になれるようにプレイヤーを増やす」「課題はきりなくある、その課題にアプローチできる人と組織を育てていく」といったコーディネーションのポイントが浮かび上がってきました。



### 参加者の声

- ・ 10年後のためというわけではなく今を続けていく、という吉澤さんのまとめの言葉を胸に明日から頑張ります！
- ・ 自身の町は人口減少、高齢化が他市町村と比較しても進んでいる方であり、これまでのように担い手が一手に引き受けて先導して何かやっていくスタイルは難しくなっています。そのような中で本日の話にあった、みんなで役割分担をして活動をしていくというスタイルが大事であることを再確認することができました。福祉に限らず多様な主体とつながることも大事にしたいと思います。
- ・ 社協で働いていますが、どうしても住民からは”お役所”的なイメージを持たれることが少なくありません。なので地域に出ると、社協が考える地域課題と住民が考える課題・やりたいこと（やりたくないこと）には乖離があることが多々あります。まずは、顔を知ってもらう、人となりを教えてもらう、地域を教えてもらう姿勢で楽しむことが、共創への第一歩だと感じました。
- ・ お二人のお話、グループワークからコーディネーター、住民さん、関係機関と一緒に楽しむことが大切だと気付きました。

### 分科会担当者のコメント

高齢化・人口減少が進む農山村地域において、外部の人的資源をいかに地域の課題解決に結び付けるか、そこにおけるコーディネーションのコツやポイントを探りたい、というのが企画担当者の問題意識でした。しかし、実際にこの分科会で主なテーマとなったのは、地域づくりの活動において、いかに「住民主体」を貫けるかという問題でした。2つの事例に共通していたのは「そもそもうちにおける主体性が確立していなければ、ソトの人を受け入れることはできない」というメッセージだったように感じられます。そこにおけるコーディネーターの役割は、住民が本当に望んでいること（困っていることややりたいと思っていること）を明確にし、「一緒に取り組む」ということだと感じました。一方で、まずは地域の中で「小さな渦（きっかけとなるような小規模なイベントやプログラム等）」を作り出し、それを地域に広げていくというアプローチも紹介されていました。その最初の「渦」を作り出す際に、「ソト」の力を借りることは「あり」なのだと思います。高齢化・人口減少が進むコミュニティにおける地域主体、住民主体の地域づくりのコーディネーションについて今後も考えていきたいと思っています。

### 分科会担当者

開澤裕美（中央大学ボランティアセンター） / 鹿住貴之（JUON(樹恩)NETWORK） / 菅野道生（淑徳大学）  
杉浦健（共働プラットフォーム） / 矢富明德（佐賀県国際交流協会）



## ボランティアは「オワコン」か？

研究の最前線から学ぶ、若者のボランティア参加

昨今、インターン等社会参加メニューの多様化、困窮によるアルバイト時間の増加や資格取得による多忙化等、学生をはじめとした若者を取り巻く環境は変化しました。それ故、若者はスキマ時間を使ってできる単発の「体験型」ボランティアを好むようになったと感じられます。かつて主流だった「フルコミット型」ボランティアは、「オワコン」（＝興味を引かない終わったコンテンツ）になったのでしょうか？そうであれば、私達は「オワコン」化に抗うべき、あるいは受け入れるべきなののでしょうか？近年のボランティア論研究をもとに考えました。

### 登壇者

講師兼コメンテーター 仁平 典宏さん（東京大学大学院教育学研究科 教授）  
実践研究報告者 直井 友樹さん（横浜国立大学大学院 博士課程後期）

### タイムスケジュール

13:30 オープニング  
13:40 問題提起：直井さん  
14:00 レクチャー：仁平さん  
15:00 グループワーク  
16:20 クロージング  
16:30 終了

### 参加者数

46名

### 分科会の内容

#### ● 問題提起

本分科会の問題提起が行なわれた。実践研究報告者はこれまでの実践や研究等から、若者の参加の形態が、「フルコミット型」ボランティアから、単発の「体験型」ボランティアに変わってきているのではないかとの仮説を提示した。その参加の形態の変化を、「オワコン」（＝興味を引かない終わったコンテンツ）化と名付け、若者にボランティア活動へ参加してもらうためには「オワコン」化を受け入れるべきなのか、それとも抗うべきなのかという問いが投げかけられた。

#### ● レクチャー

講師はまず「オワコン」化という言葉が、ボランティア自体からの撤退の進行を想起させるため、「長期・限定から短期・多様へ」という参加の形態の変化を「ビュツフェ」化として定義した。そのうえで、「ビュツフェ」化が、「社会の流動化／中間集団の解体／関係性の短期化」という構造、さらに「学生の就活・生活時間を取り巻く構造」の変容が「タイプを意識せざるを得なくなっている側面があるとしても不思議はない」という点を指摘した。一方、「若者以後の長い人生を通じて、関わりを完全に絶たないためには、短期・断片的な枠組みも理がある」側面も指摘され、「形態を問わず、意義の可視化・物語化は重要」と示した。

#### ● グループワーク

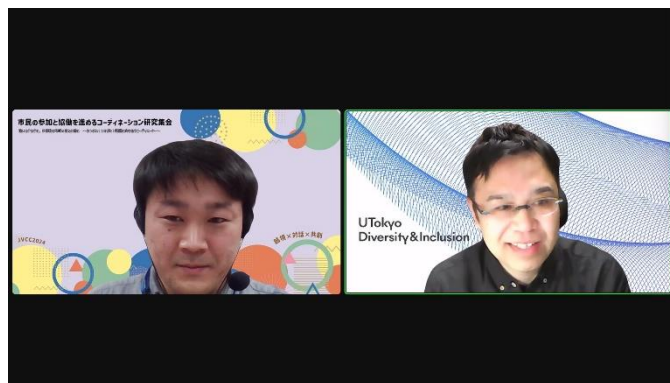
次のタイムスケジュールで、グループワークを実施した。

15:00 自己紹介、レクチャーの感想、各現場に引きつけた状況の共有  
15:15 共有（担当：直井）  
15:20 状況の共有の続き、現場でどう対応していくかの検討  
15:50 発表（担当：各グループ）

グループワークは、Zoomの機能であるブレイクアウトルームに、10グループ（各グループ4-5人）でわかれて行なった。まず参加者は、各グループにおいて自己紹介、レクチャーの感想、参加者の現場における状況の共有を行ない、記録はGoogleスライドにて、各グループの参加者をお願いした。その後一度全体で集まり、記録された内容を紹介しながら、全体共有を行ない、再び同じグループにわかれた。ここでは30分間、参加者の現場における状況の共有が済んでいないグループは続きを行ない、済み次第、参加者の各現場でどのように対応していくのか（たとえば、単発で来た人をより深いコミットメントに導くべきか？こちらが変わるか？）について話す時間とした。その後全体で集まり、各グループの担当者から発表していただき、共有\*を行なった。

## \*PICK UP

- ・色んな参加の形態を用意する／継続できそうな学生へコアなアプローチをするなど強弱をつける必要がある
- ・ボランティアの魅力は継続的な関りの中で得られる経験や人間関係も大きいと思っている  
↳これらの魅力を感じてもらえるように学生へ振り返りなどを通じて提供したい
- ・継続の活動にどう移行するのかがキーワード
- ・本当にこのボランティアを通して子どもたちのためになったのかな？とモヤモヤと課題を持っている方が、長期の経験に繋がるのではないかな？達成感を短期で感じ切ってしまったら、そこで終わってしまう
- ・機会費用を払っていることを地域に理解してもらうことも大事  
↳対話の機会や出会う場をつくる／お互いのことを知る
- ・フルコミットできない世代になったときに単発での参加の方法があるのは大きい
- ・本当に忙しい中で意義をどう伝えるのかが大切  
↳一度下がってしまったモチベーションを上げるのは難しいので、新たなスタートを切るなどトライ＆エラー
- ・物語化（言語化）の重要性をちゃんと業務としてサポートしたい
- ・ガクチカのようなところで文章化するとき、経験した学生だけでは物語化は難しい  
↳一緒に行って話ながら物語化をしていく
- ・物語化というキーワードもあったが、参加した学生の語りでメッセージを送ることも大事なのではないかな
- ・熱心な学生は一定数いる（自分自身の成長や今後のキャリア等明確な目標につながっている）  
↳こういうところを取り上げたりしてもよい（先輩の体験談セミナーなど）
- ・短期でも心を動かすようなプログラムを組めれば続くのではないかな？  
↳そううまくは行かないことも多い。考える余白をつくるとよいかも



## 参加者の声

- ・単発型がいけないというのではなく、長期型（フルコミット）への入口という意識をもって、工夫していきたいという気持ちが強まった。先生からのお話とグループワークでの発表から得られたヒントを生かし、効果的なサポートや声かけ、仕組みづくりを模索していきたい。普段感じているモヤモヤについて、他の人も同じように感じているんだと知れたり、学生へのボランティア促進においても、「物語化」の重要性を改めて感じる事ができた。
- ・仁平先生が最後まで話していただいたことが腑に落ちました。大学、大学生が地域の中でいろんな形で利害関係があることが見えにくい。一人一人が社会とどう関わっているのか、大学も地域の一員であることを大学が学生に教えられていない。これは教学サイドでやっていく（伝えていく）べきことで、大学自体が大学ボランティアセンターにそこからお任せではなく、きちんと大学内でボランティアセンターを位置付けなければいけないということ。ボランティアセンター側も、大学内での位置付けについて法人内で発信していくことが必要と感じました。現場で感じていることに対して自己肯定できる言葉をかけていただきつつ、新しい視点を与えていただけて、何か次の動きにできそうと感じさせられる分科会でした。

## 分科会担当者のコメント

46名もの方にご参加いただいた。これだけ多くのボランティアコーディネーターに参加していただけたことは、日頃現場にて直面しているテーマなのだろうと、改めて実感した。今後も、現場と研究をつなぐ今回のような場をつくり、継続して議論を展開・発展させていきたい。

## 分科会担当者

榎本朝美（東京ボランティア・市民活動センター） / 鹿住貴之（JUON(樹恩)NETWORK）  
菅野道生（淑徳大学） / 直井友樹（横浜国立大学大学院）



## ボランティア、管理しすぎていませんか？

災害ボランティアセンターを事例に

組織のリスクマネジメント意識が高まる中でボランティアを管理する傾向が強くなりすぎていると感じることはありませんか？災害現場のボランティアコーディネーションは、ボランティアの安全や効率的で平等な支援活動を考え、その傾向が強くなることがあります。今回、災害ボランティアセンターの運営を事例に、その傾向の背景を探りつつ、ボランティアの主体性や特長を活かしながら、ボランティアもボランティア活動の対象となる人、コトもハッピーになる、管理を超えたコーディネーションの可能性とヒントを考えます。

### 登壇者

発題 頼政 良太さん（関西学院大学人間福祉学部社会起業学科 助教 / 被災地 NGO 協働センター 代表）  
事例共有 平林 秀敏さん（川崎市社会福祉協議会 企画調整室長）  
関根 正孝さん（一般社団法人ピースポート災害支援センター 防災減災教育担当）

### タイムスケジュール

9:30 開始・趣旨説明  
9:40 発題：頼政氏より  
10:20 質疑応答  
10:30 事例共有1：平林氏より  
10:50 休憩  
11:00 事例共有2：関根氏より  
11:35 グループワーク  
12:15 まとめ

### 参加者数

29名

内訳：会場19名、オンライン10名

### 分科会の内容

本分科会はハイブリッドで開催され、会場には登壇者の他、参加者19名が分科会後半のグループワークでのグループごとの島に座る形で参加し、オンラインからは10名が参加した。

- 発題：頼政氏から、まず日本の災害ボランティアの変遷について共有がなされた。阪神淡路大震災以降、社会に定着してきた災害ボランティアには、ボランティアを支えるがより秩序だった行動を促し、被災者中心ではなく、秩序化のドライブと被災者中心に臨機応変な活動を促す遊動化のドライブがあったという。阪神淡路大震災では実際には民間でボランティアをコーディネーションする多くの団体があったものの、徐々に社会福祉協議会が運営する「公的」なボランティアセンターへの一元化が進んだ。2004年には全国社会福祉協議会から災害ボランティアセンターについての手引きが発行され、2005年には内閣府が防災ボランティア検討会を設置して、秩序化のドライブが働いた管理・統制モデルの災害ボランティアセンターへの流れが強まった。しかし、2011年の東日本大震災では「公的」な災害ボランティアセンター以外の「民間」がボランティアの受け皿となり、また、「公的」な災害ボランティアセンターだけでは支援が届かないという問題が指摘され、「民間」の災害ボランティアセンターによる即興・自立モデルが再興することとなった。管理・統制モデルと即興・自立モデルの共存が求められるとし、「公的」な災害ボランティアと「民間」の災害ボランティアセンターの連携の可能性を、自身の団体、被災地協働NGOセンターでの連携経験を織り交ぜながら共有いただいた。
- 事例共有1：災害ボランティアセンター運営におけるコーディネーションのジレンマというタイトルで、社会福祉協議会職員としてこれまで関わってきた災害対応の経験と課題意識などを平林氏から共有いただいた。2019年の東日本台風による川崎市内の浸水被害発生時の具体的にどう社協がどう動き、災害ボランティアセンターを運営し、どういった人、組織と連携して対応したかについて説明いただいた。そのうえで、床下浸水への対応が必要な中で、一般ボランティアに任せられるか、任せていいのかといった懸念があったが技術系ボランティア団体との協働でその課題を乗り越えたり、地域で設置された独自の災害ボランティアセンターとの連携をして対応していったことなどが語られた。最後に、組織も職員も守らなければいけないが、社協職員の「誰もが住み慣れたまちでその人らしく暮らせるまちづくり」の実現という使命とのほざまでのジレンマがあることなども率直に話された。
- 事例共有2：一般社団法人ピースポート災害支援センターのこれまでの災害支援は、災害ボランティアセ

ンターだけでなく、支援物資の配布、食事支援、家屋清掃、仮設住宅支援などがあり、それらの経験を具体的に共有いただいた。ボランティアコーディネーションの際には、第一の目的をより被災者の役に立てる支援活動を実現することとし、その上でボランティアの安全管理と被災者への配慮を大切にしているという。被災地での支援は単独ではなく、その地域の支援者と連携することが多いが、そうすることで意識決定の参考となるような情報が得られたり、その後の活動のキーパーソンとなるような人物と出会えたりする。もちろん、その連携は地域の支援者の負担軽減になるよう心掛けている。そして、災害支援は地元の人だけでなく、民間、公的さまざまな支援者と連携することも多いが、その際には支援者間の情報共有や認識の共通化、意思決定は地域の支援者が行う、「こうあるべき」を押し付けない、といったことを心掛けていと共有いただいた。

- ワークショップ：会場 4、オンライン 3 の計 4 グループに分かれて、災害復旧・復興期における被災者支援において、自分が災害ボランティアセンターのスタッフとして何ができるか、どういった人・団体と連携するとよいかを事例をもとに考えた。事例は、東京近郊の梨園が台風被害を受けて、梨園を運営する高齢の方は落ち込んで園を閉めようとしているが、産業として大切な梨園なしのまちの復興はないと思う住民もいる中で、どう対応するかという内容だった。登壇者の方々から聞いていた連携の事例や心掛けるポイントをもとに、「学生とつながれないか」、「本人の気持ち大事だね」、「農協は欠かせないのでは」、「農業の専門家と専門団体とやっぱりつないだほうが」、などグループごとにさまざまな意見をまとめ、最後にハイブリットで発表していった。



## 参加者の声

- ・連携の大切さを改めて感じたが、おそらくそれは災害後にしようと思っただけでなく、日頃からそういう意識でいないといけないと思った。
- ・グループワークで自分とは分野が違う人、災害支援の経験のある人、全くない人が混ざっていて、いろいろな考え方を知ることができて面白かった。多様な人と出会えた貴重な機会だった。
- ・3時間は長いと思っていたが、始まったらあっという間だった。
- ・それぞれが貴重な経験と考えを持っている方の話を3名分も聞いて非常に勉強になった。

## 分科会担当者のコメント

- ・災害時は非常時で、通常のボランティアコーディネーションや連携とは異なる対応が求められる場面もあるのだろう、それで議論が止まってしまうか、といった不安が開催前にはありましたが、最終的には、「公的な」、「民間」のどちらがいいということではなく、それぞれ支援団体には強み弱み、特徴があり、そのような異なる者たちがいかに連携してボランティアを活かし、そして被災者に寄り添うことを第一に考えるかが大切だと改めて感じることができました。参加者の方々には社会福祉協議会職員の方も多く、能登半島地震発災から間もなかったこともあり、みなさん自分事として真剣に参加されていたのが印象的でした。（勝井裕美）
- ・グループワークでは限られた時間と情報の中で、活発に議論をいただきました。多様な所属の方たちで話し合いができるようにグループを振り分けましたが、同じような視点の人が集まると、内向きでリスク管理のほうに目が行きがちなので、多様な人と長期的な視野で議論することにより、「管理を超える」コーディネーションが実現できるのではないのでしょうか。講師からのお話では、管理・統制と即興・自律は対立でなく、連携していくことが大事であり、連携するために日常からつながりなどを持っていくことなど参加者とともに学ぶことができました。（藤居昌行）

## 分科会担当者

勝井裕美（シャプラニール＝市民による海外協力の会） / 藤居昌行（小平市社会福祉協議会）



## 地域づくりのパートナーに生協を選んでみませんか？

生協との連携事例からつながり方を考える

生活協同組合（生協）は、多様な個人・組織とつながりを持ち、そこから生まれる力を活かして地域の様々な課題の解決に取り組んでいます。一方で、生協がどのような活動を行っているのかわからない、つながり方がわからないという声をよく聞きます。この分科会では、3つの生協の連携事例を紹介し、生協とのつながり方を考えます。「協同の力」を大切に生協は、違いをチカラにすることが可能です。地域づくりのパートナーとして、生協をはじめとする様々な団体とのつながり方を一緒に考えました。

### 登壇者

- 基調報告 犬丸 智則さん（厚生労働省 社会・援護局地域福祉課地域共生社会推進室 支援推進官）  
 事例発表① 佐渡 光さん（黒部市社会福祉協議会 地域福祉課主任）  
 事例発表② 赤井 郁夫さん（一般社団法人 office ひと房の葡萄 代表理事）  
 事例発表② 前田 裕保さん（生活協同組合コープこうべ 第1地区本部長）

### タイムスケジュール

### 参加者数

9:30 趣旨説明 : 青木覚さん (日本協同組合連携機構)	<b>14名</b>
9:40 基調報告 : 犬丸智則さん (厚生労働省)	
10:20 事例発表① : 佐渡光さん (黒部市社協)	内訳：会場7名、オンライン7名
10:35 事例発表② : 赤井郁夫さん (office ひと房の葡萄) + 前田裕保さん (コープこうべ)	
10:55 休憩	
11:05 グループ交流・進行：文珠正也さん (ワーカーズコープ)	
12:20 まとめ：中谷隆秀さん (長野県生協連)	
進行：鹿住貴之さん (JUON NETWORK) 記録：蔦直宏さん (日本生協連)	

### 分科会の内容

- **地域共生社会の実現に向けて＝つながりがつながりを生む！！一石N鳥のまちづくり＝犬丸智則さん**  
 地域共生社会の理念の背景にあるもの①人口減少社会。右肩上がり時代の終焉、生活の基盤である地域（まち）をどうするのか。②自助・互助・共助・公助のバランスの変容。幸せに一步踏み出せない“生きづらさ”を抱えた方がいる（声なき声）地縁血縁社縁のクッションが弱い現状。「これから」の社会福祉を考えたい。みんな目指していることは一緒。みんなでみんなが居心地の良い街づくり、地域共生社会の実現に向けて、福祉の枠を飛び越えて農林、産業なども含めて取り組む必要がある。地域づくりを考える上で、きっかけに着目することが大切。  
 たとえば楽しさ、日常性、はじまりはわたし（たち）。わたしを活かしてつながりを生む。「こうやりたい」を実現できる環境を整え、現場と共に育てていく。ひとつの大きな円で支えるより無数の小さな円が生まれ重なるイメージ。遠回りをすればするほど愛着が沸くが、みんな近道をしたがる。地域の「資源」、すでにあるものとのマッチング。「一石N鳥」の世界。鎧を脱いで一緒に動いてみよう。  
 人がつながるきっかけとして「三方良しプラス研究会」という飲み会をやってみた。誰が来てもOKで人が人を呼ぶ形に。その飲み会の対話の中から「再縁寺プロジェクト」が生まれた。自分がしたい人生のスタートラインに立つことを応援、色んな人が自然に混ざり対話する場。何かを目的にふっと行ける、行きたくなる場。そんな場（Café）をつくらうという取り組みのなか、生協（コープしが）と出会い、生協も同じ趣旨で活動していることを知った。業務ではなく、想いに共感して生協が仲間に加わった。Café を宅配商品の受け取り拠点にすることでコープ商品を通じたつながりが生まれた。大阪の生協の「居場所づくり」では、場所は生協で用意、運営から内装まで市民が手作りでやっている。その場に生協がコーディネーターを配置することで、市民活動を応援している。小さな円をつくるきっかけに共通するのは、開きっぱなし、開かれすぎたプラットフォーム。地域共生社会すべての人が自分らしく共に生きる包摂的な社会。お互い「何かしてほしい」ではなく「あったらいいな・できたらいいな」でつながるのが面白い。人と人がつながって夢があればなんとかなる。お金はあとでなんとかなる。先に事業を考えてしまうが想いを語る仲間として生協や社協として考えてみては。
- **くろベネット事業におけるとやま生協と黒部市社協の連携について 佐渡光さん**  
 富山県黒部市人口3.9万人。「くろベネット」対象者380名。見守り生活支援体制を企業・専門職・行政が連携して包括的に行っている。特に生協や新聞など、配達の中で見守りを行っていただいている。買い物困難者が増えている、2019年より、システム企業とICTを研究、生協と包括連携協定締結、市、市社協、生協で「くろベネット」見守り協定。カードを置いてボタンを押すことで社協につながる。「元気だよカード」は社



協（3日連続なかったら訪問）に、「御用聞きカード」は生協に。21年機器台数20台、ボタンが押されない状況も検知。いずれは、富山県全域、北陸地方での拡大を目指したい。

● 兵庫県尼崎市における居住支援 地域の中のグレイプハウス 赤井郁夫さん

一社officeひと房の葡萄は法人2017設立、「リーフル」という尼崎市の募集停止市営住宅を利用した取り組み。きっかけは21歳の女性からのSOS、シェアハウスを作ろうと動いたが適当な物件がない上、大家が貸し渋る。古い団地4戸借りるところからスタートした。親は問題をかかえており、充分ケアされていない子どもが多い。子どもは社会の中で自立する親との対峙だけではダメ。子どもとおとなも対等な関係が必要、子どもは非常に良く大人の行動、背中を見ている。募集停止の空き住宅の活用なので今後の見通しに課題はあるが、関わる大人が増えてほしい。

● 兵庫県尼崎市における居住支援 居住者支援の隙間の支援 前田裕保さん

生協は「社会貢献団体」でもあり、地域活動に関わっている。2015年にこども食堂を立ち上げたいNPOと出会う。廃棄食材の無償提供などを行ううちに地域からの信頼と期待が高まった。近年シングルマザーや外国人など弱者からの居住問題を聞くようになってきた。そのころ尼崎市から新規募集停止住宅の自治会活性化の相談として尼崎市からの相談があった。18団体と連携し45戸の居住支援に結びついている。

● グループ交流での主な意見（参加者の声、【所属】）

【講師】「むりやり混ぜこむのはキケン」意外と洗剤以外にも当てはまる。相手のことを知る必要がある。/  
【講師】私は「混ぜる」ようにしています。巻き込むと巻き込み続けられないといけなくなる。/  
【講師】私は下手なのかもしれない。巻き込まれる側のように思っている。/  
【生協】地域ささえあい助成では、昨年から居住支援の申請が増えてきた。居住支援が社会の問題になりつつあると思う。目的外利用（尼崎市）の背景が知りたい。/  
【生協】人のつながりを起点には思うがまだ広がりがない。「生協は地域の資源インフラなんだ」そうなりたい。全自治体首長と会談したい。/  
【講師】生協＝物販という見方を変えてみましょうと言っている。「なんで生協だけ」が行政の公平あるある。目的目指す方向が一緒ということを丁寧に説得したい。/  
【社協】コープとの協定を目指している。災害が主と考えていたが、包括協定に広がりつつある。まずはざっくばらんにキッカケを探っていくことからはじめたい。/  
【生協】社協だけでなくその他のJAなど協同組合との連携も深めてほしい。/  
【社協】中間支援スタッフのための講座担当、コーディネーターが声を掛ける人が同じ人になりがち。今回、生協が地域にすぐく目を向けていることを知れて良かった。生協とは「災害や物資にとどまっている」のだと思っていた。/  
【講師】車座は誰を連れてきても良い的な「ゆるい場」が成功。「自分が好きな場所って何だろう」を起点にするといい。お膳立ては来る人がゲストになる。/  
【NPO】居場所活動、地域の大学と連携など協働を呼びかけるも生協の反応がない。「ポスター」も断られた。夢を語り合う場に生協が来てくれない。/  
【生協】生協組織は大きいので叩く扉で反応が異なる。生協にとって事業は、生活を良くする手段、道具としての事業なのに現場は事業をどう継続させるかで頭がいっぱい。現場では断られる。/  
【講師】自生協でもそういう反応を取る職員は多い。私の見たNPOの方もあらゆる人に声をかけて、あらゆる人に断られている。あきらめないでほしい。巡り巡ってつながると思う。/  
【生協】夢を語り合えば事業はついてくる。地域毎に抱えている課題、生協ごとに抱えている課題も異なる。話をすることが重要だ。



分科会担当者のコメント

- ・生協との連携について現場視点のリアルな交流ができました。「JVCCでの出会いにより生協との連携につながった」という参加者からの嬉しい報告も！これからも実践を大切にしていきたいです。（青木）
- ・これまで3年間「生協×社協」分科会を行ったからこそ、今回発展した企画ができました！（鹿住）
- ・諦めないでノックし続けるがキモなんです。（薦）

分科会担当者

青木覚（日本協同組合連携機構） / 鹿住貴之（JUON(樹恩)NETWORK） / 薦直宏（日本生活協同組合連合会）  
中谷隆秀（長野県生活協同組合連合会） / 文珠正也（ワーカーズコープ・センター事業団関西事業本部）



## 「ホンモノの地域共生社会」を実現するために 大学に求められるコーディネーションとは

そのカギは「応答性」にあり！？

現在、国は「地域共生社会の実現」をキーワードに、一人ひとりが主体となって支え合う地域社会づくりを推進しています。また、多くの大学では社会参画を通じた「学生の学びと成長」「大学の地域貢献・地域連携」等を目的としてボランティア活動等を推進する部署が設置されていますが、最近では地域への協力という段階を超えて、主体的に地域社会づくりを担うことを打ち出す傾向も見られます。

この分科会では「ホンモノの地域共生社会」の実現にむけて、学生の主体性を引き出すコーディネーションはどうあるべきか、講義と事例報告、ディスカッションを通じて考えました。

### 登壇者

講師 室田 信一さん（東京都立大学人文社会学部人間社会学科 准教授）  
事例発表者 北川 さらささん（多摩区ソーシャルデザインセンター 正会員）  
俵 隆典さん（多摩区ソーシャルデザインセンター 事務局長）  
石川 陸矢さん（東京都立大学大学院理学研究科物理学専攻 博士後期課程1年）  
足立 陽子さん（淑徳大学地域共生センター コーディネーター）

### タイムスケジュール

9:30 開会、オリエンテーション、趣旨説明  
登壇者・企画者・ボランティアスタッフ紹介  
9:40 地域共生社会についての講義  
10:00 事例報告①・②  
11:10 休憩  
11:20 グループディスカッション①  
（事例報告への質疑応答）  
11:45 グループディスカッション②  
（地域共生社会づくりに学生が関わるポイント）  
12:25 まとめ  
12:30 終了

### 参加者数

25名

内訳：会場13名、オンライン12名

### 分科会の内容

#### ● 地域共生社会についての講義～地域共生社会のどこらへんが「ニセモノ」か？～

室田先生より地域共生社会に関するご講義をいただきました。地域共生社会の考え方は経済システムの進化とそれに伴う地域社会の関係性の変容から生まれてきたこと、また、地域活動の構造等についてお話しいただきました。地域活動に参加・協力したり、問題意識を共有する関係性が強い地域は豊かな地域であり、住民や当事者の中にリーダーシップが培われていくこと、そして、ここで理想的なリーダーシップは一人の強いリーダーが引っ張っていくリーダーシップではなく、それぞれは頼りあい、役割分担をしながらみんながリーダーシップを発揮していく関係性が重要であると強調されていました。助ける・助けられるではなく、すべて自分事と捉えてお互い様の感覚で地域社会をつくっていくというのが地域共生社会の考え方ですが、それが動員になってしまうとニセモノの地域共生社会になってしまいます。では住民自身、特に大学生が主体的に地域をつくっていくホンモノの地域共生社会にするためにはどうすればいいか、事例報告やディスカッションを通して考えていこうと問題提起がありました。

#### ● 事例報告1「東京都立大学の取り組み」

東京都立大学で実施していた、継続的なボランティア活動と事前・事後学習が体系化されている「地域ボランティアプログラム」の事例について、学生の立場から石川さんに、コーディネーターの立場から足立さんに報告していただきました。プログラムとしての目的や目標はあり、最初はある程度決められた活動に参加する中で、徐々に学生自身が問題意識をもって主体性を発揮し、新たな取組が生まれて広がっていったという事例です。足立さんからは、事前・事後学習のあり方や参画の階段を意識したプログラムづくりなど意図的に働きかけた部分と、コーディネーターとしての姿勢や大切にしていることなどをお話しいただきました。石川さんからは、先輩への憧れやチーム活動から芽生えた責任感などにより、徐々に自分事になっていき、主体性が生

まれていったというお話がありました。

### ● 事例報告2「多摩区ソーシャルデザインセンターの取り組み」

神奈川県川崎市多摩区にある多摩区ソーシャルデザインセンター（通称：SDC）の事例について、設立当時、大学生であった北川さんと事務局長の俵さんより報告していただきました。SDC 開設に向けて多摩区が区民委員を募ったところ、たまたま多摩区在住の大学生が複数名集まったとのこと。もともとは学生をターゲットにした施策ではなかったものの、若い人が若い人を呼び、新たな居場所ややりがいを求めて学生が集まるようになったそうです。役割が増えていったり、学生への裁量が大きいためその達成感があったり、自分の住んでいる地域だからこそその当事者性などがあり、そこから地域をつくる一員としての主体性が引き出されたとのこと。俵さんたち大人も同じ地域住民の目線で学生たちの想いを活かしながら相談に乗ったり、行政職員とのつなぎ役を担っておられた様子が伝わってきました。

### ● グループディスカッション

事例報告への質問や感想共有に続いて、地域共生社会づくりに学生が関わるポイントや、どうしたら自分事になっていくかについて、グループで話し合いました。下記、出された意見を少しまとめました。

- ・ 活動後の振り返りや事後学習、自然にわいわい想いを語り合える場の重要性
  - 地域の人や先輩からの話を聴く機会
  - その場のファシリテートも学生自身ができる
- ・ プログラムの中で、完全に決められた活動ではなく、ゼロから丸投げでもない「余白」のあるプログラムを設定する
- ・ 最初の時点から大人（地域の人・教職員）と学生の認識のすり合わせを行う
  - 大人が言い過ぎず一緒に考える、頼ってみる、信じてみる
- ・ そもそもコーディネーターが多くのリソースをもっているかが重要
  - 普段から地域に出ることが大切

今回、学生が主体的に地域共生社会づくりに関わった事例として、大学ボランティアセンターと、地域での2つの事例を題材にして、ディスカッションを通して学生の主体性を引き出すコーディネーションはどうあるべきか考えました。

最後に、講師の室田先生より、学生を「学生」という存在ではなく、「地域住民」として捉えることが大切なのではないかという、まとめのコメントがありました。



### 参加者の声

- ・ 学生とコーディネーター、大学と地域団体のそれぞれの立場の方からお話が聞けたのが良かったです。
- ・ 「先輩への憧れ」というキーワードが心に残りました。

### 分科会担当者のコメント

- ・ 主体性を育むには、意図的な働きかけと、偶発的な出会いなど、両方が必要なのだとあらためて感じました。偶発的な出来事さえも事前の種まきなどがつながっているのかも。そこをいかにコーディネートするのが重要で、面白いところですね。頑張りたいと思います！（足立）
- ・ 学生を「学生」ではなく「住民」として捉えることが大切という話に、とてもハッとさせられました。自分自身、「学生との協働は大学（ボラセン含む）を通じてやるもの」という先入観があったように思います。地域福祉の視点に立ったとき、学生を「住民」としてその主体的な活動をコーディネートしていくためには、具体的にどのようなことが必要になるか、考えていきたいと思っています。（菅野）

### 分科会担当者

足立陽子（淑徳大学地域共生センター） / 粟澤稚富美（社会教育協会ひの社会教育センター）  
菅野道生（淑徳大学）



## 改めて「コーディネーター」に向き合う哲学対話

もし「コーディネーター」という言葉が通じない人に、自分たちの仕事を伝えなければならないなら、私たちはどのような説明をすべきでしょうか。そもそも「ボランティアな活動をコーディネートする必要性」は何でしょうか。ボランティアな活動が社会の役に立つ行為であるとするなら、それらをコーディネートする私たちはどのような役に立てているのでしょうか？

こうした「問い」に向き合い、共同で対話を深める方法の一つに哲学対話があります。このセッションではコーディネーターとして日々活動する中で抱きながらも、見落とされがちな問いについて、哲学対話の手法を用いて改めて考えました。

### 登壇者

ファシリテーター・プロデューサー 西村 歩さん (MIMIGURI リサーチャー)

### タイムスケジュール

- 9:30 開会、イントロダクション
- 10:20 問いの森
- 10:55 哲学対話
- 11:45 体験作文
- 12:05 共有
- 12:30 閉会

### 参加者数

13名

### 分科会の内容

哲学対話とは「輪になって、互いに問いを出し合いながら、じっくり、ゆっくり、考えを深めていく対話のあり方」のことをさします。西村さんプロデュースのもと、このセッションでは哲学対話を軸にほかの要素も加えて〈問いの森〉→〈哲学対話〉→〈体験作文〉の3つのコンテンツで構成しました。

#### ● イントロダクション

全員が円座になり、西村さんの自己紹介、つづけて、なぜこのセッションを企画したか、なぜこのセッションを選んだかを、互いに紹介し合いました。場が温まったところで、哲学とは何かの紹介、哲学対話とは何かの紹介がありました。また、この対話空間を知的安全感にみちた場とするための「対話のルール」について説明があり、このセッションでは終始このルールが貫かれることが示されました。

1. 何を言ってもいい。
2. 人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
3. お互いに問いかけようとする。
4. 発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
5. 知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
6. 話がまとまらなくてもいい。
7. 意見が変わってもいい。
8. 分からなくなってもいい。

#### ● 問いの森

通常の哲学対話とは少し異なる「問いの森」という方法で問いを出し合いました。会場端のテーブルに下のような15種類の問いが、裏返しに大量に置いてあります。各自が4枚をランダムにとり、その問いにこたえます。空欄を埋めると問いが出来上がるようになっています。

コーディネーターとして最も判断に悩んだ瞬間は

というときだった。

どうしてコーディネーターは

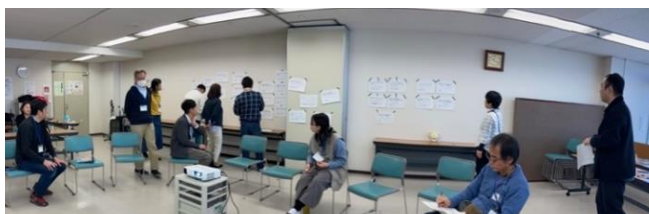
なのだろうか。

コーディネーターとしての喜びとは

ではないだろうか。

コーディネーターとして守らないといけない鉄の掟は

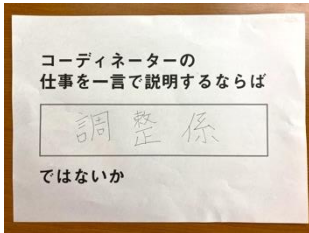
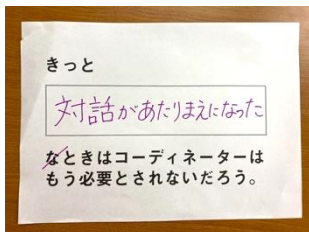
だと思う。



しばらく沈黙の時流れ、ようやく書き込んだ問いを、思い思いに壁の好きな箇所に貼っていきます。そうして出来た”問いの森”をながめ、しばらく鑑賞しました。全部で52種類の問いが場にあらわれました。あえて思い思いに貼るのは、思わぬ組合せの問いが同時に視界に入る等、セレンディピティを期待するためでもあります。

#### ● 哲学対話

一人の代表者が問いの森から問いを1つ選び（収穫）、この問いを起点に、哲学対話が始まりました。



今回起点に選ばれた問いは「きっと『対話があたりまえになった』ときはコーディネーターはもう必要とされないうらう。」円座にもどり、コミュニティボール（ぬいぐるみ）を持っている人だけが話せ、ボールが人の手を渡っていきながら対話がすすみます。対話の最中に気になる別の問いがあれば、森から新たに収穫してきてよく、途中「コーディネーターの仕事を一語で説明するならば『調整係』ではないか」という問いが追加されました。



## ● 体験作文

哲学対話が2ラウンド行われる計画でしたが、急きょ変更、最後のコンテンツに体験作文が加えられました。体験作文では、一人ひとりが考えたくまっていることを作文に閉じ込めます。頭の中に思い浮かんだことがあったら書いてみます。出来や作文としての質などはひとまず考えずに書きます。再度沈黙の時間が訪れました。



## ● 共有

3~4人のグループに分かれて体験作文を音読しあい、互いの作文を聴いて、感じたこと、考えたことの対話のキャッチボールを行いました。続いて、全体円座にもどり、グループ対話で感じたこと、心に残ったことを全体でシェアしました。最後まで集約はせず、じっくり、ゆっくり、一人ひとりの話に耳を傾け、この時間を通して考えたことを、一人ひとりが大切に持ち帰りました。

## 参加者の声

- ・対話を巡る対話はとても刺激的でした。業務から一旦「降りて」考える時間が必要だと感じました。
- ・新たな学びになりました🌟
- ・(哲学対話経験者です)哲学対話は理解されるか心配しましたが、案外というか、やはりというか、考えたい、話し合いたい、という声が聞けて良かったです。



## 分科会担当者のコメント

- ・コーディネーターとは何なのか？という、原点に戻ったテーマについて、興味はあるもののまだ未経験の哲学対話を用いて考え、話し、聞いて、また考えていくという内容となり、とても楽しく取り組むことができました。時間があつという間でもっと話すことができれば、と感じた分科会でした。このように、参加者みんなが主役でみんなで創っていく分科会も、ぜひこれからも取り組んでいければいいなと思いました。
- ・「聴くとは受け止めること」「たとえ同意や納得ができなくても、ただ受け止めることができれば、結果、自分と異なる考えに出会い、暗黙のうちに持っていた前提に気づける」という対話の意義が強くなり心に残りました。意思決定のための議論がいわば外へのバクトルだとすれば、自らの中にある暗黙の前提に気づく対話の行為は、内へのバクトルだといえるでしょう。コーディネーターは外へ作用することに意識が向きがちですが、はたしてそれはどういうことなのか。対極のあり方がここには在るかもしれないと感じました。
- ・哲学対話に問いの森と体験作文を組み合わせた本セッションは、聴くこと、話すこと、書くことがバランスよく含まれる意欲的な試みだと感じました。また、共有中に「まとまらない考えや変わりつつある考えを途中で話すのはとても難しい」という意見が出て、ほんとうにそうだなと、表に出てきた考えや感じ方を集約することの意味について考えました。

## 分科会担当者

開澤裕美（中央大学ボランティアセンター） / 藤掛素子（中央大学ボランティアセンター）



## どうするボラセン！

ボラセンの役割と機能を問い直して、モヤモヤ解消、明日からの実践に

新型コロナウイルスの影響で多くの人々が困窮状態に陥り、全国の社協で生活福祉資金特例貸付にかかわる相談・支援に対応してきました。その中で、貸付だけでは解決困難なケースがあったものの、手続きに追われ、地域の資源を活かした支援につなげることができなかったことが報告されています。

ボランティア・市民活動センター（略称：ボラセン）は、コロナ禍の予期せぬ甚大なニーズが発生している中で、どのように取り組んできたのでしょうか。どんな取り組みができたのか、どうしてその取り組みができたのか、事例の背景、要因を聞き、参加者の皆さんとボラセンやボランティアコーディネーターの役割、機能を確認する分科会です。

### 登壇者

- 講師 諏訪 徹さん（日本大学文理学部社会福祉学科 教授）  
事例発表者 田中 亮彦さん（立川市社会福祉協議会立川市くらし・しごとサポートセンター 係長）  
宮崎 雅也さん（日野市社会福祉協議会日野市ボランティア・センター 課長補佐）  
市川 斉さん（シャンティ国際ボランティア会 地球市民事業課シニアスタッフ）

### タイムスケジュール

### 参加者数

- 9:30 趣旨説明、講師・発表者紹介  
9:40 参加者自己紹介  
9:50 基調講義 「どうしたボラセン  
社協 VC の今日的役割を問い直す」  
10:10 事例発表1 「立川市くらし・しごとサポートセンターの  
事例紹介」  
10:30 事例発表2 「日野市ボランティア・センターの取り組み」  
10:50 事例発表3 「国際協力 NGO が関わる在住外国人支援」  
11:15 課題提起・グループワーク  
12:20 コメント

16名

### 分科会の内容

#### 1. 趣旨説明・自己紹介

「ボランティアセンターやボランティアコーディネーターは期待されていないのか」という現場で感じていることと、「コロナ禍にボラセンは何をしてきたのか」という問いに対して、具体的な事例をもとに役割や機能をあらためて問い直していくことを目的とした分科会であることを説明した。その後、講師や参加者の自己紹介を行い、この分科会に参加した動機を共有した。

#### 2. 基調講義「どうしたボラセン 社協 VC の今日的役割を問い直す」

社協ボランティアセンターの歴史的展開経過と社会情勢をお話いただき、ボラセンをめぐる環境の変化がこれまでどのようにあったのかを確認した。現代の生活課題の背景、福祉政策の動き等を踏まえて、複合的な社会課題を前にしてボラセンが元気をなくしている場合ではないとのメッセージがあった。

あらためてボラセンはどうしたいのか、「ボラセンらしさ」「ボラセンの事業展開のあり方」への提起がなされた。新規資源の開発、事業から面白い人、団体とのつながりを創り、巻き込む展開をしていく、広域のプラットフォームをつくるなどの話があった。

#### 3. 事例発表1 「立川市くらし・しごとサポートセンターの事例紹介」

生活福祉資金特例貸付事業における相談支援の状況とボランティアセンターや関係機関と連携した事例について紹介があった。

立川市では、約7300件、約27億円の貸付が行われ、飲食業や観光業等の様々な人から相談を受け、その相談を個別相談から地域支援につなぐ社協としての基本的な方針を意識しながら対応してきた。ボラセンには、

「何かしたい」という市民、団体からの相談が寄せられ、貸付相談窓口には「困っている」という相談が届いていた。立川市社協では、定期的に連携会議を開き、「何かしたい」と「困っている」を合わせる事業を検討して実施をしてきた。具体的には、ネットワークを活かしたフードバンク活動を通じて、食料品を子ども食堂や貸付相談者に提供し、合わせて生活相談を展開したこと、貸付相談のニーズを地域へ発信し、寄付金を募って市民活動へ助成事業を創設したなどの報告があった。

#### 事例発表2「日野市ボランティア・センターの取り組み」

事例発表のキーワードは、「これって、まずい…」。生活に困っている人を支えないと、というコーディネーターの問題意識が根底にあることだった。フードバンク団体と日野市内社会福祉法人ネットワークと連携して、食料品をいつでも取りに行ける仕組みを作った事例やスマートフォンをツールにコミュニティの再構築を図り、合わせて潜在的なボランティアへのアプローチを図ったことなどの事例が報告された。また、以前からひきこもり状態や生きづらさを感じている人の居場所が必要であることを意識していたが始める糸口がなかったが、コロナ禍をきっかけに傾聴ボランティアと一緒にあらたな活動を立ち上げた事例もあり、すぐできないことでも、いつかやりたいことをリスト化していたとの話があった。

#### 事例発表3「国際協力 NGO が関わる在住外国人支援」

シャンティ国際ボランティア会の市川さんからは、NGO 団体が国内支援活動において社会福祉協議会や NPO 等と連携して取り組んだコロナ禍における事例について報告がされた。

日本で暮らす外国人の相談窓口がないこと、コロナ禍による収入減による経済問題と在留資格の問題、孤立化等の課題がある。そこで特例貸付で外国人からの相談を多く受けていた豊島区民社会福祉協議会に打診をして相談、生活支援、法的支援を行ってきた。この取り組みには法律事務所も参画し、それぞれがもっている互いの特色を活かした連携事業であるとのことであった。そして、多様な相談を受けた中で、関係者とケース会議を開き、ニーズに合わせた支援プログラムがつけられていった。点と点の関係を線としてつなぎ、支援のネットワークを広げていったことが特徴としてあげられた。

## 4. グループワーク

基調講義、事例発表を聞き、大事な視点、課題に感じたことをグループで話し合い、それぞれが明日から取り組む実行宣言を行った。



### 参加者の声

- ・できない理由を考える前に実行することが大事。やりたければやるを実践したい。
- ・忙しい人と知り合い、つながりをつくりたい。
- ・社協、大学ボランティアセンター、地域団体が一同に集まる会を開催したい。

### 分科会担当者のコメント

「困っている人」「困っていること」をどうするか。コーディネーターのアクションが大事であることを認識した。しかし、コーディネーターだけではできないこともたくさんある。だからこそ、ボラセンの強みである「何かしたい！」という思いのある人や組織とつながっていることが大事だとこの分科会に参加したみなさんが感じたのではないかと。「困っている」をキャッチし、「何かしたい」をつなげて、「まずい」を解消していく実践をしていきたい。

### 分科会担当者

池畑雄太（渋谷区社会福祉協議会） / 梅澤稔（いたばし総合ボランティアセンター）



## 地域の多文化共生をのぞいてみよう

外国人住民と共に考え・共に創る地域社会

地域社会では外国人住民が身近な存在となり、「多文化共生」という言葉をよく耳にするようになりました。一方、多文化共生社会とは、人によってさまざまなイメージを持つものでもあります。この分科会は、地域の多文化共生の事例として、さまざまな分野で活躍する外国人やその関係者から話を聴き、外国人と共に創る地域社会のこれからを一緒に考えることをテーマに開催しました。違いをチカラに、日本人と外国人が共に暮らす地域社会について、コーディネーションのヒントを探りました。

### 登壇者

事例発表者 エムディ エス イスラムさん (NPO 法人日本ムスリム商工振興会 理事)  
カンチャ ラマさん (株式会社いちご一会)  
メハタ カル シンさん (豊島区在留外国人支援事業「としまる」 コーディネーター)  
吉成 勝男さん (NPO 法人 ASIAN COMMUNITY TAKASHIMADAIRA (高島平 ACT) 理事)  
コーディネーター 早瀬 昇さん (大阪ボランティア協会 理事長)

### タイムスケジュール

### 参加者数

24名

- 9:30 趣旨説明、オリエンテーション、自己紹介
- 9:45 事例報告①「外国籍住民と共につくる地域コミュニティ」  
(吉成さん)
- 事例報告②「LET ME SHARE A LITTLE ABOUT ME」(イスラムさん)
- 事例報告③「夢を力に ネパールから日本に来て学んだこと～  
日本の農業に携わって」(ラマさん)
- 事例報告④「教師がつなげる地域支援と多文化共生」  
(カルさん)
- 10:50 休憩
- 11:00 コメンテーターから事例へのコメント
- 11:20 参加者によるグループディスカッション  
「多文化共生を進めるためのコーディネーションでは、何を大切に  
しなければならないのか? どう進めればよいのか?」
- 11:45 全体共有・今後につながるまとめ
- 12:30 終了

### 分科会の内容

多文化共生をテーマとする本分科会では、日本を拠点に活躍する外国人のフロントランナーである3名の方、そして外国人支援に長年携わってきた方の事例を聞いた上で、コーディネーションについて、参加者が話し合う形を取った。

### 事例報告

#### ①「外国籍住民と共につくる地域コミュニティ」吉成 勝男さん

高島平 ACT は、2011年12月、高島平三丁目団地を中心に設立した団体。当初、外国籍住民の居場所を想定していたが、地域の高齢者が多く集まるようになった。2014年には団地商店街の中にコミュニティスペース「ハロハロ」を設立した。団地の集会所を拠点として相談事業、日本語教室、多文化支援員育成講座などを実施している。テーマによって自治会とも協力している。高齢化が進む高島平において、高齢化と多文化化(外国籍住民の増加)を解決するには高齢者の知識・経験と外国籍住民の爆発的パワーが必要である。



#### ②「LET ME SHARE A LITTLE ABOUT ME」エムディ エス イスラムさん

バングラデシュで生まれ、日本で居を構えるまでのイスラムさんの半生を紹介。来日後は、2010年に大田区



の蒲田駅の近くにイスラム教徒の祈りの場であるモスジド（カマタ・モスジド）を設立。日本人と在日イスラム教徒の交流と文化を理解することを目的とした。1986年ごろは日本に1か所しかなかったモスジドが今現在は50か所以上ある。世界のムスリム国と日本が、ビジネスで将来的に更なる協力していくため、2022年にはNPO法人日本ムスリム商工会議所を設立した。また、現在日本にはイスラム教徒は約20万人いるが、土葬対応が問題になっている。寺院の協力を取り付け、埼玉県本庄市で土葬墓地の設営を実現した。



### ③「夢を力に ネパールから日本に来て学んだこと～日本の農業に携わって」カンチャ ラマさん

2006年に留学生として来日し、2013年に佐賀県唐津市に移住した。農業国であるネパールで日本の技術をすぐに生かせると考え、農業を始めた。農業は地域との関わりも多く、当初は地域住民との軋轢もあったが、コミュニケーションを大切にして地域との関係性を築いてきた。無借金での経営を続けてきて、観光農園も軌道に乗ってきている。今後は新たな農業経営のあり方を考えていく。「辛いけど続けてきて良かった」「皆さんも夢を力に変えて幸せになりましょう」とのメッセージを残した。



### ④「教師がつなげる地域支援と多文化共生」メハタ カル シンさん

豊島区において、フードパントリー・相談会、個別支援を行う外国人支援事業「としまる」の支援コーディネーターを務めている。弁護士や社会福祉協議会とともに相談対応にあたり、ネパール語通訳やその後の同行支援なども担当している。現在は都内のネパール人学校の校長を務めており、教育分野には非常に興味がある。また支援に関わることで、様々な問題を抱え困っているネパール人の存在を知り、ネパール人コミュニティの中で役に立ちたいという気持ちが生まれてきた。これからも、自分の経験を周りに伝えていきたい。

#### コメンテーターから 「コーディネーションの意味」についての解説

- ・ボランティアは「仕方なく依頼」されることが多く、依頼者の立場が弱くなりやすい。その関係を対等にしていくのが、コーディネーションである。
- ・依頼者の夢や希望に共感し、応援していくのがボランティア。それを多文化共生の世界でどう生かしていくか、考えていきたい。

#### グループディスカッションの報告

##### 多文化共生を進めるためのコーディネーションに大切なこと 必要なこと

- ・外国人住民をめぐり軋轢が生まれている地域もあるが、当事者の声を聞き、地域に巻き込んでいきたい。
- ・まずは交流が大切。しっかりとコミュニケーションを取り、お互いを尊重して歩み寄ることを考えていきたい。
- ・支援する側、される側の関係性で固定されるのではなく、対等な関係性を築くことが大切だと思う。
- ・外国人コミュニティに日本人が飛び込むことも考えたい。
- ・多文化共生は地域性が強く、その地域に合ったアプローチの仕方を考えていくことが大切だと思う。
- ・「多文化共生」には様々なイメージを持つ方がいるが、お互いを知るきっかけがあると良い。



#### 参加者の声

- ・聞けば聞くほど、仲間がたくさんいることに感動しました。対等、対話、人を信じる。取り組みたいです
- ・どんな支援が必要か、支援する側とされる側に分けて考えることが多くなっていくことに気付かされました。
- ・外国の方が自分のことを表現したり、スキルを発揮できてこそ、共生へ近づけると思いました

#### 分科会担当者のコメント

4名の方のお話を伺い、盛りだくさんの分科会でしたが、決まった正解を見つけるのではなく、たくさんの違いを持った多様な共生のかたちを、皆さんの話から探ることができたと思います。

#### 分科会担当者

江坂静子（東京都つながり創生財団） / 菊池哲佳（多文化社会専門職機構）

藤井美香（横浜市国際交流協会） / 村松清玄（シャンティ国際ボランティア会） / 矢富明德（佐賀県国際交流協会）



## 子どもの事例からセーフゲーディングについて学ぶ

利用者とボランティアを、組織として守る

セーフゲーディングとは、子どもにいかなる危害もおよぼさないよう務めることであり、万一、活動を通じて子どもの安全にかかわる懸念が生じたときには、しかるべき責任機関に報告を行い、それを組織の責任として取り組むこと。

多様なボランティアとともに、特に子どもを対象とした活動をする団体にとって避けて通れないテーマになっている。ただ、日本での実践例は未だ少なく、実際にどこから手をつけたらよいか分からないという悩みを持つ団体も少なくない。セーフゲーディングの考え方や事例を聞き、自団体への導入方法について学んだ。

### 登壇者

講師 森 郁子さん (NPO 法人きづく 代表理事)  
白井 唯さん (NPO 法人モンキーマジック / 助成金事業プロジェクトマネージャー)

### タイムスケジュール

9:30 オープニング  
9:40 参加者自己紹介 (問題意識の共有)  
10:00 セーフゲーディングの基礎理解  
森 郁子さん (NPO 法人きづく)  
10:45 質疑  
11:10 団体の事例発表  
白井 唯さん (NPO 法人モンキーマジック)  
11:40 意見交換  
12:15 まとめ  
12:30 クロージング

### 参加者数

12名

### 分科会の内容

#### ● 「セーフゲーディング」の基礎理解

セーフゲーディングに関する基礎的なことを理解するために、最初に森さんから講義があった。

「セーフゲーディングとは、組織の役職員・関係者によって、また事業活動において、子どもにいかなる危害もおよぼさないよう、つまり虐待・搾取や危険のリスクにさらすことのないよう務めることであり、万一、活動を通じて子どもの安全にかかわる懸念が生じたときには、しかるべき責任機関に報告を行い、それを組織の責任として取り組むこと」(引用：子どもと若者のセーフゲーディング最低基準のためのガイドライン)と、解説があった。

もともとの始まりは、2000年代はじめ西アフリカ地域の難民キャンプで、人道支援活動に関わっている職員からの子どもに対する性的搾取・虐待を発端に、国際社会が予防的措置を正式に講じる必要性を訴えたことだった。支援活動内で起きる人権侵害である性的搾取・虐待をはじめ、子どもへの加害の予防のための具体的な対策として、セーフゲーディングの導入が推進され、発展してきたという。

#### ● 組織の責任として取り組むこと

セーフゲーディングの特徴としては、組織的な予防策を講じる活動であることが挙げられる。現場の担当者が子どものリスク対策を講じて対応するのではなく、組織が責任を持ち、制度として確実に取り組むことが重要とされる。

では、具体的ななどのような取り組みを行うのか。子どもの虐待や子どもを巻き込んだ危険や被害についての意識を高めるような周知、危険や被害を事前に防ぐための予防、報告、対応について、すべての関係者と一緒に行っていくことが説明された。

## ● セーフゲーディングの導入事例

NPO 法人モンキーマジックは、「見えない壁だって、越えられる。」をコンセプトに障害者クライミングの普及活動を通じて、多様性を認め合えるユニバーサルな社会の実現を目標に活動する。2021 年に、イギリスの財団から助成金を受けることがきっかけとなって、セーフゲーディングを導入することとなった。イギリスの財団による研修や伴走支援を受け、基本となるポリシーを作成し、行動規範、報告方法を明文化した。

セーフゲーディングの導入にあたって、白井さんから苦労した点について伺った。ひとつは、クライミングでは、障害のある人たちへのサポートとして、身体接触があるが、一般的なセーフゲーディングでは、身体接触は避けるものとなっていた。活動のなかで制限しきれないものになっていた。また、二人っきりになる場面を避けるということも一般的ではあるが、すべての場面で二人っきりになることを回避することは不可能であった。最終的には、「できるだけ」というような表現を使うことにして、自分たちの取り組みにあわせて、自分たちのあう「色」にすることを意識したと、白井さんは解説した。作成してよかったこととしては、例えば、身体接触というのは、親切心でやってしまうこともあるが、第三者からみたら不快感になるものでもあった。自分たちの団体がどういったことに配慮したいかということが、ポリシーとして、共通認識することができ、便利になったと振り返った。

## ● セーフゲーディングは、石垣をつくりあげるようなもの

方針づくり、行動規範、活動運営ガイドライン、窓口の配置など、取り組めることは沢山ある。講師の森さんから、「まずは今日できることから始めよう」と呼びかけがあった。「セーフゲーディングはまるで石垣をつくっていくようなもの。隙間を埋めたり、定期的に補強したり。」という表現を森さんはしているが、ひとつひとつできることを積み上げて、子どもたちを守る環境をつくっていくことの重要性について話された。

## 「セーフゲーディング」とは

kidzuku

組織の役職員・関係者によって、また事業活動において、子どもに  
いかなる危害もおよぼさないよう、つまり虐待・搾取や危険の  
リスクにさらすことのないよう務めることであり、万一、活動を通  
じて子どもの安全にかかわる懸念が生じたときには、しかるべき  
責任機関に報告を行い、それを組織の責任として取り組むこと



引用：子どもと若者のセーフゲーディング最低基準のためのガイド p6  
—Keeping Children Safe, 2014



## 参加者の声

- ・セーフゲーディングについて初めてお聞きしましたが、とても大切なことだと思います。改めて自分たちの活動を振り返るきっかけともなりました。ありがとうございました。
- ・決まり事を作るのは難しいが、子どもの活動をするたびにヒヤリ、ドキドキしているのならば、取り組みたいと思った。組織としてやるべきことだと思った。ただし役員会で話し合って作れるかは不安。でも作成している団体が増えれば、常識になっていくと思った。
- ・児童養護施設は日頃から子どもの権利擁護について職員間で意識していることではありますが、ボランティアを含めた外部の方にもどう共有していくかについてはあらためて見直していくきっかけになりました。

## 分科会担当者のコメント

日本での導入はまだまだ進んでいないが、今後、子どもたちの活動を行う団体にとって、「セーフゲーディング」は、必須のものになっていくと予想される。担当者レベルの工夫ではなく、組織が責任をもって取り組むことの重要性を再認識した。

議論のなかで、「心理的な安心」と「身体的な安心」は、どちらを優先すべきかという話があったときに、「どちらも不可侵である」と明確に話をされていたことが印象的だった。

## 分科会担当者

栗澤稚富美（社会教育協会ひの社会教育センター） / 上田英司（日本 NPO センター）



## ボランティアな取り組みを誘発する 「学び合いの場」のプロデュース

「学ぶ」と「動く」の好循環をつくるために

さまざまな「学び合いの場」が多様な主体によって提供されている時代。いま地域で何が起きているのか、何が求められているのか。その解決に取り組む市民活動・ボランティア活動の状況は？等々、学びを通して社会や地域づくりへの参加を意図したプログラムを企画する担当になると、「どうしたらもっと魅力的な講座になるのか」「活動に発展させるためにはどんな工夫をしたらいいのか」と、知りたいことがいっぱいあるはず。興味深い3つの取り組みを素材にしながら、学びだけで終わらない秘訣はどこにあるのかを一緒に見つけていきましょう。

### 登壇者

事例発表者 新中 隆明さん（佐賀災害支援プラットフォーム 事務局）  
宮城 潤さん（那覇市若狭公民館 館長 / NPO 法人地域サポートわかさ 事務局長）  
戸田 千登美さん（長野県長寿社会開発センター 主任シニア活動推進コーディネーター）  
進行 後藤 麻理子さん（NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会 理事・事務局長）

### タイムスケジュール

### 参加者数

9:30 開会（オリエンテーション、趣旨説明、登壇者紹介）  
9:40 事例発表1「佐賀県の研修事例の紹介」（新中 隆明さん）  
10:05 事例発表2「那覇市若狭公民館の取り組み」（宮城 潤さん）  
10:30 事例発表3「学びの循環 長野県シニア大学専門コース」  
（戸田 千登美さん、斉藤むつみさん）  
10:55 質疑応答  
-休憩-  
11:20 グループワーク（ブレイクアウトルーム）  
11:50 全体共有・登壇者からのコメント  
12:30 閉会

36名

### 分科会の内容

B-8 分科会は、「学び」と「動く」の好循環を意図的（操作するという意味ではなく）に作り出している事例として3つの報告をもとに、その後のグループワークを交えて、学びだけで終わらないコーディネーションの秘訣がどこにあるのか、一緒に見つけていくことにした。

- 事例発表1「佐賀県の研修事例の紹介」（新中 隆明さん）  
能登半島地震の復興にあたるため石川県に派遣され、現地からの参加となった新中さんからの発表であった。災害ボランティアセンターの運営では、社協で対応できない技術案件や生業案件等を専門団体と調整し支援活動を行う。かつて災害に見舞われた経験のある佐賀県下において、災害時の対応に必要な事業を実施している。このうち特徴的な取り組みの事例として研修の紹介があった。  
全国的にも大規模災害が多発し、県外の専門団体の支援が得られなくなるとすれば、佐賀のことは地元で対応するしかない。そこで必要となるのが地域の力である。このための研修は、分かりやすい連携方法の一つであり、「どういう研修が必要か？」を地域の人々と話し合い、出できた課題を専門機関の方と一緒に内容を考え、実行する。こうしたプロセスができることによって、研修を単なる学習に留めてしまうことなく、分かりやすい仲間づくりの方法として捉えることによって、できることが見えてくると話された。
- 事例発表2「那覇市若狭公民館の取り組み」（宮城 潤さん）  
若狭公民館の指定管理者となって、地域住民が自治的（主体的・継続的）に取り組む様々なことにつなげている事例の紹介があった。  
公民館の理念に「つどう まなぶ むすぶ」という役割があり、課題が複雑化・多様化する地域社会にあって、地域住民が自治的（主体的・継続的）に取り組むには、地域課題解決を価値創造や学びを通して新たな自分に出会うことになるという側面から捉える必要がある。若狭公民館では、「広報」（情報発信）と「広聴」（情報収集）を重視することで活動内容が周知され、様々な意見や「やりたい！」の相談がくる循環が生れて

くるようにしている。

多様な主体との協働によるこうした取り組みに必要なのは、単なる成果を出すのではなく、どこに向かってやっているのか、展開の兆しが見えたかを観ることではないか。時には、担当者に何も働きかけずに見守ることにあえて専念してもらうなど、「意図する学び」だけでなく、「意図しない学び」に対しても意識的に取り組んでいくことを大切にしている。

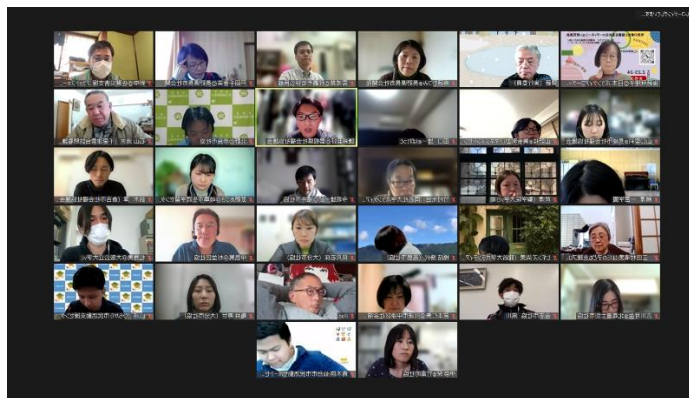
### ● 事例発表3「学びの循環 長野県シニア大学専門コース」（戸田 千登美さん、斉藤むつみさん）

長野県長寿社会開発センターで行っている「長野県シニア大学専門コース」で取り組む「学びの循環」の事例として戸田さんからの報告があり、後半の具体例の紹介が斉藤さんからあった。

学びとコーディネートを両輪として「シニア大学 専門コース」では、「人づくり」として取り組む学びのサイクルを立てている。対話、問いかけあう対話、深まる学びなどを経てその成果の中間報告をし合ったり、ゼミ形式によりまとめた発表を行ったりしている。

また、コーディネートの仕組みづくりとしては、気づきを喚起するコーディネーターが、シニアの活躍を推進するための連携を進めるプラットフォーム・場づくりをして、「学びあう」と「動き出す」との間に必要な「対話(等話)」を進めている。

「シニア大学専門コース」で「定年後のシニア男性の居場所づくり」をテーマとしたところから、定年後に男性が家にこもりがちになるのは社会損失につながるとして、「ゆる～いおっさんの会」や「レコード喫茶」が立ち上げられたことなどの具体例が紹介された。



## 参加者の声

- ・日頃の活動で行き詰っていたところや、自分で仮説していることが登壇者やグループワークでの話の中で整理ができました。
- ・講師の方々が分かりやすく事例とご自身が大事にしていることをお話して下さったので、とても参考になりました。参加する方達の意見を取り入れて、より参加者の学びにつながるような取り組みを企画・応援したいです。
- ・グループセッションでは、普段自分が関わらない分野の方達と話が出来ました。自分（社協・高齢者）、社協（全般 VC）、あとは大学VCの方3名で、学生たちに対するコーディネーションの悩みなど、分野が違っているとこんなところが悩みになるんだと目からウロコでした。
- ・学ぶだけでなく、まず目的、そしてそれを活かす場を作ることが大切ということがわかった。
- ・講座や研修で学んだ後にどう次につなげるかが課題でしたが、今回登壇者の皆さまの事例から開催するまでの対話や、結果だけでなくその過程も大事だと感じました。また、自分自身の足りなかったことに気づき、今後に活かしていきたいと思いました。
- ・学び合いの場をつくる際に、学びの先を見据えながら、組み立てることの重要性や、学んだことを実践する場が重要であることが分かりました。

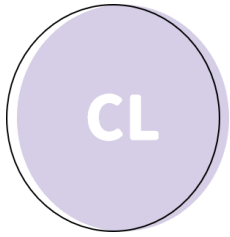
## 分科会担当者のコメント

- ・研修がそこに至るまでのプロセスも含めて「仲間づくり」であることを気づかされました。
- ・「課題解決⇄新たな価値の創造」＝「住民自治力の向上」ということに気づきがありました。
- ・「学びあう」と「動き出す」との間には、「対話(等話)」が大切であり、主体性を引き出すことが「自分ごと」化につながることを理解しました。
- ・点を線に、線を面に展開している実践を紹介できた。実は学びの場の前後のプロセスが大切と実感。

## 分科会担当者

後藤麻理子(日本ボランティアコーディネーター協会) / 齋藤尚久(日本社会教育士会)

前田昌宏(日本生活協同組合連合会) / 明城徹也(全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD))



## クロージングセッション

### 明日からのコーディネーションのための振り返りと分かち合い

「違いをチカラに、多様性を地域の当たり前」を全体テーマとして掲げた JVCC2024 最後のプログラム。全国各地からあつまった仲間と新たな学びや気づき、感じたことを話し、分かち合いました。また、今後のコーディネーションにつなげていくためにお互いの成果を確認し合いました。なお、緊急プログラムとして冒頭、「能登半島地震支援報告」を3名の方からいただきました。

#### 登壇者

能登半島地震支援報告 頼政 良太さん（被災地 NGO 協働センター）  
関根 正孝さん（ピースポート災害支援センター）  
長谷部 治さん（神戸市社会福祉協議会）  
ファシリテーター 鹿住 貴之さん（JUON(樹恩)NETWORK） / 疋田 恵子さん（杉並区社会福祉協議会）  
Zoom テクニカルサポート 熊谷 紀良さん（東京ボランティア・市民活動センター） / 神保 彩乃さん

#### タイムスケジュール

13:30 あいさつとクロージングの進め方説明  
13:35 能登半島地震支援報告  
14:05 分科会報告（90秒×16分科会）  
14:35 グループディスカッション、ブレイクアウトルームの説明  
14:40 グループディスカッションⅠ（振り返り）  
15:00 全体共有  
15:05 グループディスカッションⅡ（明日からの行動宣言）  
15:20 全体共有（slido）、ファシリテーターからのまとめ

#### 能登半島地震支援活動報告

・頼政さんの話（七尾市他）：避難所の統合で自宅に戻った人向けの物資配布が今最も多くなっています。行政の支援から漏れている在宅の方に、企業から支援物資を集めていますが、的確なマッチングが必要です。

ボランティアは迷惑だから行くな、いや、必要だから行け、という0か100かの議論になっていますが、入れるところも多く、被災者の命を支えているのは、ボランティアです。なぜ行けないかと言えば、コーディネーションが足りていないから。社協ボラセンでできること、できないことがあり、様々なコーディネーションがたかさんないといけません。待つよりは、知恵とアイデアを出し合って、できることから、ボランティアを地域につなぐことが必要です。道路もよくなりつつありますが、まだ制限もあります。どのようにボランティア活動を活性化するか、コーディネーションにかかっています。現地では人が求められ、ボランティアが命を支えています。それを支えるコーディネーションが、これからますます必要となるでしょう。

・関根さんの話（輪島市、珠洲市）：主に、支援の申し出を聞き、被災者や避難所につないでいます。避難所が直接やり取りをすると負担も大きく、環境改善などに手が回らなくなります。輪島市では今も自主避難を含め70以上の避難所に2,000名以上の方がいますが、報道される場所に支援が集中している状況です。食事の支援が主ですが、大きな避難所は自衛隊の支援が絶えず入り、小さな避難所では民間の炊き出しが入ります。地元シェフなど様々な支援者と協力していますが、コンビニからお弁当を配送してもらうこともあります。民間の炊き出しも活用し、バランスのとれた食事の提供を行っています。また、自衛隊が作る食事メニューを、市の栄養士が考えて提供することも行われるようになりました。大きな企業のキッチンカーも来ています。

支援者とのコミュニケーションを丁寧にする必要性を実感しています。被災地の状況を丁寧に伝えながら、せっかくの申し出を、必要な方につないでいきたいと考えています。

・長谷部さんの話（七尾市）：社協の災害ボラセン運営は、どこにも規定されていませんが、目の前の困りごとに対応する社協の仕事を見ると、一定の合理性はあります。JVCAでは、社協の災害ボラセンは協働型であるべき、と整理してきました。行政は基本的に災害救助法に則って様々な支援を行わなくてはなりません。

昨年、中央防災会議で「防災基本計画」が修正されましたが、一つは、「災害ボランティアセンター設置予定場所の明確化」。「都道府県、市町村それぞれにおいて、地域防災計画等に災害中間支援組織や社協等との

役割分担等をあらかじめ定めること」とされました。近年、災害ボラセン運営に税金が当てられるようになり、行政が社協に委託する流れができました。委託は役所の肩代わりで、それもするが、制度外の要支援者も助けるという協定を神戸市社協では結ぼうとしています。しかし、多くの社協はできていません。

石川県庁は自ら災害ボラセンを運営していますが、手が足らず、社協が手伝っています。新制度に追いついていないから、旧来のやり方も活かすというのでは、うまくいくはずがありません。

1974年の第1回日本人口会議で「子どもは二人まで」と言われ、少子高齢化になりましたが、結果として生まれた課題は世帯の単身化。人口は減りましたが、世帯数は激増し、20年後、全世帯の半数以上が単身になります。その先行地が能登。単身被災者が今後も増えますが、対応するコーディネーションはできていません。

IT化による事前登録制度は、1000人のボランティアが来たのに、500人しか活動を紹介できなかったコーディネーターの悔しい体験を解消しましたが、実情は登録の段階で人数を制限してしまっています。本来目指したいのは、活動できなかった500人がどうすれば活動できるのかですが、結果、25,000人を待機させています。

阪神淡路と比べ、様々なことが進化しましたが、コーディネーションが変わりきれてないことが課題です。

## 分科会の報告から（3つのポイント）

<p><b>A1</b> 会場&amp;オンライン いま、福祉施設・病院でどんなコーディネーションをめざす？ 語ろう、元気なコーディネーターになるコツ</p> <p>3つのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●「逆風」ってなんだろう 責任問題、空白期間問題、人材の流動、モチベーション問題、コーディネーターの存在、組織体制...</li> <li>●逆風に立ち向かうには その先に「楽しむ」「笑顔」があることを信じきる あきらめない</li> <li>●だれのためのコーディネーション？ 統一できない。一人一人違うけど、考え続けて質を高めていくもの。</li> </ul>	<p><b>A2</b> 会場&amp;オンライン 地域の交流拠点とまちの幸せなかたちは 住民主体の交流の場と地域の関係性を捉え直す</p> <p>3つのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●対話の場をつくる【拠点と地域の関係づくり】 わからないから不安を感じ、反対される。小さな不安の積み重ねが衝突を生む。具体的な不安がどこにあるのか傾聴し、正しい情報を届ける。対話をし続ける。</li> <li>●ゆるいつながりをたくさんつくる【拠点の継続】 関わりたいときに関われる範囲で関わってもらおう。入口のハードルは低く。役割に人を充てるのではなく、その人の役割を引き出す。</li> <li>●つなげて支える【コーディネート】 人、もの、金、情報をつなげるのがコーディネーターの役割。情熱をもち、これがしたい！という人なしに新しい取り組みは生まれない。まちは変わらない。</li> </ul>
<p><b>A3</b> 会場のみ 地域は、文化の違う多様な人々とどのように共生していくのか？ 外国にルーツのある人にかかわる事例を検討する</p> <p>3つのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●私たちは同じ問題に向き合っているという自覚 国際交流協会と社会福祉協議会に持ち込まれた事例に、それぞれの団体の特性による違いはなかった！</li> <li>●マジョリティ側の無自覚さに気づく 例えば、外国人であること、日本語ができないこと、日本での生活に馴染めないことから起こる問題行動を安易に障がいではないかと決めつけない。</li> <li>●協働で「多様性を地域の当たり前！」に一歩ずつ近づく 国際交流協会と社会福祉協議会、それぞれで対応しがち。お互いを知り、協力しあえば、お互いの強みが活かせる。事例検討はお互いの役割や価値観、強みや弱みを理解し、違う視点に気づける。</li> </ul>	<p><b>A4</b> 会場&amp;オンライン 他分野との協働による地域づくりを考える 「今日どう？」の関係を作りあげる秘訣☆</p> <p>3つのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●相手を知ろう。まずはここから</li> <li>●待ってるだけではなく、積極的に自分からアプローチ</li> <li>●協働⇒今日どう？ ↓ 今日どう？⇒協働</li> </ul>
<p><b>A5</b> 会場&amp;オンライン えっ、その表現って、どうなの？ 言葉から考えるボランティアの価値 Season 2</p> <p>3つのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●分科会の様子 / 参加者の顔ぶれ それぞれの現場でモヤモヤを抱えている人が8割。モヤモヤし尽くした人、何となくモヤモヤと向き合い始めた人が各1割程度。</li> <li>●ディスカッションにおける印象的なフレーズ ・「ボランティアの主体性」と言いつつ、実際はボランティアを客体化してしまっている。社会制度がそうした土壌（前提）をつくっている。 ・所属組織でも、ボランティアの本質が置き去りにされている現状がある。 ・ボランティアを「自治」の視点で捉え直す必要があるのではないか。</li> <li>●運営メンバーに課せられた宿題 ・「事前アンケートの対象が狭い（仲間内の議論になっている）感がある」 →この議論をいかに開いていくか（社会に問うていくか） ・「モヤモヤし続けることが大事」 →吐き出し（共感）の場づくり</li> </ul>	<p><b>A6</b> オンラインのみ 違いや多様性は“混ざる”からこそ意味がある 「つなぐ人」がいることで何がどのように変化するのか</p> <p>3つのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●混ざる効果＝自分の不得手へは誰かの得意変化することを恐れない 混ざるとは楽しいことにつながることを信じる。</li> <li>●キーマンを探す、つながる人探し。 つながりは「キャッチボールではなく手をつなぐ」こと 当事者に委ねない。時には汗をかきながら、時間・経験の共有からつながりを深める。</li> <li>●活動が拡がったら、リフレーミング 気づきなおすことも必要 ひらめきは学習から つなぎ方／つながり方→会いに行く・話をする 印象に残ったことば。自分の中の加害者性・被害者性に気づくこと</li> </ul>

A7

オンラインのみ

### 高齢化・人口減少コミュニティにおけるコーディネーション ウチとソトをつなぐチエとワザ

3つのポイント

チエとワザ!!

- 「話かけられやすい人！」  
周りが気軽にあの人に話してみようと思われる雰囲気
- 「ちっちゃな渦をつくる」  
ちっちゃくても動く（開く）、渦が消えることがあっても続ける
- 「楽しい、楽しむ」  
人と人、日本人でも外国人でも、楽しいことは楽しい（続く）

おすそわけ文化？

おどしスタイル？

A8

オンラインのみ

### ボランティアは「オワコン」か？

研究の最前線から学ぶ、若者のボランティア参加

3つのポイント

- ボランティア活動への逆風  
NPO/NGOのリーダーは、信頼されていない？！
- ボランティア活動の意義の可視化・物語化  
若者の就活・生活時間を取り巻く構造変化より、タイパを意識せざるを得ない  
若者以後の長い人生を考えると、短期・断片的な枠組みも理がある
- 大学（ボラセン）の役割  
学生も地域の一員であるということが、みえづらくなってきている？

B1

会場&オンライン

### ボランティア、管理しすぎていませんか？ —災害ボランティアセンターを事例に—

管理を超える、コーディネーションを目指して

3つのポイント

- 管理・統制と即興・自律
- 関係団体との連携・協働  
(普段からのつながり、認識の共通化、地域の力を引き出す)
- 長期的な視点が管理を超える

B2

会場&オンライン

### 地域づくりのパートナーに生協を選んでみませんか？

生協との連携事例からつながり方を考える

3つのポイント

- 4人の登壇者の報告とグループ交流から
1. まずは仲間づくり（生協も社協もNPOも同じ仲間だった）  
行動を起こす、相手を信じて、鎧を脱ぎ、夢を語り合っ、何かできるかもしれない予感・・・
  2. 信頼関係からつながりの広がり連鎖へ  
相手を知り、信頼関係が生まれ、目指している事、大事にしていることは同じ。連携の可能性が生まれる。⇒未来への希望になる。
  3. 失敗を恐れずに、近江商人の三方良しの精神で連携しましょう  
⇒自分に良し、相手に良し、世間に良し、未来に良し

B3

会場&オンライン

### 「ホンモノの地域共生社会」を実現するために 大学に求められるコーディネーションとは

そのカギは「応答性」にあり!?

3つのポイント

地域共生社会づくりに学生が関わるポイント、どうしたら自分事になっていくか

- 活動後の振り返り・事後学習、自然にわいわいオモイを語り合える場の重要性  
⇒地域の人や先輩からの話を聴く機会  
⇒そのファシリテートも学生自身ができれば
- プログラムの中で、完全に決められた活動ではなく、ゼロから丸投げでもない「余白」のあるプログラムを設定
- 最初の時点から大人（地域の人・教職員）と学生の認識のすり合わせ  
⇒大人が言い過ぎず一緒に考える、頼ってみる、信じてみる
- そもそもコーディネーターが多くのリソースをもっているかが重要  
⇒普段から地域に出る  
学生を「学生」という存在でなく、「地域住民」として捉えることが大事

B4

会場のみ

### 改めて「コーディネーター」に向き合う哲学対話

3つのポイント

- コミュニティボール、円座、8つのルール
- 問いの森→哲学対話→作文
- 2つの問い
  - ・ きっと **対話があたりまえになった** ときはコーディネーターは必要とされないだろう
  - ・ コーディネーターの仕事を一言で説明するならば **調整係** ではないか

B5

会場のみ

### どうするボラセン！

ボラセンの役割と機能を問い直して、モヤモヤ解消、明日からの実践に

3つのポイント

- 地域福祉部門が確立してきた。社会課題を前にしてボラセンは元気がない。どうしたボラセン！悲観するな！
- ボラセンは自由、何かしたいという相談、人と出会う、ソーシャルキャピタルをつくっていることを自覚する。
- やりたいと思ってもすべてできるわけではない。組織との関係、日々の業務に追われることもある。やれないことは、やりたいリストを心の中につくる。いつかやる。そのうちやる。

B6

オンラインのみ

### 地域の多文化共生をのぞいてみよう

外国人住民と共に考え・共に創る地域社会

3つのポイント

- 事例発表者から、多文化共生のための取組みについて、地域づくり、ビジネス（人材育成）、福祉、教育の観点からそれぞれ話を伺った。その後、事例発表を踏まえて参加者間で話し合い、多文化共生を実現するために大切なこととして、つぎのことを共有した。
- 「外国人」「日本人」という枠を超えて、同じ住民どうしの関係性、名前で呼び合う関係性を構築する視点が大切。
  - 外国人や多文化共生にネガティブな感情を持っている人たちに対して、日本人・外国人双方が理解するための粘り強い双方の働きかけが大切。また、人権問題には毅然とした対応が必要。
  - 日本人と外国人がお互いに歩み寄るために、「核」（生活上の課題、食事や祭りなどの機会）を共有することが大切。



B7

オンラインのみ

## 子どもの事例からセーフゲーディングについて学ぶ

利用者とボランティアを、組織として守る

## 3つのポイント

- **そもそもセーフゲーディングとは、**  
子どもに虐待・搾取などいかなる**危害**もおよぼさないよう務めること  
であり、万一、活動を通じて子どもの安全にかかわる懸念が生じたとき  
には、しかるべき責任機関に報告を行い、それを**組織の責任**として  
取り組むこと。
- セーフゲーディングの一番大事なことは、**相談。大事なことは予防的  
な取り組み。**
- セーフゲーディングでは一般的には禁止となっていること（連絡先交換  
や身体接触）でも、個々の団体のケースによって異なるので、**団体の  
色をつくる**ことが大事。セーフゲーディングは「**石垣**」のようなもの。

B8

オンラインのみ

ボランティアな取り組みを誘発する  
「学び合いの場」の

「学ぶ」と「動く」の好循環プロデュース環をつくるために

## 3つのポイント

- 研修（講座）は、分かりやすい「仲間づくり（連携）」の方法  
※研修までのプロセスも「仲間づくり（連携）」  
まだ『出会えていない【誰か】に出会うために』
- 自分をアップデートし、新たな自分と出会う営み。  
※課題解決≒価値創造（住民の自治能力の向上）  
ソフト（学習プログラム）ではなく、OS（意図しない学び・主体的な  
活動が起こりやすい環境）をつくる（意図する学び/意図しない学び）
- 対話から等話へ、主体性を引き出し、「自分ごと」化。  
※「学びあう」と「動き出す」（ものさしの変化（視点）、変化する  
勇氣）、居場所と出番（舞台）

## 明日からの行動宣言（slido/スライドウより）

自分のマジョリティ性を確認しつつ、石垣を協働して積み上げていきます。／やり続けるために やりはじめる  
／まち中の「中間支援」のような役割をしているいろいろな場・機会を訪れてみたい。／客観的な数多と目  
に見えない繋がりを両立したコーディネート（学生に社会や地域が抱える課題を伝えるのは数値、学生の実態  
を知ることやモデルケースと出会わせるのは目にみえないつながりのちから）・コーディネーターとしてリソ  
ースを少しでも増やせるように、研究集会やイベントに継続参加する・何においても対話が大切／オープニ  
ングセッションでのお話「マジョリティーの可視化」を日頃からしていこうと思う。地域、職場、被災地など  
など、おかれた場所によってマジョリティーが違ってくるというのがガツンとききました。／対話／今あるボラン  
ティアの学び、体験のプログラムを全見直し、マジョリティーの特権に気づくエッセンスを取り入れたものに進  
化させて、参加者に「はっ！」とするもの提供したい。／やりたいことは、実行！出来ないことは、心に秘め  
ておきチャンスを待つ。つながりを大事にそして活かす！／プロセスを楽しむ！／子ども・若者の居場所にな  
る拠点づくりのためのコーディネーターの育成（JVCC でのつながりを活かすために、名刺交換した人に自分か  
らメールする／関わる人、団体の力を信じ、伴走を見極める力をつける。・肩書でなく、個人を見て、決め  
つけをせずに丁寧な対話をする。／人と人がつながっていくことを楽しむ／地域のゆるいつながりを少しずつ  
広げていく／地域の外に出ていく、外とつながる／小さなことでも話してもらえるような関係作りができるよ  
うにする／意識を変える！協働のタネを探し、「やってみる」を意識して地域に出ていきます！／派遣では無  
く紹介なのだど話しつつける。／なぜつながりたいのかを整理、まとめて相談させていただく。／今日の分科  
会が非常に学びになりました。まずは現場でセーフゲーディングについての話をし、徐々に職場内にセーフ  
ゲーディングの視点を意識してもらおう。そして、組織的に対応できるように進めたいと思います。／講座で得  
られる直接的な学び以外の「その他部分」を意識的にする／まず1歩！！やらなきゃいけないことは山積みで  
すが、出来ることからまず1歩！！／学び、学んだことを活かして、活動する。／セーフゲーディングについ  
て、メンバーで共有する。／手を繋ぎ、住民主体を軸に、ともに汗を流す。／関係者との対話を続ける／頑張  
りすぎず、住民の主体性を引き出す仕事をこころがける／発信をする！地道でも着実に。／頭を柔らかかに、視  
野を広く、そして面白がって行動したい。／多くの人と出会い・対話して対等なつながりを広げる役割を果  
たしてみたい／★頑張りすぎないこと（相手の役割を奪わないこと）→そのための準備をしっかりする（話をよ  
く聞く・対話）★学んだことを今後のコーディネートや研修企画にいかす／自分だけで頑張りすぎず周りを  
巻き込む！・学んで活かして活動！・まず一歩！！！！頑張りすぎずに住民の主体性を引き出す。／共通の  
夢や思い、目標をまずは確認するところから始める。／引き続き、行動あるのみ！でがんばります。／学び続  
け、動き続け、アウトプットし続ける／「あの人に話したい！」と思えるコーディネーターに！人に！／日頃  
関わりのない社会課題を学ぶ機会を積極的に持ち、情報、対話、ネットワークのウィングを広げる。常に楽し  
い、ワクワクを。そして、頑張りすぎない、時に気づいたままにする。／コーディネーションを楽し  
む！！！！／社協PR(広報 - Facebook、民生委員定例会等)／地域で夢を語り合う仲間を増やす！／学びを動き  
に変えるために、V-Co が伴走する覚悟を持つ／話しかけやすい雰囲気づくり／未来のために、今自分にできる  
ことを行動し続ける。非営利協働組織の横の連携作り（生協、社協、JA、NPO）／子どものセーフゲーディング  
の知識を助成金のプログラムや社員派遣に関してマニュアル化や行動方針を作る／ボランティア教育（新任・  
既存）の立て直し・・・まずは過去事例の振り返り／ほっとできる場を作り続ける 一歩ひいて、振り返り検証  
する場をつくる／ごつつう怒られると思っても、先に行動しちゃうのが吉／明るい未来を語れるように／つな  
がりや仲間づくりを大切に、いろいろな地域課題に答えられるようにしていきたい。／改めて黒子として種  
まき、ネタ探し、広告塔の働きを頑張る!!→100 個種を撒いて1つでも収穫できれば良いじゃない／長期的な意

識をもって事業に取り組むこと。多様な参加の方法を意識しておくこと。時代の変化に合わせて、やり方を変えていくべきところがある／地域に出る。地域と学生と対話する。地域と学生が対話できるコーディネーションを実践する。／読書会に向けて、「ボランティアの誕生と終焉」を読む（インプットからの学びを増やす）／自分のコーディネーション実践を通して、ボランティアという表現に込められた価値を伝える／単発から深く関われるものまで、バリエーション豊かな企画づくりをする。／20代の会を継続的にやる！！福岡・大阪の会の開催／自分から動いてたくさんの方とつながる。つながって得たことをコーディネートで対応したい。／直接会いに行く／開かれた施設づくりを目指して、施設でどのようなことが出来るかという視点で、地域課題を明確化したい！⇒地元の社協に出向いて話を聞く（明日は日曜日なので明後日に行きます👉）／分からないからやらないではなく。繋がりを作ろう。役場、社協、ママ友繋がりがつくりたい！／やってみよう！気になる！何事も行動化！／学生と地域の方との其々の思いを分かちあえるようなボランティア活動の枠組みをつくってみたい。／・企業とのつながりつくるために→講座に参加やボランティアに参加してくれたら、やってくれた事を広報する、広げる。・ボランティアやりたい人の一歩を出やすくするため、LINE、HPなど工夫する。／外回りして、顔繋ぎします。／会った人に連絡をとってまた会う、話す機会をつくる／ボランティアの意思や希望を大切にしたいコーディネートを心がける／社会に必要なと感じたことは、先ず自分から行動し、周りの方と対話を通じて実現していく／ボランティア、ボランティアコーディネートについて、モヤモヤ（考える）続けます。少なくとも1日1回。／自分の中にあるものをとりあえず話してみる！／とりあえずやってみる！／・友だちづくりをしていきたい・広報ページの更新サボらずやります／変化に敏感に変わり続けるコーディネーターに／広くてやや深い関係づくりのため、外に出る！／・(大学VCで)プログラム作成の際には、余白まで考えて設計する工夫をする。・学生の活動、体験を言語化させ、成長につながる際には、物語化できるように意識してサポートする。／目的:継続的なかわり 行動宣言！！他大学・社協に遊びに行く！！／協働をもっと楽しく！！／自分の頭の中で考えるよりも、まず積極的に行動に移そうと思いました。／カレー屋に行く！サッカーをやる！／参加させていただきありがとうございました。良い気づきがたくさんあったので、持ち帰って他の職員と共有したいと思います。／つながりを求めてさまざまな場所へ足を運ぶ。必要だと思ったことに対してはすぐ行動に移す！／アイデア出しの時間を作る 地域の集まりになるべく顔出す 今日の気づきを上司に報告、課内会議で共有／・自分の思い・考えを言語化するトレーニング ・対話する／1日1回『今日どう？』／自分の立場（特権性）を自覚する それぞれの主体の力を生かしたコーディネーションをする／①住んでいる地域の市民活動している方々とつながる、②職場で今日の話シェアする、③ボランティアコーディネーション力検定を受ける／恐れずに価値観の異なる人たちと対話を重ねる。／あきらめない。つながりなおす。／ボランティア育成ビジョンの作成と学生との対話／やりたいと思ったらやる！！今、今の組織の評価は関係ない！！／まずは仲間に伝えてみる／自分の立ち位置やまなざしを常に意識しながら、良いご縁をつなぎたい！／一期一会を大切に🌟自分の繋がりを、誰かの繋がりに！／自分もまわりも信じて進む！／コーディネーターとして、モヤモヤし続ける。発信をし続けることをあきらめない／春学期になったら、学生が憧れの先輩に会える、学生企画の意見・情報交換会を開催し、そこにテーマにあった地域のNPOの方にゲストにおよびたいと思います。

## 参加者の声

- ・グループワークで振り返りをした時に、大きな枠で見た時に同じような目標を持って活動をされている方のお話も聞けて、改めてこれからの活動に向けて良い機会になったと感じました。
- ・コーディネーターは孤立しがちですが、こういう場があることで全国の皆さんとお話しできます。他の分科会の話も聞けたし、気持ちもアイデアも共有できて、楽しかったです。来年はリアルにお会いしたいです。
- ・急遽、能登の話を入れていただき感謝です。コーディネーターとしての姿勢を見つめ直す時間となりました。
- ・仕事でボランティアがなかなか増えないという声をよく聞いたが、今回、この研究集会に参加し、こんなにボランティアのことについて、一生懸命取り組んでいる方が多くいることに気付きました。また、新しい視点をお教えいただき、とても感謝しています。
- ・全然違う立場の人達だからこそ、新鮮に話せてよかったです。



## 交流会

「はじめまして♡」「おひさしぶり！」  
やっぱり、リアルに会って話すといいね。



1日目のプログラムを終えて「交流会」を開催。ひさしぶりにこの風景に出会えました。北は北海道から南は九州まで、会場からあふれんばかりの人たちが参加。荷物を預けるとさっそく話に花が咲きます。懐かしい出会いとともに、「はじめまして」の出会いもたくさんありました。

会場内で、日本地図のように北から南へと地域ごとに並んでみたり、持ち寄ってくれた地元自慢のお土産を紹介したりと、ファシリテーターの声掛けでプログラムが進みました。乾杯！とともに会場は熱気に満ちて、あちらこちらから「おひさしぶり～」とか、「実物に会うのは初めてかも～」との再会(?)を喜ぶ声が響きました。

参加者数

85名

- 交流会担当者 江坂静子（東京都つながり創生財団） / 鹿住貴之（JUON(樹恩)NETWORK）  
熊谷紀良・榎本朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

## つながり広場

## 書籍販売・展示・動画視聴・情報交流…

日時:2月23日(金・祝)・24日(土) @12階 D室

参加者同士・参加者とJVCAがつながる「つながり広場」をJVCC期間中オープン。メイン企画(オープニング・クロージングなど)が10階だったこともあり、大混雑の時間帯こそありませんでしたが、期間中、多くの方にご来場いただきました。

### ○書籍コーナー

JVCA、東京ボランティア・市民活動センター(TVCA)、大阪ボランティア協会関係の書籍を販売しました。JVCAは、ブックレット(グッドプラクティス事例集)中心に書籍紹介・販売を行いました。

### ○JVCAコーナー

JVCA入会・年会費納入受付や活動紹介パネル(掲示物)が充実。動画「旅するJVCA(会員登場企画)」「教えてミカさん(ボランティアについて理解を深める動画)」の紹介コーナーや記念撮影用の「かぶりもの」も登場しました。

### ○情報・資料コーナー

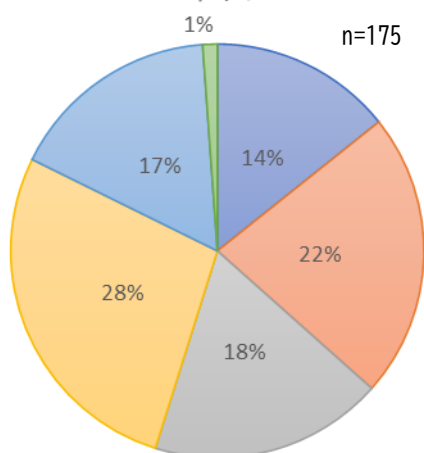
参加者のみなさんの団体紹介、機関紙、イベント案内など、並べていただきました。



●運営担当:JVCA 運営委員有志

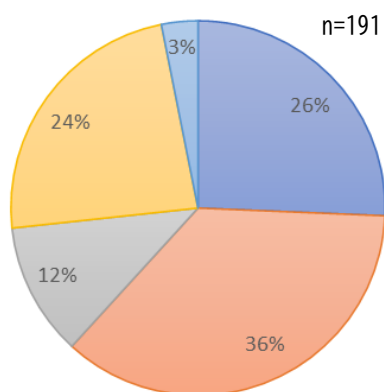
# データでふりかえる JVCC2024

## 年代



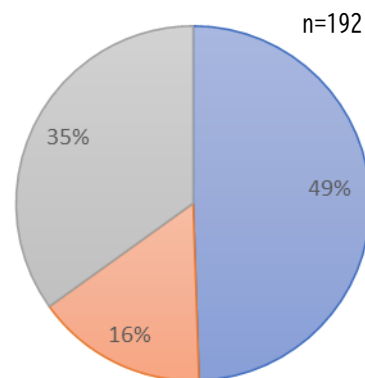
■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代 ■ 70代

## CO活動形態



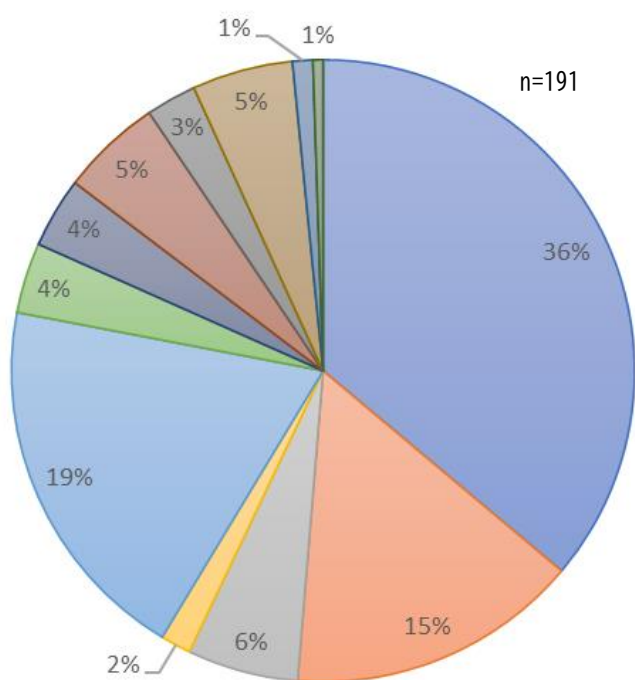
■ 専任で担当 ■ 兼任で担当 ■ 以前担当  
■ 未経験 ■ 今後担当予定

## JVCCの参加回数



■ はじめて ■ 2回目 ■ 3回目以上

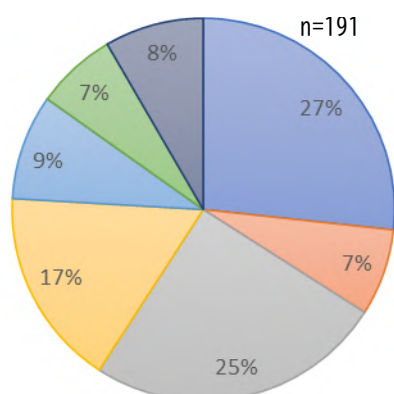
## 活動分野



■ 社会福祉  
■ 大学・学校  
■ 国際交流・協力  
■ 国・自治体  
■ 中間支援  
■ 保健・医療  
■ 青少年育成  
■ 協同組合  
■ その他  
■ まちづくり  
■ 社会教育  
■ 環境保全

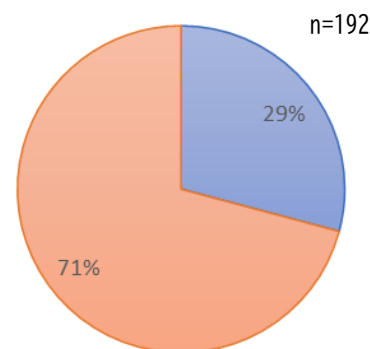


## CO経験



■ 未経験  
■ 1年未満  
■ 1年以上～5年未満  
■ 5年以上～10年未満  
■ 10年以上～15年未満  
■ 15年以上～20年未満  
■ 20年以上

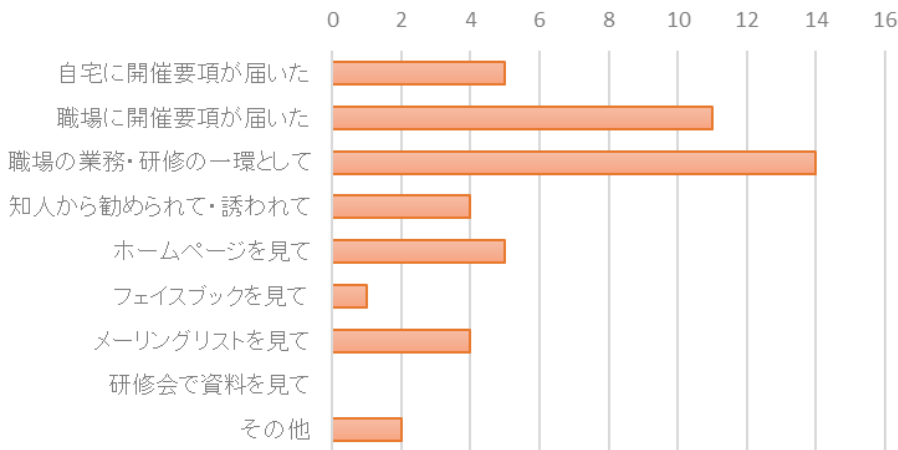
## JVCA会員



■ 正・準会員 ■ 一般 (賛助会員含む)

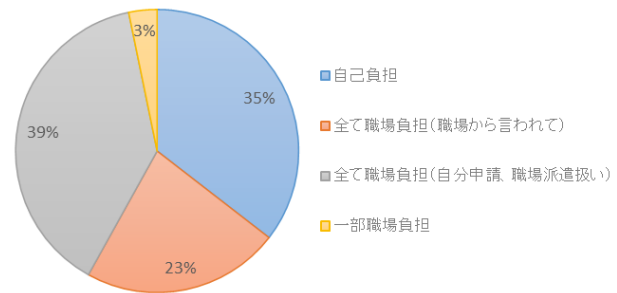
## 参加のきっかけ

n=31 ※複数回答可

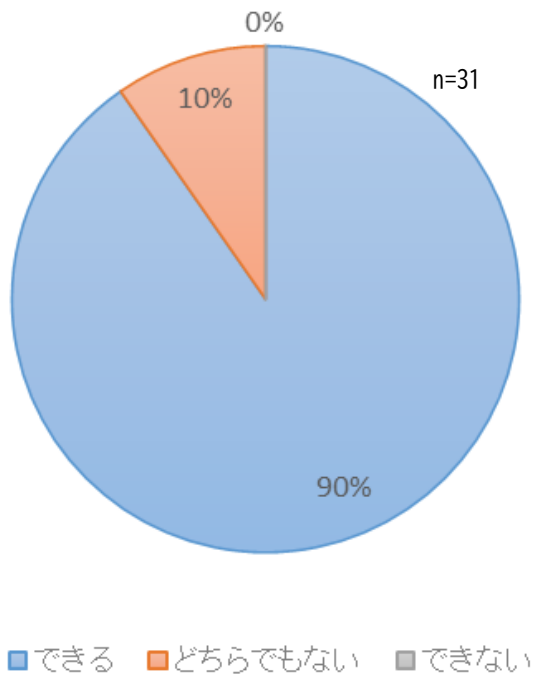


## 参加費負担

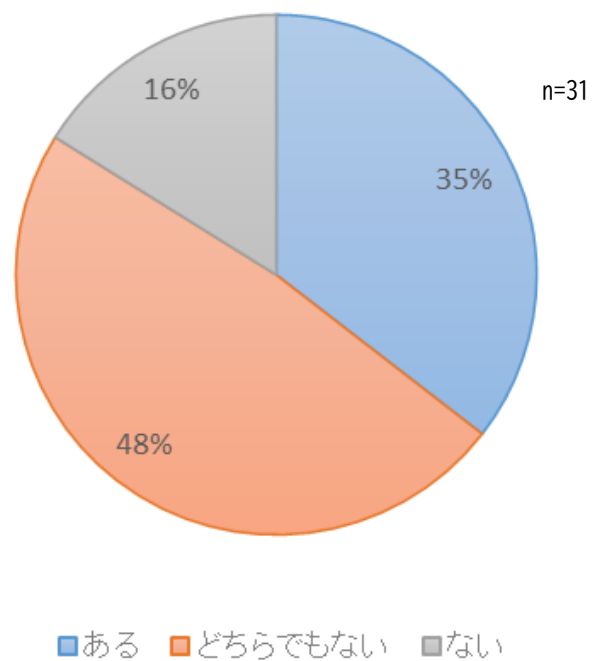
n=31



## 職場や地域での学びの活用



## 職場や地域での企画の意向

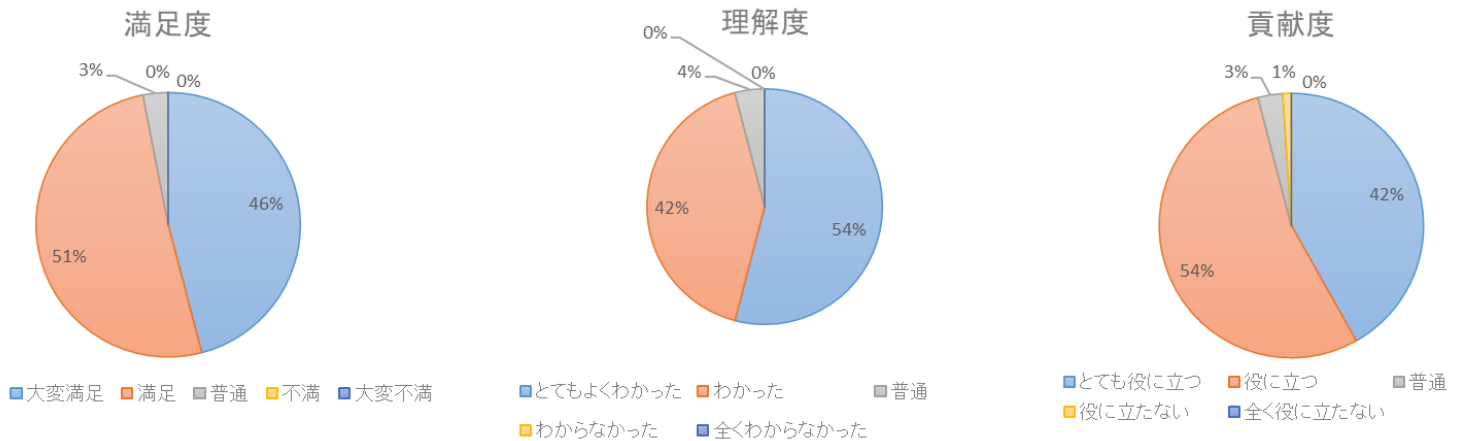


## 具体的な活用方法や場面 (回答の一部)

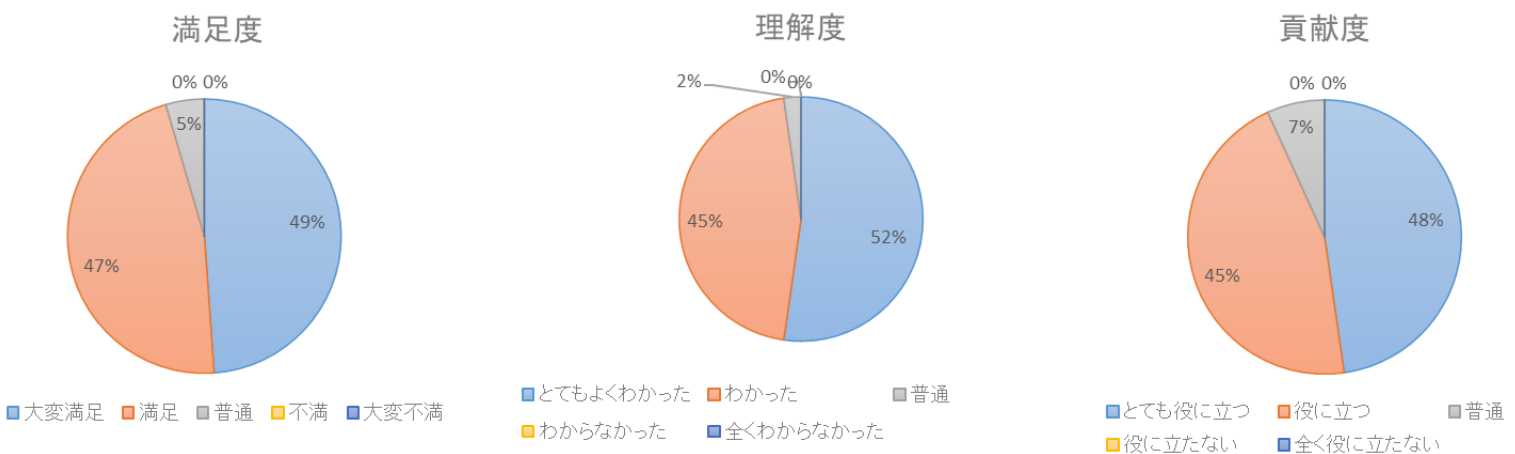
- ・職場において、セーフガーディングの視点を取り入れた研修を実施しようと思う。
- ・中間支援組織として協同組合に地域での連携を呼びかけるときのヒントになりました。
- ・ボランティア説明会では、ボランティアセンターの使い方だけでなくそもそも地域が抱える課題について話し、動機づけをしたいと思う。
- ・京都めざして歩き出す！
- ・ピンチをチャンスととらえるマインドで課題に対峙する。
- ・人脈を使って、更に新しいことに挑戦。
- ・今までの研修スタイルが、一方的に受講する形式ばかりだったので、参加者同士触れ合える時間を設ける。
- ・今すぐは思い浮かびませんが、業務の中で、「あ、この場面で活かそう」と思い出しながら取り入れていきたいです。

## 各セッションの満足度、理解度、学びの貢献度

### A 分科会 n=98



### B 分科会 n=88



### 特に印象に残ったセッションや報告内容、登壇者の言葉（回答の一部）


- ・参加した分科会やセッション、全てのお話が今後の参考になりました。その中で、特に B8 で事例紹介をされた那覇市若狭公民館の宮城さんの研修は、自分を更新し、新たな自分との出会いのきっかけという言葉と、何かを行う時は目的、ありたい姿を考え、それに沿ったプロセスが大事ということを話されていたことが印象的でした。
- ・研修は学びの場でもあるが、仲間づくりの場である。学んだことを活かせる場を提供することも大切。
- ・A2 で山田さんが「太い軸(線)が数本あるよりも細い糸(線)がたくさんあった方が面としては強い」とおっしゃっていたので、もっともっと気張らない地域のつながりをたくさん作っていきたいと感じました。
- ・オープニングセッションが一番印象に残りました。マジョリティの特権性について知ることができました。
- ・B6 の事例発表したエムディさんのムスリムの人たちのお墓の問題。お寺の協力を得て、土葬できるお墓を確保したところは、今後の取組みの参考になる。
- ・A8:物語化 B3:先輩への憧れ というキーワードが心に残りました。
- ・マジョリティへの障害は、自動ドア / コーディネーターが繋ぐ=手を繋ぐということ / 頑張りすぎないこと

## 市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会2024 実行委員名簿

No	氏名	所属	No	氏名	所属
1	青木 覚	日本協同組合連携機構(JCA)	23	永松 誠	千代田区社会福祉協議会
2	足立 陽子	淑徳大学地域共生センター	24	疋田 恵子	杉並区社会福祉協議会
3	粟澤 稚富美	社会教育協会ひの社会教育センター	25	平林 秀敏	川崎市社会福祉協議会
4	池畑 雄太	渋谷区社会福祉協議会	26	藤居 昌行	小平市社会福祉協議会
5	梅澤 稔	いたばし総合ボランティアセンター	27	藤井 美香	横浜市国際交流協会
6	上田 英司	日本NPOセンター	28	藤掛 素子	中央大学 ボランティアセンター
7	江坂 静子	東京都つながり創生財団	29	牧野 大樹	横浜市港北区社会福祉協議会
8	開澤 裕美	中央大学 ボランティアセンター	30	明城 徹也	JVOAD
9	鹿住 貴之	JUON(樹恩)NETWORK	31	宮崎 雅也	日野市社会福祉協議会
10	勝井 裕美	シャプラニール=市民による海外協力の会	32	武藤 祐子	千代田区社会福祉協議会
11	加藤 悦與	神奈川県立こども医療センター	33	村松 清玄	シャンティ国際ボランティア会
12	唐木 理恵子	細ワークス	34	文珠 正也	労働者協同組合 ワーカーズコープ・センター事業団 関西事業本部
13	菅野 道生	淑徳大学 総合福祉学部	35	矢富 明德	佐賀県国際交流協会
14	菊池 哲佳	多文化社会専門職機構	36	山田 翔太	世田谷トラストまちづくり
15	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	▼運営サポート		
16	齋藤 尚久	日本社会教育士会		榎本 朝美	東京ボランティア・市民活動センター
17	杉浦 健	共働プラットフォーム	▼担当理事		
18	手嶋 俊平	川崎市社会福祉協議会		早瀬 昇	大阪ボランティア協会
19	富澤 真麻	埼玉県立小児医療センター	▼事務局		
20	薦 直宏	日本生活協同組合連合会		後藤 麻理子	日本ボランティアコーディネーター協会
21	直井 友樹	横浜国立大学大学院		神保 彩乃	日本ボランティアコーディネーター協会
22	中谷 隆秀	長野県生活協同組合連合会		梅田 俊樹	日本ボランティアコーディネーター協会

## 実行委員会 開催実績

回	開催日	主な協議内容
準備会	2023年 4月24日(月)	実行委員会の人選、依頼内容、態勢・役割分担等
オリエンテーション	5月27日(土)	初参加の委員へのオリエンテーション、顔合わせ
第1回	6月17日(土)	開催趣旨の確認、現場での課題出し、キーワード抽出等
第2回	7月10日(月)	問題意識の整理、分科会テーマ等につながるキーワードの抽出
第3回	8月 6日(日)	キーワード整理、分科会企画のプレゼンテーションと意見交換
第4回	9月 2日(土)	分科会企画のプレゼンテーションと意見交換、全体テーマの協議
第5回	10月 1日(日)	全体テーマの決定、分科会企画のプレゼンテーションと協議
第6回	10月29日(日)	オープニング企画、全体の枠組みの過不足協議と開催要項作成要領
第7回	11月 7日(火)	分科会の確定、開催要項の内容協議
第8回	11月20日(月)	開催要項の確定、広報対策と役割分担、その他のタスク確認
第9回	12月 9日(日)	広報戦略立案、当日までの段取り確認
第10回	2024年 1月14日(日)	広報(集客)、当日のロジ確認、クロージング企画
第11回	2月 4日(日)	運営最終チェック、準備進捗確認、クロージングの進め方確認
第12回	3月31日(日)	研究集会の振り返り



市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会報告書

発行日：2024年3月31日

発行者：認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会